

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ボルネオ島サマ人による漁撈の「近代化」と「伝統」：陸サマと海サマによる漁撈の比較をとおして

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 林太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003960

ボルネオ島サマ人による漁撈の「近代化」と「伝統」

—陸サマと海サマによる漁撈の比較をとおして—

小 野 林太郎

“Tradition” and “Modernity” in Fishing among the Sama,
Eastern Coast of Borneo, Malaysia

Rintaro Ono

東南アジア海域世界のボルネオ島サバ州東岸域（センボルナ）に居住するサマの漁撈活動は、伝統的な側面を残しつつも、1960年代以降における国家の出現、急速な新技術の導入、人口増加による漁獲量の激増と沿岸資源量の減少といった急速な「近代化」による影響を受けてきた。本稿では近年におけるサマの漁撈について、居住戦略の異なる二つのサマ集団「陸サマ」と「海サマ」世帯を軸に、漁具、漁法、漁撈活動、漁獲高、販売、食生活に関わる定量的分析から、サマの漁撈活動にみられる「近代化」と「伝統」の諸相を明らかにする。

まずサマの伝統的な漁撈と近代化がもたらした変容についてを概観し、近代化の影響をうけた側面として、陸サマ世帯における漁撈人口の低下をあげる。その背景には、より安定した現金収入をみこめる賃金・給与労働の普及や、漁撈活動に対するさまざまな規制や資源量の低下が指摘できる。こうして生業としての漁撈から離れた陸サマ社会では、経済的コストが低い釣り漁や、政府からの支援による海藻養殖といった新たな漁撈形態への移行がみられる。その一方で、漁場、利用される漁船、操業人数においては、伝統的な漁撈との共通性も確認された。

さらに海サマによる漁撈活動は、伝統的な側面がより強く残っており、経済的コストは高いが、漁獲効率も高い網漁への依存が強く、1回あたりの漁撈時間もより長い。海サマ世帯にみられる伝統性は、漁撈が生業の中心となっている状況や、キャッサバ消費の高さという食生活においても確認された。しかし、その背景には海サマ世帯の漁撈への嗜好や思い入れだけでなく、マレーシア国籍のない海サマ世帯には漁撈以外の就業機会がほとんどないという、近代化にともなう社会的規制の存在もある。

* 国立民族学博物館外来研究員

Key Words : Maritime Southeast Asia, Borneo Island, Sama, fishing activity, tradition, modernity

キーワード : 東南アジア海域世界, ボルネオ島, サマ, 漁撈活動, 伝統, 近代化

こうした社会的規制を背景に、マレーシア国籍をもつ陸サマの仲買世帯と、国籍をもたない海サマ世帯の間には、漁獲物の安価な提供に対する身元の保証を前提とする階層的な社会関係の形成が確認された。しかしその関係性は、東南アジア海域世界でより一般的な資本の提供者と被提供者からなる経済的な雇用関係というよりも、サマという共通の言語や文化を背景とした、個人や世帯レベルでの人間関係を基礎として成立している可能性を指摘した。

This paper aims to analyze tradition and modernity as reflected in fishing and fishing societies among the modern Sama, who live on the east coast of Sabah in Borneo Island, Malaysia, by comparing two groups: the “Land Sama” and the “Sea Sama”, who have had different histories of immigration and settlement since the 18th century.

Based on a quantitative analysis of the ownership of fishing vessels, engines, and gears, together with practical data on methods, times, catches, and efficiency of each fishing activity, I reveal some aspects of tradition and modernity in Sama fishing.

Concerning modernity, the number of fishermen is decreasing among Land Sama households. The recent diversification of subsistence and higher employment opportunities among the Land Sama, together with a drastic decrease in coastal resources are the possible major factors. While fishing has declined to become an unpopular and minor subsistence in the society as a whole, some households have begun low cost fishing such as hand line fishing. Others who once engaged in fishing are now shifting to other related ventures such as aquaculture of the sea weed agar-agar.

On the other hand, all Sea Sama households still engage in fishing as their major subsistence as they did in the “traditional” age. The major fishing method among the Sea Sama is net fishing, which needs high economic and labor investment, but produces a larger catch than other fishing methods. Net fishing is one of the major “traditional” fishing methods of the Sama. A food consumption survey also revealed that Sea Sama households eat more cassava, which is recognized as a traditional food by the Sama.

My observations also confirmed that the disadvantageous social status of the Sea Sama as illegal immigrants or refugees might result in a high performance in fishing, since it is an activity which such immigrants can easily conduct. Furthermore, based on contracts to produce fish cheaply price in exchange for the acquisition of a guarantee called “jalminan”, a stratified social relation has been formed between the Land Sama fish buyers and the illegal Sea Sama fishermen. However, this social relationship is not similar to the patron-client partnership formed between capital and labor, but is essentially based on a common language, ethnicity, and culture as Sama, and formed at a personal or household level between Land Sama and Sea Sama.

1 はじめに	4.4 漁具の所有状況
2 調査対象・調査地・調査方法	5 現代サマの漁撈活動
2.1 サマについて	5.1 おもな漁法
2.2 調査地の概況	5.2 漁法の選択と漁獲効率
2.3 調査方法	5.3 漁獲の販売と取入
3 伝統漁撈と近代化の波	5.4 漁獲の流通と消費
3.1 サマの伝統漁撈	5.5 漁撈を介した社会関係
3.2 近代化の波	6 現代サマの漁撈にみられる「伝統」と「近代化」
4 家計の多様性と資本の所有状況	6.1 サマ漁撈と「伝統」
4.1 漁家世帯の割合	6.2 サマ漁撈と「近代化」の諸相
4.2 漁船の所有状況	
4.3 エンジンの所有状況	7 むすびにかえて

1 はじめに

海と森という生態基盤が人間の生活空間として長く重要性を帯びてきた東南アジア海域世界は、生業としての漁撈活動、あるいは漁業が歴史的にも重要な地域である。その傾向は、約3,500年前に遡る新石器時代期より、この地域に形成された遺跡群から多種におよぶ大量の貝類や魚類が出土している事実からも指摘できる（Bellwood 1997; Ono 2003, 2004; 小野 2004）。

実際、東南アジア海域世界における漁撈、あるいは経済行為としての漁業を対象とした研究の蓄積は少なくない。しかし、その多くは水産学、漁業学、経済学といった分野からの研究に集中してきた。一方、漁民や漁撈、漁家経済そのものを対象とした現地調査をともなう人類学的研究は、1960年代頃より散見されるようになった¹⁾。これらの先行研究では、東南アジア海域世界の各地域における漁法や魚の種類²⁾、漁業における雇用関係³⁾、水産物の加工や流通⁴⁾、漁村における経済構造や女性の役割⁵⁾、資源をめぐる規制や紛争⁶⁾といった問題群に対して、具体的事例の提示と検討が試みられてきた。

これらの先行研究において共通しているのは、東南アジア海域世界における漁村経済の柔軟性や漁民の高い移動性、漁撈における新たな技術の急速な浸透、それにとも

なう漁場や対象魚種の拡大といった諸要素の強調である。その背景には、「多島海域」や高い「海洋資源量」という東南アジア海域世界のもつ独自の生態基盤によって形成されてきた漁撈の「伝統」と、国家の出現、動力船や新技術の普及、人口増加、市場のさらなる拡大などによって代表される「近代化」による影響をぬきには語れないという共通認識がみえる。

こうした認識をふまえ、本稿では歴史的に「漁民」や「海洋民」として語られることの多かったサマ、あるいはバジャウと呼ばれる人々を対象とし、近年における急速な「近代化」に対し、かれらの「伝統的」な漁撈活動がどのように対応してきたかを考察する。具体的には、現マレーシア領サバ州の東岸に位置するセンボルナ郡に居住する「陸サマ」と「海サマ」という、居住戦略の異なる二つのサマ集団における(1)漁民の占める割合や漁船・漁具の所有状況、(2)漁法・漁撈活動の実態と相違性、(3)漁撈活動を媒介とした社会関係という三つの視点より比較することで、現代サマの漁撈活動にみられる「伝統」と「近代化」の諸相について論じたい。

このうち(3)については、調査地となったサマ村落でみられた仲買人とその傘下で漁撈をおこなうサマ漁民の社会関係を、東南アジア海域世界の漁民社会や漁村研究のなかで言及されることの多い「パトロン-クライアント関係」との関わりから検討を試みる。東南アジアにおける「パトロン-クライアント関係」とは、漁業経済学者である岩切(1979:22)が定義したように、「海産物の独占買占めを目的とした、漁具資材や資金、生活消費財の前貸しによる投機と高利貸しの機構」としてのイメージが一般的であった。しかし、近年における東南アジア海域世界の漁民研究や漁村研究では、岩切の定義にはあてはまらない資本提供者と漁民の多様な関係性が指摘されている(e.g. 北窓1997,2000)。こうした議論をふまえ、本稿では調査地のサマ社会における「パトロン-クライアント関係」の性格や特徴について整理したい。

また「伝統」や「近代」の概念には研究者や研究地域によって多様性があり、その意味も異なることが多い。これに対し、本稿における「近代」や「近代化」とは、1963年に調査地となるセンボルナ郡がマレーシアという新興国家によって再編されて以降におこった急激な森林伐採、道路の敷設、プランテーション農園の増加といった開発、それに連動する雇用機会や人口の増加、そして動力船や大型魚網、爆薬などの新技術の普及といった一連の過程を意味している。

実際にはこうした動きは1963年以前においても、早くは1873年より開始された英国の「北ボルネオ勅許会社」(North Borneo Chartered Company)による統治期にまでさかのぼるとみることも可能である。その意味では北ボルネオ時代は「近代化」の萌

芽期とも捉えられるが、「近代化」による変容がもたらした影響の規模は、1963年以前と以降とでは決定的な差が認められるように思われる。こうした認識をふまえ、本稿では「近代化」を1963年以降に限定して論じる。

一方、本稿におけるサマ漁撈や社会の「伝統」や「伝統性」とは、こうした1960年代の「近代化」以前にみられた形態を想定している。より具体的には、サマの漁撈や社会形態にかんする文献史料が散見できる18世紀のスルー王国時代から、1960年代初頭までにみられるサマの漁撈活動の中で、共通性の高い側面や変わらなかったと考えられる側面をもって、本稿ではサマの「伝統漁撈」として認識する。このようにあえて「伝統」を定義したのは、1963年以降におこった変容によってサマの漁撈活動の何が変わり、何が変わらなかったのかを、それ以前にみられた形態と対比することで明確化したかったからである。

ただし、筆者は1960年代以前におけるサマの漁撈や社会がまったく変化してこなかったと考えているわけではない。たとえば Sather (1997: 168–172) が指摘しているように、前植民地期と植民地期におけるサマ社会はもちろんのこと、漁撈の内容においても変容した側面があることは自明であろう。おなじように前植民地期においても、スルー王国時代とそれ以前の時代におけるサマの漁撈活動には相違があることも容易に想像がつく。

しかし、スルー王国以前におけるサマの漁撈活動については、文字資料の欠如を理由に、これまでのサマ研究の対象とはされてこなかった。これに対し、民族考古学というアプローチから調査をおこなってきた筆者は、18世紀以前に形成された遺跡群から得られる、過去の漁撈にかかわる考古学データの分析や比較をすすめることで、サマの漁撈史をより長期的な視点からも検討する方法を模索してきた。ただし現時点では、スルー王国時代以前におけるサマの漁撈活動を語るだけの十分なデータが揃っておらず、本稿でも18世紀以前のサマ漁撈については検討することができなかった。むしろ本稿は、より長期的な視点からのサマ漁撈史という大きな研究課題に対する、最初の基礎的作業として位置づけたい。

2 調査対象・調査地・調査方法

2.1 サマについて

本稿が対象とするサマ、あるいはバジャウは、フィリピンのスルー (Sulu) 諸島からマレーシアのサバ (Sabah) 州、インドネシアの東・南カリマンタン (Kalimantan

Selatan) 州, スラウェシ (Selawesi) 全州, 小スンダ (Sunda) 列島からハルマヘラ (Halmahera) のバチャン島周辺まで, 広範囲に分布する。このうちサマは自称, バジャウは他称とされるが (Nimmo 1968; Pallesen 1985; Warren 1971; 青山 2002; 寺田 1996; 床呂 1992; 長津 1997), ここでは統一してサマと呼びたい。このうち, 本稿が対象とするサマはマレーシア・サバ州のセンボルナ郡 (図 1) に居住するサマである。

この地域におけるサマの文献上での明確な登場は, 18 世紀にまでさかのぼる。スルー諸島からボルネオ北東部においては, 18 世紀よりタオスグ人のスルタンを擁し, イスラム色の強いスルー王国が, ナマコ, 黒蝶貝, 干魚といった特殊海産物⁷⁾のバーター交易や奴隷交易を背景に急速に発展した。このスルー王国の主要輸出商品であった特殊海産物の捕獲者や, 商品を運ぶ船乗りや海賊として, しばしばサマが登場する (Sather 1997; Warren 1971, 1981)。

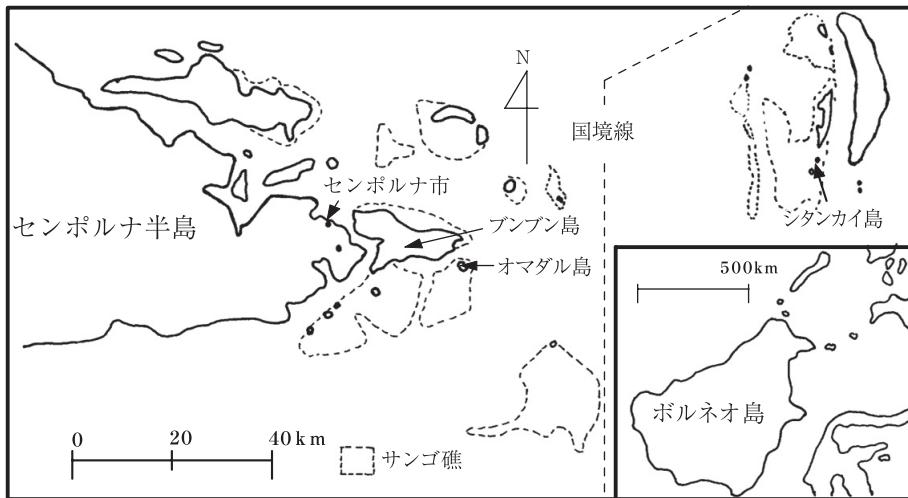


図 1 ボルネオ島とセンボルナ半島の位置

このうち家船居住による移動生活を基本とし, 特殊海産物の捕獲を中心とする漁撈活動に従事してきたグループは, 調査地において *Sama Dilaut* (Dilaut = 「海」) や *Bajau Laut* (Laut = 「海」) と呼ばれる。そこで本稿では彼らを「海サマ」と呼びたい。家船居住による漂海生活をいとなんでいた海サマは, 首長制社会であったスルー王国では最下層に位置するグループでもある。一方, 船乗りや海賊としても活躍し, 家船居住をおこなわなかった定住性の高いサマは海サマの人々から *aa Deya'* (*aa* = 「人」, *Deya'* = 「陸」) と呼ばれ, かつては「サマル」 *Samal* とも呼ばれてきた⁸⁾。

Stone や Warren, 床呂らの研究によれば, これら定住性の高いサマ (サマル) はスルー王国における中間層として位置し, 同じサマながら海サマよりも上位のランクと認識されてきた経緯がある (床呂 1992; Stone 1962; Warren 1981)。本稿では定住性の高いこの後者のサマを「陸サマ」と呼ぶ。

いずれのグループにせよ, この地域のサマとスルー王国下における政治・社会システムとの関わりは無視することができない。しかし, 1876 年に現在のボルネオ島・サバ州が英国の「北ボルネオ勅許会社」の支配下に組み込まれると, 英国による支配をきらい, 北ボルネオ政府による支配力がもっとも希薄であったセンボルナ (Semporna) 半島と, その離島域となるブンブン (Bumbun) 島やオマダル (Omadal) 島を中心に村落を形成する陸サマがあらわれた。彼らの生業は, 漁撈のみでなく, 海賊や密輸行為のほか, 特殊海産物や換金作物となるコブラの生産などに代表される。

これに対し, 北ボルネオ政府は 1887 年, センボルナ半島にセンボルナ市⁹⁾を建設し, 華僑系の商人を軸とした交易センターの形成を試みた (Warren 1971)。結果的にこの試みは成功し, センボルナ市は特殊海産物を中心とする交易センターとして成長していく。その過程の中で, 北ボルネオ政府による統治をきらっていた陸サマのほか, スルー王国の弱体化によって交易の拠点をしなつた多数のサマやタオスグ人らがセンボルナ郡へ集まり, やがてセンボルナ郡はサマ人口が集中する一大拠点となる。

その後 1963 年にサバがマレーシア連邦の 1 州として合併し, 英国統治下より独立して以降, すでに定住化していた陸サマはマレーシア人として今日へといたっている。またスルー王国時代にイスラームへと改宗した陸サマは, イスラームを優遇する傾向が強いマレーシア政府の政策下で, 人口の増加や政治的発言力を強めてきた¹⁰⁾。

一方, 海サマは北ボルネオ時代にも漂海生活をつづけ, 海産資源を生産する専業漁民として生きてきた。しかし海サマの多くも, 1960 年代以降はボルネオ島・サバ州東岸域を中心に定住化する傾向があり, イスラームへ改宗した人々も少なくない¹¹⁾。ただし, その一部は現在にいたるまでマレーシア領となったサバ州東岸域と, フィリピン領となったスルー諸島を移動する半定住生活をいとなみ, 漁撈をおもな生業とする傾向が強い。

現在のセンボルナ群離島域で移動生活を続けている海サマの多くは, 1980 年代以降におけるフィリピン側での治安悪化を背景に, マレーシア領となるセンボルナ郡へと逃げてきた政治難民としての性格が強い。これらの海サマは, 現在もマレーシア国籍をもっておらず, サバ州政府からは不法滞在者としてあつかわれてしまう人々でも

ある。

スルー諸島からボルネオ島東岸域を対象としたこれまでのサマ研究では、その生業や居住形態が特異であった海サマを対象とした研究に蓄積が多い¹²⁾。これに対し、定住化集団であった陸サマを対象とする人類学的研究は、これまでほとんど実施されてこなかった¹³⁾。しかし、ボルネオ島・サバ州東岸における現代サマを論じるには、特殊な生業戦略(=専門的な漁民)を継続してきた海サマのみでなく、定住化を基礎とした生業戦略を継続し、サマ人口の9割近くを占める陸サマを無視することはできない。これらサマを対象とした先行研究にみられる問題点もふまえ、本稿ではセンボルナ郡の離島域における「陸サマ」と「海サマ」世帯という、居住戦略の異なる二つのサマ集団による漁撈を検討する。

2.2 調査地の概況

本稿の調査地は、マレーシアのボルネオ島サバ州東岸(図1)のセンボルナ郡の離島域に形成された二つの陸サマ村(S村とH村)と、これらの村に隣接する海サマの集落群である(図2)。センボルナ郡に数多くある陸サマ村からこの二つの村を選択したのは、これらの村が1960年代以前より漁撈や造船が活発で(Sather 1997)、もっとも伝統的な村(富沢 1997)として知られてきたことを背景としている。

センボルナ郡はボルネオ島の一部となるセンボルナ半島と、それを取りかこむように発達したサンゴ礁(裾礁)によって構成される。このうちセンボルナ郡の経済・行政的中心地は、センボルナ半島の南端に位置するセンボルナ市である。その市街地には中国系マレーシア人が経営するさまざまな店舗や市場のほか、ガソリンスタンド、銀行、スーパーマーケットなどが立ち並ぶ。

一方、その周辺域にはサマなどが多くの村を形成している。これらセンボルナ市周辺に立地する村の多くは、1950年代以降に形成された比較的新しい村でもある。これに対し、18~19世紀に形成された古い陸サマ村は、対岸のブンブン島やオマダル島を中心とする離島域に立地している。本稿が対象とする二つの陸サマ村もオマダル島とブンブン島に立地しており、センボルナ郡におけるもっとも古い陸サマ村の一つとして知られてきた。

センボルナ郡はサバ州の中でも比較的乾燥し、気温は年間を通して平均28度前後を推移する。年間降水量には年度ごとにばらつきがあるが、1990年代のそれは約1,500mm~2,000mmを推移している(Jabatan Perangkaan Malaysia 1999)。年間を通しての季節変化は、モンスーンによって大きく二つにわけて認識されることが多い。一

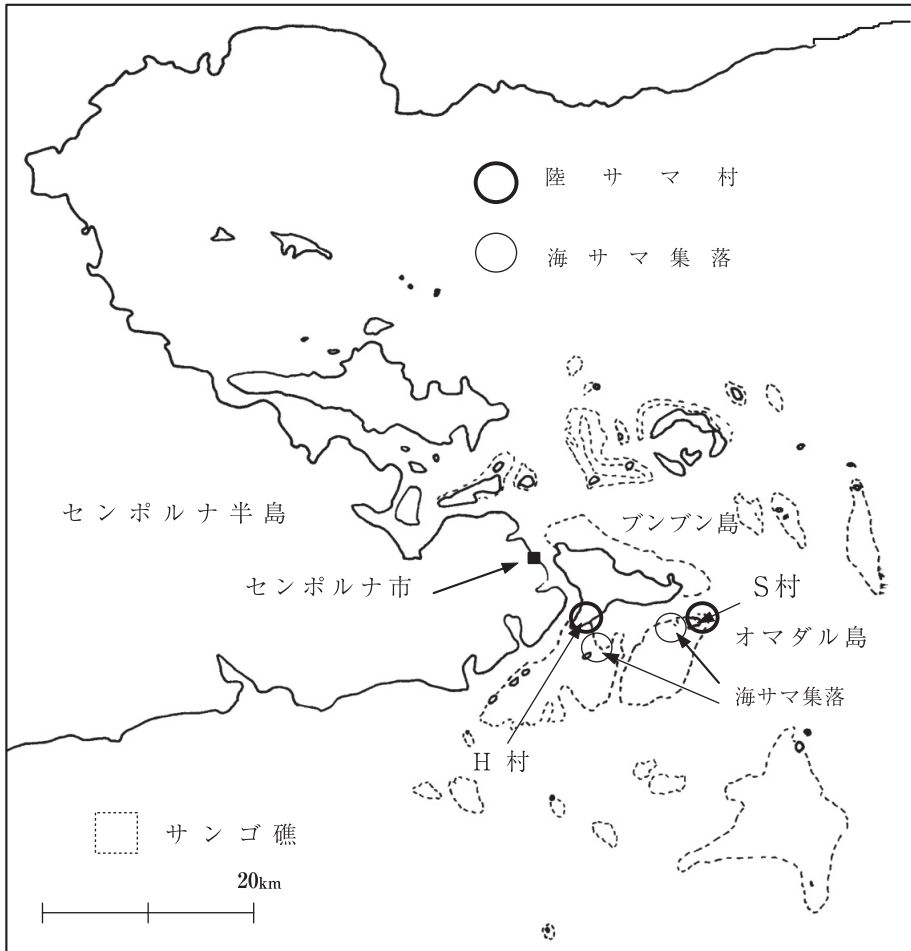


図2 センボルナ郡と調査村の位置
(調査にもとづき筆者作成)

一般的に南西モンスーンが吹く5月から10月にかけて雨が多く、北東モンスーンが吹く11月から3月にかけては雨が少ない。しかし、両期間の降雨量差は、実際には月別で50 mm～100 mm程度にすぎない。

南西モンスーン期には南方からの強い風がおもに昼間に吹くのに対し、北東モンスーン期には、北方からの強い風が昼夜吹きつづけることが多い。一方、両モンスーンへの移行期にあたる5月や10月は風の少ない時期となる。サマによる季節分類も降水量や気温の変化より、むしろ風向きの方角とその強弱によってより強く認識される傾向が強い。

センサスによれば1991年のセンボルナ郡の人口は約9万人であり（Jabatan Perangkaan Sabah 1999）、そのうちの8割弱をサマが占めている。これらサマ人口のうち、陸サマ系住民の占める割合が90%を占め、海サマ系住民の人口は10%にすぎない（Sather 1997）。センボルナ郡の人口の残り2割を占めるのは、センボルナ市街地を中心に店舗を構える中国系マレーシア人や、近年にこの地域に移住してきたインドネシアのブギス人、フィリピンのタオスグ人などである。

つぎに調査地となった二つの陸サマ村の概況について述べる。S村はオマダル島の沿岸に位置し、調査時の世帯数は20世帯（144人）、ブンブン島の南西部に立地するH村の世帯数は35世帯（414人）であった。図3が示すように、S村では20代から50代の成人男性の占める割合が少なく、60代以上の男性人口が多い。

おなじくH村でも、男性では20代～40代、女性では20代～30代の人口数が相対的に少ない（図4）。こうした村の人口構成は、20代から40代を中心とする若い世代の多くが、センボルナ市街地やマレーシア国内の都市部で就職し、村外に移住してしまっただけの結果による。このことは、離島部における陸サマ村の特徴として、働き盛りの世代が全体的に少ないことを示唆している。

これら陸サマ村に対して海サマの集落群は、それぞれS村周辺の潮間帯、およびH村の東隣にあたる潮間帯に立地する。このうちオマダル島のS村周辺に立地する海サマ世帯の集落はより規模が大きく、推定で約100世帯、人口にして約500人以上の海サマが生活している。聞き取りによれば、この海サマ集落は1980年代に形成され始めたが、1992年時には20軒を超える家屋が確認される程度であったという（富沢1997）。したがって、この集落では、1990年代後半になって世帯・人口数が急増したと推測できる。一方、ブンブン島のH村周辺にすむ海サマ世帯は少数で、合計8世帯、約50人が暮らすにすぎない。H村での聞き取りによれば、これらの海サマ世帯は1990年代後半よりH村周辺に移住してきたという。

これらの集落に暮らす海サマの多くは、サバ州当局からはマレーシアの国籍をもたない不法滞在者として認識されている。ただし彼らの中にはセンボルナ郡にすでにマレーシアの国籍をもつ家族や親戚がいる者も少なくない。その一方で彼らはフィリピン領側のシタンカイ島にも家族や親戚をもっており、センボルナとシタンカイの間を季節的、あるいは周期的に移動する世帯が多くみられる。

海サマの集落における世帯数や人口数が明確に確認できなかった背景にも、こうした海サマ世帯の周期的な移動や、調査がおこなえる日中には出漁のために留守をする世帯が多いという制約があった。このため世帯調査の対象とできたのは、S村の周辺に

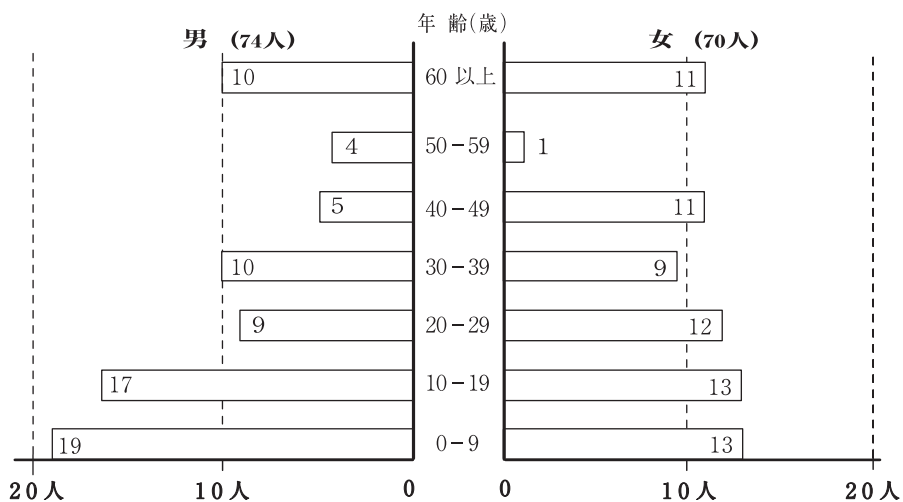


図3 調査村における人口構成（オマダル島S村）
（出所：筆者による聞き取り）

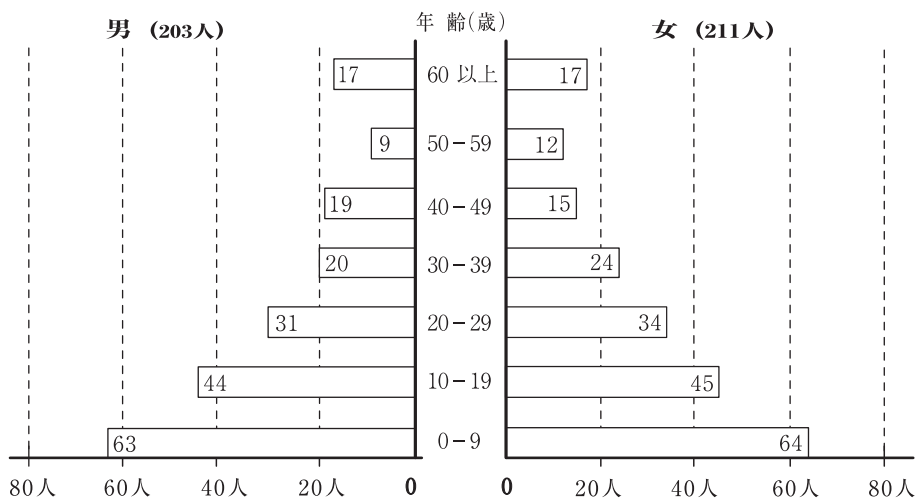


図4 調査村における人口構成（ブンブン島H村）
（出所：筆者による聞き取り）

すむ海サマ集落の20世帯のみである。その結果をまとめたのが図5である。この表によれば、海サマ集落では男女ともに50代以下の世代が多数を占め、世帯主の平均年齢も20代～40代に集中する傾向がみとれる。こうした状況は陸サマ村とは対照

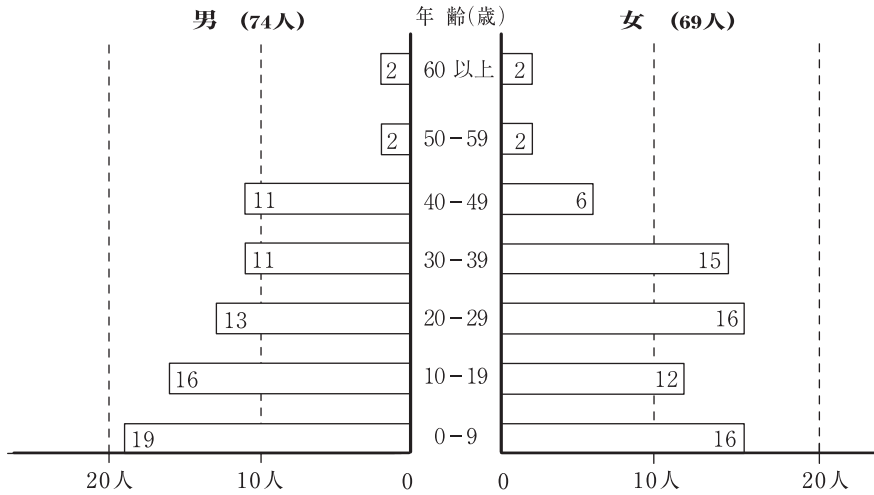


図5 調査村における人口構成 (オマダル島海サマ集落)
(出所：筆者による聞き取り)

的であり、海サマ村ではむしろ働き盛りの世代が主流となる構成を示す。

陸サマ村と海サマの集落には、その居住形態においても相違がみられた。サマの伝統的な家屋は杭上家屋と呼ばれ、潮間帯に建設されるのが一般的である。このうち陸サマ村は、島の沿岸域に陸と接するように形成される。調査村では、S村の家屋群は沿岸と平行して並び(図6)、H村の家屋群は沿岸から伸びる栈橋にそって垂直に並び(図7)。これに対し、海サマの集落は陸とは接さない潮間帯上に形成されるため、干潮時には徒歩でアクセスすることが可能であるが、満潮時の移動には船が必要となる。

現在のセンボルナ郡では、ブンブン島までは24時間の電気供給サービスがあるが、それ以外の離島域では電気の供給がまだない。電気の供給がない村ではケロシンランプや灯油ランプのほかに、自家発電機を利用する。しかし、自家発電機の利用は陸サマ村に限られており、海サマ世帯での利用は確認されなかった。一方、水の供給に関してはブンブン島をふくめて離島域では水道が設置されていない。このため、離島に住むサマの多くは一般的に井戸水か天水を利用している。S村が立地するオマダル島では地下水脈が発見されておらず、住民は天水を利用するほか、センボルナ市から定期的に訪れる業者から飲料水を購入しなければならない。

サマの伝統的な家屋は、パンダナス (*Pandanus* sp.) やココヤシ (*Cocos nucifera*) の葉を屋根材として利用していたが、現在の陸サマ村ではおもにトタンが利用され

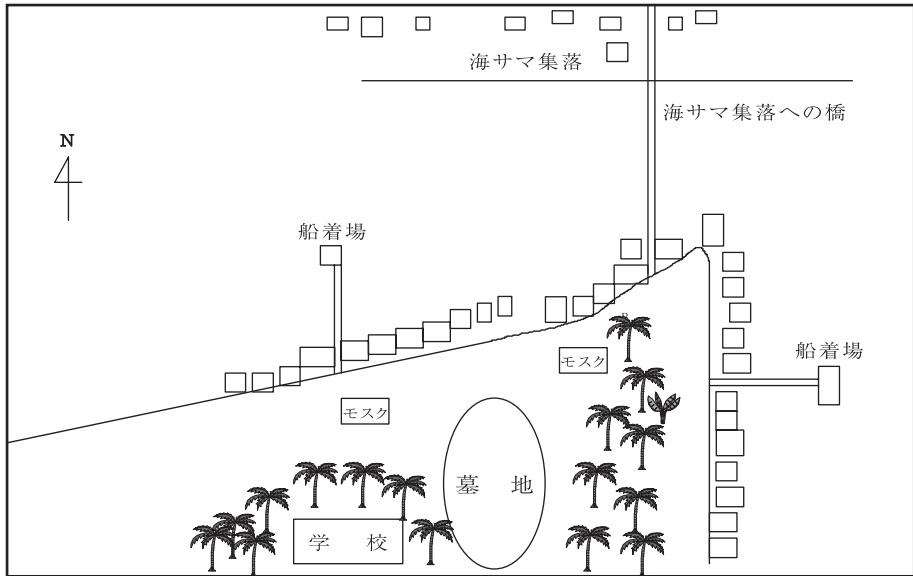


図6 S村と海サマ集落

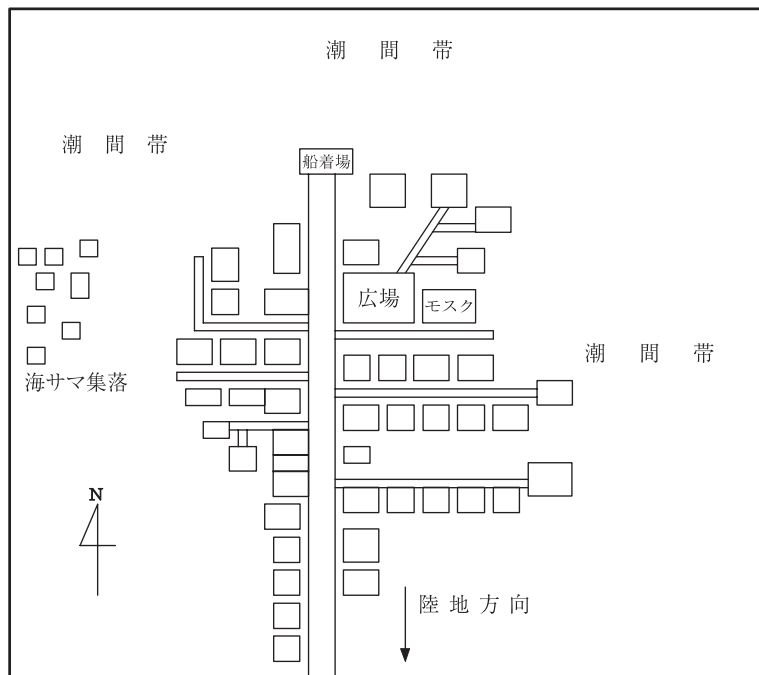


図7 H村と海サマ集落
(出所：調査にもとづき筆者作成)

る。これは屋根にふった雨水を貯水するさいにトタンが優れているためである。トタン屋根におちた雨水は雨どいによって、ブリキ製やプラスチック製の貯水タンクにあつめられる。これらの貯水タンクは各世帯に1~2個の割合で設置されており、陸サマ村では州政府から支給されたタンクを所有している世帯も確認された。

一方、海サマ世帯の枕上家屋は、その多くが現在もパンダナスや、ココヤシの葉を屋根材として利用しており、天水の確保はより困難な状況にある。このため、海サマ世帯による飲料水の購入率は、陸サマ世帯に比べてかなり高い。また海サマ世帯では貯水タンクの所有がみられず、陶磁器製の壺を利用した天水の貯水が確認されるのみであった。聞き取りによれば、陸サマ村においても貯水タンクが普及する以前には、こうした陶磁器製の壺が貯水のために利用されていたようである。

調査村が立地するセンポルナの離島群は、沿岸の潮間帯域が家屋の集中地帯であるのに対し、周辺の内陸部はココヤシ林でおおわれ、一部ではマンゴやバナナ、キャッサバなどが栽培される。これらの栽培植物は各世帯によって所有され、土地と同様にその所有者が明確に認識されている。所有者はいずれも陸サマによって占められており、海サマによる土地の所有は確認されなかった。

ココヤシ林は樹齢20年以上のものが多く、管理がゆきとどいていないため、その生産性は低い。その背景として多く聞かれたのは、近年におけるコプラ価格の下落や、加糖飲料などの普及によるココヤシ利用の低下である。ブンブン島内に生息するオナガザル (*Macaca fascicularis*) や、イノシシ (*Sus barbatus*)¹⁴⁾ による被害を指摘する村民も多かった。一方、オマダル島にはオナガザルやイノシシが生息していない。しかし、地下水脈の乏しいこの島ではココヤシ以外の植物は栽培が難しく、キャッサバや野菜類の栽培は確認できなかった。

2.3 調査方法

これまでの現地調査は、2003年11月~2004年3月、2004年6月、2004年11月~12月の約7ヶ月間にわたって実施した。おもに利用した調査法は、(1) 聞き取りと(2) 同行による直接観察である。

このうち、(1) 聞き取り調査は世帯を単位とし、筆者自身が訪問して質問をおこなう形式をとった。一般的にサマ社会には、単系の出自原理に基づく明確な社会集団は形成されていない。たとえば Nimmo (1972) や Sather (1984, 1997) は、サマ社会でもっとも基本的な単位として夫婦とその未婚の子供という核家族があり、これを *daluma'* (da = 「一つの」、luma' = 「家」) と呼び、互いに一つの家に住む関係にある

ことを *magdaluma'* と呼ぶ（以下、本稿ではサマ語に特徴的な声門閉鎖音は〈'〉で記す）。サマ社会には、さらにその家族どうしの結びつきに基づく単位もあり、これは一般的にサマ語で *mataan* (*mata* = 「眼」) と呼ばれる¹⁵⁾。

本稿では、彼らが *magdaluma'* と言及している単位を「世帯」とみなし、夫婦とその未婚の子供からなる核家族 *daluma'* を「基本家族」とする。したがって、1「世帯」の中には、複数の「核家族」をふくむ複合家族世帯も存在することになる。こうした複合家族世帯は、両親とその未婚の子供からなる核家族と、既婚した子供家族が同居するケースが多い¹⁶⁾。

また、近年における生業の多様化のために、複合家族世帯を構成する親家族と既婚の子家族が異なる生業をいとなむ世帯が多く確認された。おなじく食事などの消費面でも家族単位で独立している傾向が見られるが、その線引きはそれほど明確ではない。とくに日々消費する食物については、世帯内外で互いの家族が融通しあうケースが多く確認された。こうした現代サマ世帯の状況を考慮し、世帯における生産面では、「核家族」単位で独立傾向が強い場合には複合家族世帯として、それぞれの「核家族」単位でのおもな生業を確認した。

世帯調査では、①各世帯における家族構成と総人数、生産に関する項目として、②世帯・家族単位でのおもな生業とその詳細、③自己申告による推定月收入のほか、④漁船、エンジンや漁具、生活用具の所有状況についてを確認した。なお世帯調査の対象は、陸サマ村においては基本的に全世帯をその対象としたが、調査期間中に留守だった世帯や、聞き取りを拒否した世帯は対象外とした。その結果、S村では20世帯、H村では35世帯で世帯調査を実施できた。

一方、陸域からはなれた潮間帯上に形成される海サマ集落での聞き取りは、調査の際に船が必要となることや、家族の多くが日中は漁などで外出する頻度が高かったことなどにより、全世帯を対象とすることができなかった。そこで、集落を構成する約100世帯のうちの20世帯を選定し、聞き取りをおこなった。これら世帯調査の詳細結果は、本稿末の付録1にまとめた。

陸サマの使用言語はサマ語とマレーシア語であり、マレーシア語の普及率はかなり高い。一方、調査村における海サマの使用言語はサマ語のみで、マレーシア語の普及率は低かった。陸サマ村での聞き取りにはマレーシア語を利用し、海サマ村ではサマ語を利用した。ただし、海サマ村での聞き取り調査では陸サマの調査協力者に同行してもらい、サマ語の補助をしてもらった。

漁撈調査における聞き取りは、各村落で出漁した漁師を対象とし、おもに帰村時に

おこなった。漁撈調査における聞き取りは調査対象となったすべての村でおこなったが、一定の期間におこなわれた漁撈活動を対象とした聞き取りと観察は、H村の仲買人であるR氏宅にておこなった。R氏宅には2004年11月6日～25日まで滞在し、この期間中にR氏宅で水揚げをおこなった全漁師を対象とした。その他の聞き取りは、各村落で漁撈を観察できた際におこない、特定の漁師を対象とする聞き取りはおこなっていない。

おもな聞き取り項目は、①出漁者数、②出漁者の出自（陸サマか海サマか）、③出漁時刻、④出漁時の潮汐状態、⑤選択された漁法の五つである。一方、⑥帰漁時刻、⑦帰漁時の潮汐状態、⑧漁獲された水族の種類と⑨漁獲量（kg）、および⑩出漁日の月齢と潮汐期は、筆者が直接に観察して確認した。水揚げ後に漁獲が売却された場合には、⑪その販売量（kg）と販売価格（Ringgit Malaysia）を記録した。1リンギット・マレーシアは、2004年現在で約30円であり、以下ではRMと略す。このうち、聞き取りによって記録された漁撈活動は12回であり、R氏宅で観察・記録された漁撈活動は72回であった。R氏宅で記録された漁撈活動の詳細については付録2、聞き取りによって記録された漁撈活動については付録3にまとめた。

漁撈活動に関しては、このほかに同行調査に基づく直接観察をおこなった。これら直接観察によって記録された漁撈活動は、合計で17回である。その詳細については、付録4にまとめた。同行調査は、各村落でできるだけ多くの漁師と同行するように意識したが、特定の漁師を対象とした同行調査はおこなっていない。

同行調査でのおもな確認事項は、①出漁者数、②出漁者の出自、③出漁時刻、④出漁時の潮汐状態、⑤出漁日と月齢、⑥出漁日の天候、⑦漁場までの移動時間、⑧選択された漁種、⑨漁場間の移動と移動時刻、⑩帰漁時刻、⑪帰漁時の潮汐状態、⑫帰村時刻、⑬帰村時の潮汐状態、⑭漁獲された水族の種類と⑮漁獲数、および⑯漁獲量からなる16項目である。

3 伝統漁撈と近代化の波

3.1 サマの伝統漁撈

サマ漁撈の最大の特徴は、漁撈活動のほぼすべてがサンゴ礁の発達する浅い（水深0～10m前後）沿岸域でのみ実践されるところにある（長津1995,1997; Nimmo 1968; Sather 1984, 1997; 門田1986）。このためサマの伝統漁撈で対象となってきたおもな水族は、フエフキダイ、ブダイ、ベラ、ハタ、アイゴなどのサンゴ礁付き魚種や、沿岸

域に生息するナマコ、カニ、貝類、海藻類といった多種多様な海洋生物であったと推測できる。

一方、おもに外洋域を泳ぐマグロやカツオといった回遊魚種は、おもな漁獲対象とはされてこなかった。このためサマの伝統的な漁撈では、トローリングや竿釣りといった外洋の回遊魚種を対象とする漁法があまり発達しなかった（表1）。唯一の例外としては、フカヒレをとる目的から釣り針を利用するサメ漁と、ウミガメの捕獲を目的とした銚漁が報告されるのみである（長津 1995: 68）。

サマの漁撈が浅いサンゴ礁域をおもな漁場として実践されてきたことは、サマ漁撈におけるいくつかの側面を強めてきた。その一つが、網漁の高い利用頻度である。これは水深が浅く、多種にわたる水族が生息するサンゴ礁域では釣り漁よりも網漁の漁獲効率が高まることによる。表1はサマが伝統におこなってきたと推定されるおもな漁法について整理したものだが、網漁の種類にはもっとも多様性がみられる。このほ

表1 サマの伝統漁法

漁法／形態	名前	方法	操業人数	漁場
(1) 網漁	<i>amahang</i>	蔓追い込み網漁	2-3 人	礁内水道
	<i>anakop</i>	追い込み刺網	2-3 人	礁池—礁原
	<i>amungsud</i>	エリ漁	2-3 人	礁池—礁原
	<i>binangkad</i>	引き網漁	6-10 人	礁池—礁原
	<i>amokot</i>	まき網漁	10-20 人	礁内の浅瀬
	<i>ambit</i>	集団追い込み漁	50-60 人	礁縁
(2) 釣り漁	<i>amissi</i>	手釣り	1-2 人	礁池—礁縁
	<i>magsangkaliya'</i>	サメ釣り	2-3 人	外洋
	<i>angalaway</i>	延縄	2-5 人	礁縁—外洋
	<i>angullan</i>	疑似餌イカ釣り	2-5 人	礁池—礁原
(3) 突き漁	<i>anu'</i>	刺突	1-3 人	礁原
	<i>magbat</i>	ナマコ突き	1-3 人	礁原
	<i>ahiyak pahi</i>	エイ突き	1-3 人	礁原—外洋
	<i>magkoha'</i>	タイマイ突き	1-3 人	外洋の離礁
(4) 魚毒漁	<i>anu w a'</i>	毒漁	1-2 人	礁内の浅瀬
(5) 籠・釜漁	<i>magbubu</i>	籠・釜	1-2 人	礁原・礁縁
(6) 潜水漁	<i>magpana'</i>	潜水+水中銃	1-2 人	礁原・礁縁
(7) シャコ罟漁	<i>anahat</i>	仕掛け罟	1-2 人	礁原
(8) 採集	<i>magt'bba</i>	徒歩・手づかみ	1-5 人	礁原

（出典：長津 1995; Sather 1984, 1997; 門田 1986 より筆者作成）

かにサマの漁法には、おもに夜間におこなわれる船上からの突き漁があるが、これも水深の浅い漁場を反映した漁法として指摘できる。また表3からはサマの伝統漁法の多くが、サンゴ礁原や礁池に集中しておこなわれることがわかる。

二つ目の側面として、漁撈活動への女性や子供の参加がある。女性や子供の漁撈への参加は、潮間帯での貝採集や手釣りのみでなく、成人男性と協同での網漁においても確認されている（長津 1995; Nimmo 1972; Sather 1984, 1997; 門田 1986）。このように女性や子供が漁に参加できる要因も、漁場が水深の浅いサンゴ礁海域であり、漁にともなう危険性やすぐれた筋力などの必要性がないことがあげられる。

三つ目の側面として、漁船や漁具、出漁人数の小規模性がある。サンゴ礁域は生物種が多様であり、漁船や漁具が小型でも多様な魚種を対象にすれば、十分な漁獲を得ることができる。また浅くて礁が多いサンゴ礁域では、大きな漁船や漁具は利用が困難でもある。このため、サマの伝統的漁撈では、漁具や漁船が小型のままであり、例外的なくつかの漁法をのぞけば、大規模な労働力を必要としなかった。

20世紀以前におけるサマの漁船には、ボッゴ *Boggo* とよばれるくり舟、ルンダイ *Lunday*、ダマス *Damas*、ジンジン *Zing-nging*、ペラン *Pelang* などとよばれるアウトリガーを装着した木造の家船などが知られており、20世紀以降においてはレパ *Lepa* とよばれるアウトリガーのない木造の家船のほか、サピット *Sapit* やクンピット *Kumpit* とよばれるやや大型の構造船が利用されてきた（Kurais 1975）。このうちサピットやクンピット船をのぞけば、これらの船はいずれも小型の木造船とみなすことができる。

このように小型の漁船が中心となるため、1回の操業に必要な人数が少なく、平均して2~3人での出漁が基本であった。ただし例外として、50~60人もの大人数でおこなわれた *ambit* や *magambit* とよばれる集団追い込み網漁も、定期的におこなわれていたことが確認されている（Sather 1997; 長津 1995, 1997）。

サマによって伝統的に利用されてきた漁具には、*linggi'* や *selibut* とよばれる漁網、*pogol* や *selikit* とよばれるヤス、*sangkal* や *bujak* とよばれる銚、それに *pissi* とよばれる釣り針がある。1920年代頃まで、漁網の材料はガジュマル (*Ficus microcarpa*) などの植物繊維が主流だったが、1920年代から1960年代までは木綿がおもに利用された（Sather 1997: 117）。このほかに木綿が普及する1920年代頃より、水中眼鏡やゴムを必要とする水中銃が導入された¹⁷⁾。一方、マレー語およびマレーシア語で *bubu* とよばれる筥や籠は、サマの漁撈においては補助的に利用されていたか、あるいは利用されていなかったようで、どの報告でもその利用についての記述がみられない。その

証拠に *bubu* に相当するサマ語が確認できず、筆者による調査時にも単に *bubu* と表現された。

サマの伝統な漁撈活動にみられるもう一つの側面は、潮汐や季節性による制約である。たとえばサマの漁撈活動は、大潮 *tahik heya* や小潮 *tahik diki'* の時期により集中的におこなわれる傾向がある。またおもな漁場が浅いサンゴ礁域であるため、干潮時には漁場への移動や出漁が制約をうける。一方、漁獲のほとんどがサンゴ礁に生息する魚種であるため、漁撈活動における年間を通しての季節性の影響は大きくないが、全くないわけではない。センボルナ離島域を含むセレベス海域には、5月から9月にかけて吹く南西季節風と、11月から3月にかけて吹く北東季節風がある。とくに強い風が一日中ふくことも多い北東季節風の時期は、小型船を利用するサマの漁撈にとって大きな制約となった。

つぎに生業、および経済活動としてのサマの漁撈活動について検討しておく必要がある。すでに記したように18世紀にさかのぼるスルー王国時代、海サマ系のサマは専門的な漁民として知られてきた。一方、陸サマ系のサマは漁撈のほかに陸上での栽培や交易など多様な生業をいとなんでいたが、当時の主食であったコメを栽培する稲作農民ではなかった。このためサマは、主食となるコメやイモを貨幣や交換によって獲得する必要があったと推定される。そしてサマにとって最大の交換資源となったのが海産物であった。ここにサマの伝統漁撈におけるもう一つの特徴がある。

また1960年代以前においては、漁獲物が商品として販売される場合、これらの多くは鮮魚や活魚としてではなく、塩干魚として販売されるのが一般的であった (Sather 1984, 1997; Warren 1981)。このほかに潮間帯で女性や子供によっても漁獲されることがあったナマコや貝類もサマの重要な商品であった (赤嶺 2000a, 2000b; 鶴見 1990)。したがって、本稿における「生業」の概念には、生計維持活動と現金獲得活動という両方が含まれていることになる。

こうしたサマの伝統漁撈にみられる諸側面を総合すると、サマの伝統漁撈は小規模漁業とみなすことができる。ここでは、(1) 1回の漁において投下する労働量が少なく (1~4名前後の漁撈人数)、(2) 漁船が小さく (無動力船か5~60馬力までの動力船)、(3) 漁場がサンゴ礁の発達する沿岸域に限定される漁業を「小規模漁業」とみなす。一方、(1) 1回の漁において投下する労働量が大きく (5名以上の漁撈人数)、(2) 中型から大型漁船 (60馬力以上の動力船) が利用され、(3) 漁場がサンゴ礁域をこえて外洋域にまで達する漁業を「中・大規模漁業」とみなしたい。

小規模漁業が個人・世帯単位でおこなわれるのに対し、中・大規模漁業は雇用関係

を基礎とし、華僑を含むさまざまなエスニック集団が、大人数で従事する傾向がある。こうした中・大規模漁業としての側面は、センボルナ郡におけるサマの伝統漁撈にはみられなかった。しかし中・大規模漁業は、現代のセンボルナ郡では一般的な漁業形態の一つとなっている。つまり中・大規模漁業は、センボルナ海域へとおしよせた近代化の波を受けて誕生した新しい漁業形態ということになる。そこで次節では、とくに1960年代以降におけるセンボルナ郡と、そこに居住するサマの伝統漁撈が受けた近代化の波について整理する。

3.2 近代化の波

センボルナ郡における近代化の波は、1950年代以前までさかのぼるという見解もなりたつが、その度合いが激化したのは、1963年にサバがマレーシア連邦の一角として独立してから以降となる。たとえばサバにおける木材の伐採とその輸出は、イギリスによる北ボルネオ時代の1885年までさかのぼるが、それでもセンボルナ郡の内陸部（半島側）は1960年代まで未開発で、その大部分が熱帯低地林によっておおわれていた。

しかし、1960年代半ばより本格化したサバ州による森林伐採と低地開発の波は、すぐにセンボルナ郡へもおしよせ、1980年代までにセンボルナ郡の熱帯低地林はほぼ完全に消滅した。その結果、現在では伐採跡地にアブラヤシ農園やココア農園が開発され、内陸部の生態系は大きく変貌した。おなじく沿岸域のマングローブ林もサバ州政府による宅地開発や、華人商人によるエビ養殖池の増設などにより、その占有面積は減少しつつある。

一方、サバ州による森林伐採の激化と低地開発は、これにともなう雇用機会の増大をうんだ。センボルナ郡でも、1960年代より増加した森林伐採や道路工事、伐採後に開発された農園での賃金労働に転業、あるいは一時的に従事したサマは多い。センボルナ郡に新たに形成しつつあった海サマ村で、1965年に調査をおこなった Sather は、すでに村民の多くが村外での一時的な賃金労働によって、小型船内機を購入するための現金収入を得ていたことを記している。さらに1974年には、漁撈を生業とする世帯数は村の半数に減り、1979年には4分の1へと減少したという (Sather 1997: 79)。1960年代より新たに定住化した海サマ村においてもこれだけの雇用機会があったことを考慮するなら、それ以前から定住してきた陸サマ村においては、より好条件での雇用選択があったことが容易に想像される。筆者による聞き取りでも、この時代に村外で賃金労働を経験した事例が頻繁に聞かれた。

このサバ州における雇用機会の増加は、さらにフィリピンを中心とする近隣諸国からの移民の流入をまねくことになった。その背景には、サバ州における慢性的な労働人口の不足と、1970年代以降におけるフィリピンでの政情の悪化があげられる。とくに1970年代には、マルコス政権下のスルー諸島が内戦状態におちいり、サマを中心とする多くの政治難民がサバへと流入してきた。

その結果、サバ州における総人口は1970年の約65万人から、1980年には約93万人へと増加し、さらに2000年には約245万人にまで激増した(図8)。おなじくサバ州におけるサマの人口数も1980年の約10万人から、1990年に約20万人、さらに2000年には40万超に達している(図9)。

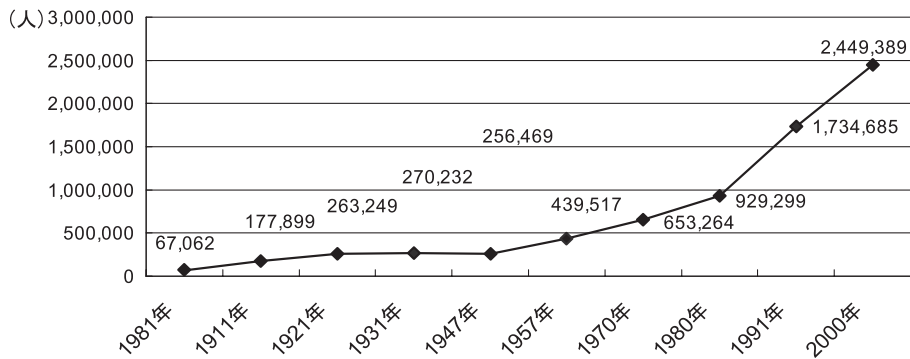


図8 サバ州における総人口の推移

(出所：North Borneo Report of The Census 1891, 1911, 1921, 1931, 1953; Jones 1960; Anwar and Leong 1981; Malaysia Department of Statistics 1972, 1981, 2001 より)

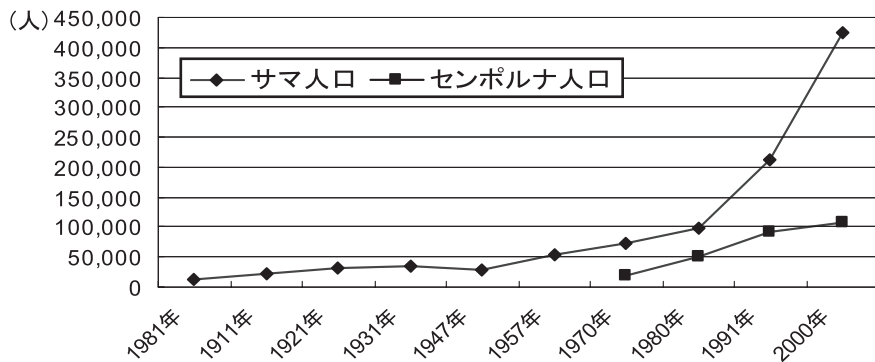


図9 サバ州におけるサマ人口およびセンポルナ人口の推移

(出所：Malaysia Department of Statistics 1972, 1981, 2001 より)

1960年代以降におけるサバ州の開発によって新たに創出された雇用機会、そしてサバ州における急激な人口増加は、サマの伝統的な漁撈活動にもいくつかの変化をうみだした。一つは Sather も確認したように、エンジンの普及である。彼によれば、1960年代には小型船内機（1.5馬力）が導入され、1965年の時点で調査村におけるすべての世帯が、賃金労働による現金収入をもとに小型船内機を購入・所有していたことが確認されている（Sather 1997: 79）。そしてエンジンの普及による漁船の動力化は、漁撈時間の短縮と、漁獲の市場への運搬時間の短縮を可能にした。ただしサンゴ礁海域を超えての漁場の拡大は確認されていない。さらに運搬時間の短縮は、鮮魚販売を可能にし、塩干魚の需要を急速に低下させた。鮮魚の需要が高まった背景には、人口の急激な増加によるサバ州の魚肉消費量の急増があったことも重要である。

二つ目には、1970年代以降におけるナイロン製網の普及があげられる。それまでの木綿や植物繊維を利用した漁網にくらべ、数倍の強度をもち、持ち運びも便利なナイロン製網の普及は、網漁の効率をさらに上げることとなった。またナイロン製網の強度の高さは、網を補修する作業時間の劇的な低下を可能にした。こうしたナイロン製網の普及による網漁の質的变化は、結果的に漁撈における女性労働力の必要性を低下させ、サマの漁撈はより男性中心になったとされる（長津 1997; Sather 1984, 1997）。

三つ目には、1970年代以降におけるダイナマイト漁の普及がある。ダイナマイト漁そのものは1960年代より知られていたが、サマの漁撈にとってそれほど重要な漁法とはなっていなかった（Sather 1997: 119）。しかし、サバ州における急激な人口増加により、低コスト・短時間で大量の漁獲をねらえるダイナマイト漁は、センボルナ郡のサマによってもっとも頻繁に利用される漁法となった（長津 1999）。

ただし、サンゴ礁を中心とする海底生態系を破壊する恐れがあることや、使用をやまれば漁民自身が怪我や、最悪の場合には死亡する危険もあるダイナマイト漁は、サバ州政府によって違法漁撈として取締りの対象でもあった。Satherによれば、1974年時にはさかんにダイナマイト漁がおこなわれていたが、1979年時には上記の理由からダイナマイト漁の利用者が減少したという（Sather 1997: 119）。しかし、筆者による陸サマ村での聞き取りでは、1980年代以降もダイナマイト漁をおこなう漁民は多かったようである。

また長津によれば、1980年代以降におけるセンボルナ郡でのダイナマイト漁は、政治難民としてセンボルナ群に移住してきた貧しい海サマ世帯によっておこなわれる傾向があった。その要因として、これら経済的に貧しい海サマ世帯では漁網など高価な漁具を買うことが難しかったことや、中国系マレーシア人や経済的に裕福なサマに

雇用された海サマ漁民が、雇用主からダイナマイト漁の利用を強要されてきたことを指摘している（長津 1999: 4-5）。

長津によるこの指摘は、サマの漁撈社会における大きな変化をいみじくも明らかにしている。それは漁撈を介した雇用関係、すなわち仲買人や魚商人でもある資本提供者と、その下で漁撈をおこなう被支配者としての漁民という「パトロン-クライアント関係」の創出である。たとえば Sather は、1979 年時に彼が調査した海サマ村には、マレーシアの市民権をもつ 8 人の海サマ男性が魚商人となり、政治難民として新たに移住してきた市民権をもたない海サマ漁民に、資本と身元の保証を提供するかわりに、低価格で漁獲を購入していたことを報告している（Sather 1997: 88-89）。

漁撈を介した雇用関係は、1980 年代以降の大型エンジンの普及を背景とした大規模漁業の登場によっても形成された。ただし中・大型の動力漁船を使用し、大人数で底引き網漁やまき網漁をおこなう中・大規模漁業における雇用関係は、動力船や漁具の所有者と乗組員の間に生まれ、さきに紹介した小規模な漁撈活動においてみられる関係とは性格がやや異なる。

たとえば大規模漁業における動力船や漁具の所有者は、その多くが資本力の高い中国系マレーシア人であり、サマが占める割合はそれほど高くない。むしろ大規模漁業に従事するサマ漁民の多くは、乗組員として参加する傾向が強い。しかし、乗組員を構成するエスニックグループは、サマのみが突出しているわけでもない。これらの状況を考慮するなら、大規模漁業での漁撈活動が単純にサマの漁撈とみなせないことも強調しておく必要がある。

さらに 1990 年代以降における大規模漁業では、サンゴ礁海域の外にひろがる海域でマグロやカツオをねらったまき網漁がもっとも活発におこなわれるようになった。その結果、センボルナのマグロやカツオの水揚げ量は、1992 年の 863 トンから翌年の 1993 年には 2,445 トンへと激増し、さらに 1994 年には 3,684 トンとサバ州内でももっとも高い水揚げ量を記録した（*Laporan Tahunan Perikanan Sabah 1992, 1993, 1994*）。こうした外洋魚類を対象とした大規模漁業の発展は、動力船や新たな漁具の普及のみでなく、1960 年代よりはじまった冷蔵施設の普及や、サバ州内をむすぶ幹線道路や飛行場建設による空路の開通といった一連の近代化を背景としている。もちろん、人口増加を端とする魚肉需要の急増も要因の一つであろう。

こうしたサマ漁撈におこった変化や、大規模漁業の急速な発展により、センボルナ郡における水揚げ高は必然的に増加した。図 10 は、1975 年から 2000 年におけるセンボルナ郡での水揚げ量の記録を整理したものであるが、センボルナ郡での水揚げ量

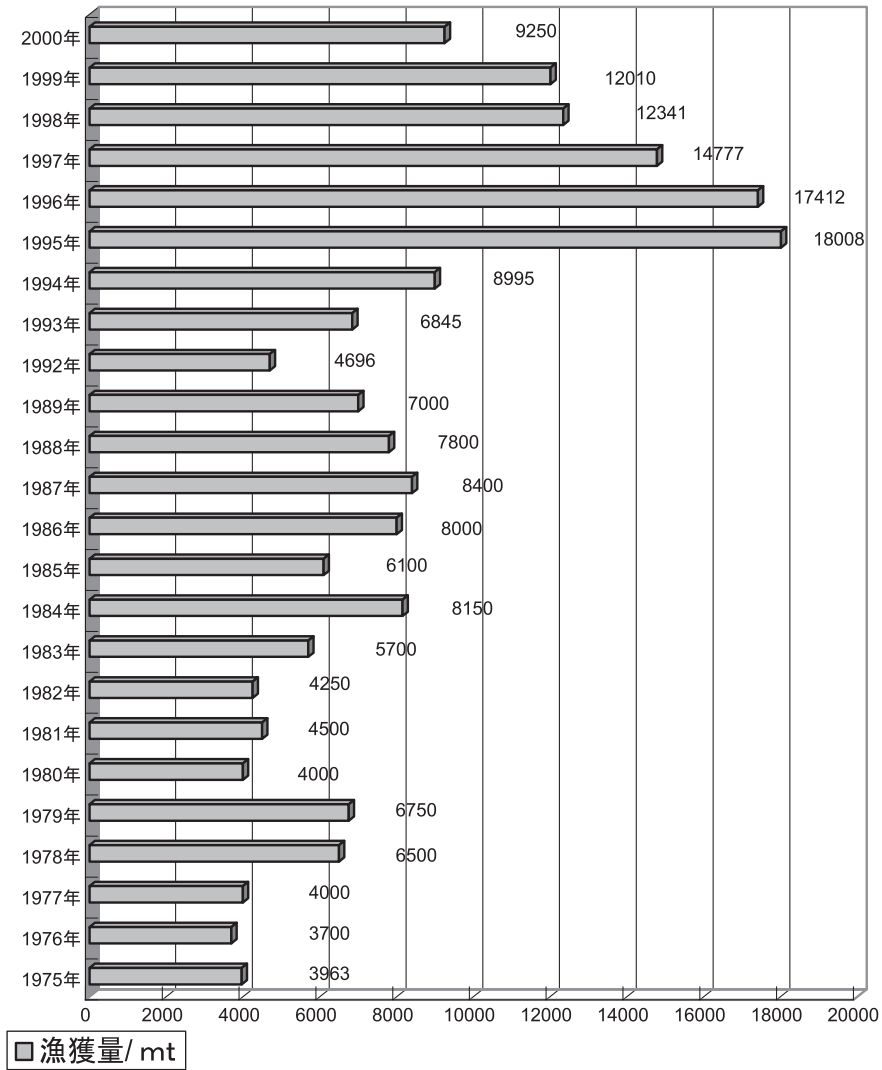


図10 1975年～2000年におけるセンポルナの水揚げ量変化
 (出典：Laporan Tahunan Perikanan Sabah 1975-1989, 1992-2000より筆者作成)

は、1983年頃より2,000～3,000トンちかく増加している。さらに1993年から1995年にかけては10,000トン以上の増加を経験した。このうちの実に約6,000トンがマグロ属の水揚げで占められており、センポルナは外洋魚の水揚げ港としても知られるようになった。しかし、その後の1996年以降は、一転して減少傾向にあることがわかる(Laporan Tahunan Perikanan Sabah 1975-1989, 1992-2000)。

1996年以降における水揚げ量の低下にはさまざまな要因が考えられるが、その一つとして激増した大規模漁業による水産資源の乱獲や、サマ漁民を中心とする小規模漁業によるダイナマイト漁などの破壊的漁撈の増加があることは確かであろう。たとえばダイナマイト漁は漁獲の対象となる魚類のみではなく、その他の微小生物やサンゴ礁そのものを破壊する危険性がある。実際、センボルナ郡の離島域における8~9割のサンゴ礁が、ダイナマイト漁によるダメージを受けている可能性があるという(長津 1999: 4)。

したがって現在のセンボルナ郡における周辺の沿岸生態系や水産資源量は、1960年代以前とくらべ急速に悪化し、大きく変容した状態にあると考えられる。そこで次章以降においては、1960年代より激化した近代化の波をうけたサマの漁撈、とくに小規模漁業としての性格が強い伝統漁撈が、(1) 村内における漁家世帯の割合、(2) 漁船や漁具といった物質文化、(3) 実際の漁撈活動、そして(4) 漁撈を介した社会・経済状況という諸側面でどのような現状にあるかを検討する。

4 家計の多様性と資本の所有状況

4.1 漁家世帯の割合

ここでは、おもに利用される漁船や漁具といった物質文化の所有状況や漁撈人口など、現在のサマ漁撈をめぐる概況について紹介する。まず、それぞれの調査村で実際に漁撈をおもな生業としている漁家世帯がどれだけいるのか整理しておきたい。ここでは、センボルナ郡に居住する二つのサマ集団となる「陸サマ」と「海サマ」世帯の比較を軸に検討をすすめる。

A: 陸サマ世帯

表2は調査をおこなった二つの陸サマ村における、世帯単位での就業構造を整理したものである。このうち漁撈をおもな生業とする漁家世帯の占める割合は、両村において50%前後であった。したがって村を構成する全世帯の約半数が、漁撈をおもな生業としていることになる。ただし、両村でおこなわれている漁撈活動の内容には大きな違いがみられた。

オマダル島に立地するS村においては、11世帯の漁家世帯のうちの実に9世帯が、アガルアガルと呼ばれるキリンサイ属(*Eucheuma* sp.)の海藻養殖に従事していた。この海藻養殖はサバ州水産局からの援助をうけて、1999年よりS村に導入された事

表2 陸サマ世帯のおもな生業*

村名	S村 (20世帯)		H村 (35世帯)	
	世帯数	比率** (%)	世帯数	比率 (%)
漁業 (漁家世帯)	11	55.0	17	45.9
小規模漁撈	[2]	[10.0]	[17]	
海藻養殖	[9]	[45.0]		
仲買業	3	15.0	2	5.4
小売業 + 仲買業	[2]	[10.0]	[1]	[2.7]
仲買業のみ	[1]	[5.0]	[1]	[2.7]
賃金・給与労働	0	—	3	8.1
賃金労働			[2]	[5.4]
教員・公務員			[1]	[2.7]
複合経済	3	15.0	11	29.7
A: 自営輸送業 + 漁撈			[5]	[13.5]
B: 賃金・給与労働 + 漁撈	[3]	[15.0]	[6]	[16.2]
換金作物栽培	1	5.0	0	—
無職	2	10.0	2	5.4
調査世帯数	20		35	

* 各世帯における主要な収入源となる生業により分類 ** 少数点以下2位で四捨五入
(出所: 筆者による聞き取り)

業である。したがって、この海藻養殖はS村において新しい漁撈形態であり、それ以前には漁家世帯のすべてが、魚類や貝類の捕獲を目的とした漁撈をおもな生業手段としていたことになる。調査時に海藻養殖に従事せず、漁撈にのみ専念していた2世帯のみであった。このうちの1世帯はダイナマイト漁や潜水漁をおもな漁法としている世帯で、もう1世帯は築^{やな} *bunsud* を所有し、クンピット船での網漁もおこなう漁家世帯であった。

これに対し、ブンブン島の南西岸に立地するH村では漁家世帯と認識される17世帯すべてが、魚類や貝類の捕獲に従事しており、海藻養殖に従事する世帯はいなかった。これはH村の周辺海域が、ひじょうに水深の浅いリーフで囲まれており、海藻養殖で栽培されるアガルアガルの生育には適しておらず、サバ州水産局による事業の対象村とはならなかったためでもある。H村における漁家世帯の半数以上は、釣り漁をおもな漁法とする漁撈をおこなっていた。

調査の対象となったこれらの陸サマ村は、かつては活発な漁撈活動で有名な村であった。しかし表2は、そうした村でさえ近年では漁撈世帯の占める割合が低下しつ

つあることを示している。おなじくこれらの陸サマ村に共通する状況として、図3や図4で示したように漁撈者の高年齢化がある。これは20代から40代を中心とする青年・壮年層の多くが、村外での賃金労働や給与労働に従事していることによっている。

また表2が示すように、村内に居住する世帯でもその半数は、漁撈以外の生業にも従事している。このうちもっとも多く確認された生業形態は、漁撈と賃金労働や輸送業を組みあわせるケースである。これらの世帯でおこなわれる漁撈活動は、自家消費を目的としたもので、それほど積極的におこなわれているものではなかった。現金収入を目的とした経済活動としては、賃金労働や輸送業に依存していることになる。

賃金労働に従事する世帯主の多くは、センボルナ市へと通勤する。村内にすみながら賃金労働に従事する世帯は、S村ではみられなかった。これはS村の立地するオマダル島が、センボルナ市から距離的にかなり離れていることが要因と考えられる。輸送業に相当するのは乗合船の船頭や、ブンブン島内を巡回している乗合バスの運転手で、その勤務時間や日数には個人差が多く一定していなかった。

仲買業には、近隣にすむ海サマや村内にすむ陸サマの漁家世帯から海産物を購入し、センボルナ市にすむ魚商人に販売することを生業とする世帯があたる。これら仲買業をいとなむ世帯は40~60馬力の船外機を利用し、村内で水揚げされた海産物を頻繁にセンボルナ市へと運び、そのついでに食料品を中心とするさまざまな日用品を買いこんでくる。このため、仲買業をいとなむ世帯は、村内で小売の店舗経営も手がけていることが多い。

換金作物の栽培に従事する世帯は、S村で1世帯のみが確認された。これはセンボルナ郡の隣にあるタウウ郡で、果樹園とココア畑を所有していた世帯が相当する。歴史的に早くから定住化がすすみ、ココヤシやキャッサバの栽培にも従事してきた陸サマの中には、1960年代以降の開発にともない内陸に果樹園やアブラヤシ農園を所有し、換金作物の栽培をおもな生業とする世帯の数が増加しつつある。調査をおこなった陸サマ村では1世帯のみであったが、センボルナ半島側にはこうした換金作物の栽培に従事する陸サマ世帯や村落が多く存在する。その一方、これら他の陸サマ村で漁撈をおもな生業とする世帯の割合はより低い傾向がある。

B：海サマ世帯

本稿が対象とする海サマ世帯は、オマダル島のS村に隣接する海サマ集落と、ブンブン島のH村に隣接する海サマ集落である。このうち筆者が世帯調査を実施できたのは、S村に隣接する海サマ集落の20世帯のみである。この集落には100世帯以

上の海サマ世帯が暮らしているため、調査世帯の割合は全体の約20～25%に相当することになる。本稿で検討するデータは、この集落全体をカバーしたものではないが、海サマ集落における大まかな傾向は確認することができるであろう。

表3が示すように、筆者が選択したこれら20世帯のうち、19世帯が漁撈をおもな生業とする漁家世帯であった。聞き取りによれば、世帯調査をおこなえなかった他の世帯においても漁撈が生業となっていることが確認された。これらの状況をふまえるなら、この集落を構成するほとんどの海サマ世帯は漁撈を生業としていることになる。

これらの海サマ世帯はおもに利用する漁法の違いから、大きく二つに分類できる。一つは網漁をおもな漁法とする世帯(13世帯)であり、もう一つは釣り漁をおもな漁法とする世帯(6世帯)である。このうち網漁を専門的におこなう世帯では、家族や親族を基本とする複数の世帯が協同で漁撈をいとなむことが多かった。また網を所有している世帯では、全体的に世帯主の年齢が40代以上とやや高くなる傾向がある。

表3 海サマ世帯のおもな生業

世帯	家族数	総人数	世帯主年齢	おもな漁法	その他の漁撈
1	1	4	46	網漁	なし
2	2	5	32	網漁	釣り漁・ナマコ突き漁
3	2	16	42	網漁	釣り漁・ナマコ漁
4	3	13	60+	網漁	釣り漁
5	1	4	49	網漁	なし
6	2	4	45	網漁	なし
7	3	9	48	網漁	なし
8	3	8	60+	網漁	アガルアガル採集
9	2	8	30	網漁	釣り漁
10	2	6	40+	網漁	シャコ貝採集
11	1	4	45+	網漁	釣り漁
12	1	6	40+	網漁	釣り漁
13	2	7	40+	網漁	釣り漁・アガルアガル採集
14	2	7	40+	塩干魚の仲買	ナマコ漁・網漁
15	2	9	30+	釣り漁・延縄漁	アガルアガル採集
16	1	6	40+	釣り漁	アガルアガル採集
17	4	12	50+	釣り漁	アガルアガル採集
18	1	9	40	釣り漁	なし
19	1	4	30+	釣り漁	アガルアガル採集
20	2	7	30+	釣り漁	ナマコ漁

(出所：筆者による聞き取り)

表3が示すように、網漁をいとなむ世帯でも釣り漁やナマコ突き漁、アガルアガル海藻の採集などが補助的におこなわれ、多様な漁撈活動の実践がみられる。

これに対し、釣り漁をおもな漁法としている世帯の多くは、アガルアガル海藻の採集活動にも従事する世帯の割合が圧倒的に高い。また世帯主の年齢が30代とやや若い世帯が多い傾向がある。これらの世帯では、世帯主を中心とする男性が釣り漁をおこない、その間に世帯主の妻を中心とする女性が野生のアガルアガル海藻を採集するというパターンが多く確認された。

このほかに漁撈以外の生業をいとなむ世帯が1世帯のみ確認された。この世帯はナマコ漁や網漁といった漁撈をおこなう傍ら、おもに塩干魚をあつかう仲買業もいとなむ世帯である。この世帯があつまっている塩干魚は、おもにフィリピン領のシタンカイ島(図1参照)へと卸されている。海サマ世帯の多くは、鮮魚販売のほかに塩干魚の加工にも従事しており、これらの塩干魚は各世帯によってセンボルナの魚商に販売される場合と、シタンカイ島で販売される場合がある。調査で確認された仲買世帯は、このうちの後者の場合に、他の海サマ世帯にかわって塩干魚をシタンカイへ運び、その利息を得ていることになる。

一方、ブンブン島のH村に隣接する海サマ集落では8世帯が確認されたが、各世帯の構成人数や世帯主の年齢、漁船や漁具の所有状況などに関する詳細な世帯調査はおこなっていない。ただし筆者による聞き取りでは、これら8世帯はいずれも網漁をおもな漁法とする漁家世帯であった。

以上の状況をまとめると、陸サマ村に隣接するこれらの海サマ集落では、ほぼすべての世帯が漁撈をおもな生業としており、とくに網漁への比重が高い点を指摘できる。ただし、本稿が対象としているこれらの海サマ世帯は、すでに指摘してきたように、マレーシア国籍をもたない政治難民としての性格が強い。

これに対し、センボルナ郡には1960年代頃から定住化し、現在ではマレーシア国籍をもつ海サマも多い。これら定住化した海サマ世帯で、生業としての漁撈への依存度が低下していることは、Satherや長津による研究からも明らかである(Sather 1984, 1997; 長津 1999)。したがって筆者による調査で確認された状況が、必ずしもセンボルナ郡における他の海サマにも共通するわけではないことを強調しておく。

4.2 漁船の所有状況

現代サマの漁撈においておもに使用される漁船は、すでに紹介した伝統的な小型の木造船である。このうちもっとも頻繁に利用されているのは、全長3~5m、横幅が

1 m 前後のテンペル船（写真1）である。海サマの中には、現在でもこのテンペルを家船として利用する世帯もわずかながらいる（写真2）。テンペルは三角帆や櫂による無動力船としても利用されるが、現在では5～10馬力前後の小型船内機や、10～30馬力の小型船外機を装着した動力船として利用される。

このほかに、無動力船としてはボッゴとよばれる全長2～3m、横幅が0.5m前後のくり舟がある（写真3）。これらテンペルやボッゴなどの小型船は、村落内の移動や周辺海域でおこなわれる漁撈にも利用される。乗員数は、テンペルであれば1～3人、ボッゴは1人が普通である。小型船の建造費はボッゴで100～300RM、テンペルで500～1,000RMが相場となる。

一方、遠方海域での大規模漁業や、輸送業の乗り合い船などとしておもに利用されるのは、全長が5～10m以上、横幅も1.5～5mに達するクンピット船（写真4）である。クンピット船は、船外機か船内機を装着させた動力船として利用される。サイズの比較的小さいクンピット船であれば、40～80馬力の船外機がおもに装着される。これらは乗合船や小規模漁業で利用される漁船でもある。乗合船として船内を改造したものであれば、全長5m前後のものでも20人以上の乗船が可能である。

さらに全長10m以上におよぶクンピット船であれば、100～300馬力の船内機がおもに装着される。エンジンが装着されたクンピット船は、モートル船 *motor* と称されることがある。これらは、エビなどを対象とした底曳網漁などに利用される。クンピット船の建造費は、全長が5m前後のものでも3,000RM、10m以上のものでは10,000RM以上であり、テンペルなどの小型船に比べるとはるかに高い。

ここでは、現代サマによって利用されるこれらの漁船の所有状況を、陸サマ世帯と海サマ世帯を軸に整理する。

A：陸サマ世帯

表4は調査した二つの陸サマ村と、S村に隣接する海サマ集落における漁船の所有状況を、村全体および世帯単位での所有数と所有率にしたがって整理したものである。まず村全体でみた場合、S村でのテンペル・ボッゴ船の総数は22隻、所有率は86%であった。H村でのテンペル・ボッゴ船の総数は36隻、所有率は88.5%であり、その所有率はほぼ両村で類似した状況となっている。

これに対し、クンピット船では、H村での所有率が31.4%（11隻）であったのに対し、S村での所有率は14%（3隻）とやや異なる状況を示した。H村におけるクンピット船の多くは、乗合船として利用される比較的小さいタイプで、数隻は仲買

小野 ボルネオ島サマ人による漁撈の「近代化」と「伝統」



写真1 テンベルでの漁撈風景 (2004年 筆者撮影)



写真2 家船として利用されるテンベル (2003年 筆者撮影)



写真3 ボッグの一例 (2003年 筆者撮影)



写真4 クンピットで結婚式に向かう海サマ (2004年 筆者撮影)

表4 漁船の所有数（全体）と所有率（世帯単位）

就業形態	S 村		H 村	
	テンペル & ボッゴ	クンピット	テンペル & ボッゴ	クンピット
村（全体）	(20 世帯)		(35 世帯)	
所有数	22 隻	3 隻	36 隻	11 隻
所有率	86.0%	14.0%	88.5%	31.4%
小規模漁業	(11 世帯)		(17 世帯)	
所有数	13 隻	1 隻	21 隻	4 隻
所有率	95.0%	5.0%	100%	23.5%
仲買業	(3 世帯)		(2 世帯)	
所有数	4 隻	1 隻	2 隻	1 隻
所有率	100%	33.0%	50.0%	50.0%
賃金・給与労働	(0 世帯)		(3 世帯)	
所有数	—	—	1 隻	0 隻
所有率	—	—	33.3%	0%
複合経済	(3 世帯)		(11 世帯)	
所有数	2 隻	1 隻	13 隻	6 隻
所有率	66.6%	33.3%	100%	54.5%
換金作物栽培	(1 世帯)		(0 世帯)	
所有数	1 隻	0 隻	—	—
所有率	100%	0%	—	—
無職	(4 世帯)		(2 世帯)	
所有数	2 隻	0 隻	0 隻	0 隻
所有率	50.0%	0%	0%	0%

（出所：筆者による聞き取り）

人によって水揚げされた魚類の運搬に利用されている。おなじく S 村におけるクンピット船も、1 隻は乗合船として利用され、残りの 2 隻は水揚げされた魚類の運搬に利用されており、クンピット船が漁撈活動そのものに利用されることはなかった。

つぎに世帯単位での所有状況を検討すると、漁家世帯におけるテンペル・ボッゴ船の所有率は高く、H 村においては 100%、S 村では 95% であった。S 村での所有率が 100% とならなかったのは、築漁をおもな漁法としている 1 世帯がクンピット船のみを利用していたためである。したがってクンピット船も含めれば、S 村の漁家世帯における漁船所有率も 100% となる。両村におけるテンペル・ボッゴ船の総数が、各村の世帯数を超えているのは、単一世帯で漁船を複数所有している世帯が存在すること

を意味している。

表4では、漁撈をおもな生業としていない世帯の所有状況も整理した。これらの陸サマ村では、漁家世帯ではない世帯においても船を所有する世帯が多いことがわかる。漁家以外の世帯で所有率がもっとも高いのは、海産物を運ぶ仲買業をいとなむ世帯であり、その所有率は両村で100%となった。H村ではこのほかに複合経済世帯における漁船の所有率が100%となった。このうち後者の世帯では、輸送業のさいに乗合船として利用されるのが一般的であった。H村における複合世帯で、クンピット船の所有率が54.5%と高かったのは、これを背景としている。

B：海サマ世帯

海サマ集落では、調査対象となった20世帯のうち19世帯が、最低でも1隻のテンペル船かボグゴ船、あるいはクンピット船を所有していることが確認された(表5)。調査時に船を1隻も所有していなかった1世帯は、出漁のさいに家族や親戚にあたる他世帯の漁船に便乗させてもらうか、使用していない漁船を借りることで漁撈をおこなっていた。このような漁船の貸し借りが容易な背景として、海サマ世帯における漁船所有数の高さがあげられる。表5にも示されるように、19世帯で所有されている漁船の総数は31隻であり、1世帯あたり最低でも1.5隻の漁船を所有していることになる。

表5 海サマ世帯の漁船所有

海サマ	船あり	船なし	テンペル	ボグゴ	クンピット	総数
数	19世帯	1世帯	13隻	15隻	3隻	31隻
率/全体	95%	5%	65%	70%	15%	155%

(出所：筆者による聞き取り)

海サマ世帯でクンピット船を所有する世帯は5世帯が確認された。このうちの2世帯は、クンピット船を家船として生活する海サマ世帯である。これらの海サマ世帯では、家船であるクンピット船がそのまま漁撈にも利用される。また他の1世帯はテンペル船とクンピット船を所有していた仲買世帯で、調査時にクンピット船は出漁中であった。家船世帯をふくめ、クンピット船を利用した漁撈活動は、平均1~2週間といった長期間に渡っておこなわれることが多い。この場合、そのおもな漁場となるのは、ブンブン島やオマダル島から東南20kmに位置するリジタンリーフとよばれる、センポルナ郡でももっとも面積の広いサンゴ礁海域である。

H村に隣接する海サマ集落では詳細な世帯調査を実施していないが、筆者による観察では、すべての世帯が最低でも1隻のテンペル船やボグゴ船を所有していたが、クンピット船の所有はみられなかった。

4.3 エンジンの所有状況

センボルナ郡において、1960年代より急速に普及しだした船外機や船内機といったエンジンは、漁民であれば誰もが欲しがると重要な船具の一つとなった。近年のセンボルナ郡で、小規模漁業に従事するサマ漁民がもっとも頻繁に利用してきたのは、パンボート *pombot*⁽⁸⁾ と呼ばれる5~16馬力の小型船内機である。ついでヤマハ、スズキ、トウハツといったおもに日本製の9~39馬力の小型船外機がつづく。このうち前者の相場価格は中古品で500~1,000RM、新品だと1,000~2,000RMとなる。後者の場合は中古品で1,000~2,000RM、新品だと2,000~4,000RMである。したがって、これら小型エンジンの価格は、テンペル船やボグゴ船の建造費よりも高い。

一般的には、小型船内機となるパンボートの方が低価格で、燃費も安い。しかし、パンボートは2002年よりサバ州で使用が禁止され、使用が発覚した場合は罰金・没収されるようになった。その背景には、パンボートが逆進できず危険なことや、騒音がうるさいこと、さらに違法となるダイナマイト漁などに従事する漁民がパンボートを利用する傾向が高いという政府側の認識があった。しかし、もっとも安価だったパンボートの規制は、サマ漁民をふくむサバ州全域の小規模漁民にもダメージを与え、調査時にも規制に対する不満は大きかった。

このほかにより大型のクンピット船などに装着されるエンジンとして、40馬力以上の船外機や、100~300馬力の大型船内機がある。これら中~大型船外機の相場価格は、中古品でも5,000~10,000RM、新品だと8,000~20,000RMとなる。さらに大型船内機の相場価格は、中古で10,000~20,000RM、新品だと40,000~70,000RMとかなり高い。以下においては、世帯におけるエンジンの所有状況を、陸サマ世帯と海サマ世帯を軸に整理する。

A：陸サマ世帯

表6は、調査した二つの陸サマ村におけるエンジンの所有状況を、生業別に整理したものである。まず村全体でみた場合、陸サマのS村での所有エンジン数は18機、所有率は90%であった。これに対し、H村でのエンジン数は26機、所有率は74%であり、その所有率はS村がやや高い。S村においてもっとも利用されているエンジ

表6 陸サマ世帯におけるエンジンの所有状況

生業	S 村				H 村			
	船外機小 9-39 hp	船外機中 40 hp~	船内機* 5-10 hp	総数	船外機小 9-39 hp	船外機中 40 hp~	船内機 5-10 hp	総数
村(全体)	(20 世帯)				(35 世帯)			
所有数	7 機	5 機	6 機	18 機	9 機	11 機	6 機	26 機
所有率	35%	25%	30%	90%	25.7%	31.4%	17.1%	74.3%
小規模漁業	(11 世帯)				(17 世帯)			
所有数	5 機	1 機	5 機	11 機	4 機	5 機	6 機	15 機
所有率	45.4%	9.0%	45.4%	100%	23.5%	29.4%	35.2%	88.2%
仲買業	(3 世帯)				(2 世帯)			
所有数	1 機	4 機	0 機	5 機	1 機	2 機	0 機	3 機
所有率	33.3%	133.3%	0%	166.7%	50%	100%	0%	150%
賃金・給与労働	(0 世帯)				(3 世帯)			
所有数				—	1 機	0 機	0 機	1 機
所有率				—	33.3%	0%	0%	33.3%
複合経済	(3 世帯)				(11 世帯)			
所有数	1 機	0 機	1 機	2 機	4 機	4 機	1 機	9 機
所有率	33%	0%	33%	66%	36.3%	36.3%	9.0%	81.8%
換金作物栽培	(1 世帯)				(0 世帯)			
所有数	0 機	0 機	0 機	0 機				—
所有率	0%	0%	0%	0%				—
無職	(3 世帯)				(3 世帯)			
所有数	0 機	0 機	0 機	0 機	0 機	0 機	0 機	0 機
所有率	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%

*パンボートのこと

(出所：筆者による聞き取り)

ンは、39馬力以下の小型船外機であり、ついでパンボートがつづく。一方、H村では40馬力以上の中型船外機における所有率ももっとも高く、ついで39馬力以下の小型船外機がつづく。パンボートの所有率が船外機に比べて低いのは、近年における規制の結果とかがえられる。大型船内機は両村では所有が確認されなかった。

生業別にみると、漁家世帯でのエンジン所有率はS村では100%となったのに対し、H村では88%となった。したがって漁家世帯のなかには動力船を自前では使用できない世帯も存在している。ただしエンジンを所有していない世帯が、出漁のさいに他の世帯からエンジンを借りるケースは確認された。この場合、エンジンを借りるためにレンタル料をはらうことはなく、燃料のみを自前で用意すればよい。十分な漁獲が

あった場合には、借りたお礼にその一部を分配する。その他の事例では、エンジンを装備した動力船に何隻かの無動力船（ボグゴなど）を係留して出漁し、漁場では櫂を使用して漁撈をおこなう場合もある。この場合、漁獲は各自で所有され、分配されることはないが、動力船の移動にかかった燃料費は参加した漁師で均等に負担する。したがって、エンジンを所有していなくても漁撈ができないことはない。

漁家世帯以外では、仲買世帯でのエンジン所有率が150～160%と非常に高かった。これら仲買世帯では、40馬力以上の船外機の所有率がとくに高く、海産物を迅速に運ぶ必要のある仲買業の戦略を反映していると考えられる。H村では複合経済世帯での所有率が82%と高いが、これは輸送業をおこなうために大型の船外機が必需となることを背景としている。

B：海サマ世帯

海サマ世帯では、調査対象となった20世帯のうちエンジンを所有していたのは9世帯のみであり、その所有率は陸サマ世帯と比べると明らかに低い（表7）。

表7 海サマ世帯におけるエンジンの所有状況

海サマ	エンジンあり	エンジンなし	船外機小* ¹	船外機中* ²	船内機* ³	総数
数	9世帯	11世帯	1機	1機	7機	9機
率/全体	45%	55%	5%	5%	35%	45%

*¹: 9-39 hp *²: 40 hp 以上 *³: パンボート

(出所：筆者による聞き取り)

海サマ世帯で所有されるエンジンの8割は、パンボートであった。したがって、政府によるパンボート規制が、海サマ世帯における低いエンジン所有率の要因の一つとなっている可能性がある。海サマ世帯での漁撈でも、陸サマ世帯とおなじくエンジンの貸し借りや、動力船に係留するかたちでの共同出漁がおこなわれていた。また釣り漁やアガルアガル海藻の採集などを目的とした近海での漁撈には、手漕ぎによる無動力船での出漁も頻繁にみられた。

H村に隣接する海サマ集落でも、パンボートを使用して出漁する漁師と手漕ぎによる無動力船で漁撈をおこなう漁師が確認されたが、各世帯での詳細な所有率については不明である。

4.4 漁具の所有状況

現代サマの漁撈で利用頻度が高い漁具には、漁網、釣り針、釣り糸、鉾、水中銃、

水中眼鏡があげられる。このうち種類と価格幅にもっとも多様性がみられるのは漁網である。たとえば、小規模漁業で頻繁に利用される刺網 *linggi*' は、1枚 50m 前後で 30~40 RM が相場であり、実際には 5~10 枚分の網をつなぎ合わせて使用される。このため、漁網の購入費は合計で 150~400 RM になる。漁網をふくめ、漁具はいずれも消耗品でもあるため、補修や交換が求められる。漁網の補修は所有者による手仕事でおこなわれ、補修が不可能である場合にはその部分のみが新しい網に交換される。網の消耗度は利用頻度や補修頻度によって差が大きい。

つぎに釣り糸や釣り針の相場価格は、釣り糸が 1 巻きで 3~5 RM、釣り糸が 1 本で 1~3 RM である。釣り糸はナイロン製 *tansi* のものが主流となる。底棲魚を狙う釣り漁では、釣り針が海底やサンゴ礁に引っかかる危険が高く、糸や針の消耗は激しい。このため、頻繁に釣り漁をおこなう世帯では、釣り糸や釣り針を複数所有していた。釣具にはこの他に疑似針や延縄がある。イカ釣り用の疑似針はエビを模したものであり、市場で購入する場合の相場は 5~10 RM である。所有者が自分で製作することも多い。この場合、木を削った手製の疑似餌に市販の針を装着して使用する。

突き漁で利用されるヤスや銛の場合、木製となる棒（シャフト）の部分は自家製であり、鉄製の銛のみが市場で購入される。その相場価格は、5~15 RM である。ヤスや銛の消耗や損失はそれほど激しくなく、長期間の利用が可能である。水中銃 *pana*' も木製で、手作りを基本とする。入手する必要があるのは、バネとなるゴムと鉄製の鎌であるが、これらは廃材をリサイクルして利用する機会が多い。

潜水漁に欠かせないもう一つの漁具が水中眼鏡である。これも一般的には木製のフレームにガラスをはめ込んだ手作りのものが利用される。木製の水中眼鏡は市場でも購入可能であり、相場価格は 3~6 RM である。現在のセンポルナではプラスチック製の水中眼鏡も販売されているが、調査村での使用はほとんど確認されなかった。水中眼鏡は、海中に潜る必要のあるダイナマイト漁で頻繁に利用される漁具でもある。

以下においては、世帯における漁具の所有状況を、陸サマ世帯と海サマ世帯を軸に整理する。

A：陸サマ世帯

表 8 は、調査村における村全体、および漁家世帯での漁具の所有率を整理したものである。漁具を所有する場合、釣り具や網などは 1 世帯で複数所有することが多い。このため世帯における所有数は、複数所有の場合も「1」として計算した。その結果、

陸サマの漁家世帯では釣り具と水中眼鏡の所有率をもっとも高いことが明らかとなった。釣り具の所有率はS村で90%、H村で95%に達した。水中眼鏡の所有率は両村で80~82%である。ついで両村で所有率の高かったのはヤスや銛で、S村で82%、H村で71%であった。

表8 陸サマ世帯における漁具の所有率*

村名	世帯数	小型網類	大型網類	釣り具	ヤス・銛	水中銃	水中眼鏡
S村(全体)	20世帯	27%	5%	81%	68%	45%	86%
漁家世帯	11世帯	27%	9%	90%	82%	45%	82%
H村(全体)	35世帯	43%	0	81%	54%	18%	70%
漁家世帯	17世帯	38%	0	95%	71%	28%	80%

* 複数の場合も所有数は“1”として計算

(出所：筆者による聞き取り)

これに対し、陸サマ世帯における網の所有率は概して低い。漁網は小型網類のみが利用されており、その所有率はS村で27%であるが、H村では38%とより高くなった。一方、水中銃の所有率では、H村の28%に対し、S村が45%とより高くなった。S村が立地するオマダル島の東岸域は礁斜面に近く、潜水漁にとって好漁場が多いことが、S村における水中銃の所有率の高さに反映されているかもしれない。

B：海サマ世帯

表9は、海サマ世帯での漁具の所有率を整理したものである。海サマ世帯でも釣り具や水中眼鏡の所有率は高く、釣り具で70%、水中眼鏡は90%に達した。海サマ世帯では漁網の所有率も55%と陸サマ世帯に比べてより高かった。ただし、所有される漁網はいずれも小型網類であり、底曳網などの大型網類は確認されなかった。

表9 海サマ世帯における漁具の所有率*

海サマ集落	世帯数	小型網類	大型網類	釣り具	ヤス・銛	水中銃	水中眼鏡
全体	100+世帯						
漁家世帯	19世帯	55%	0%	70%	35%	10%	90%

* 複数の場合も所有数は“1”として計算

(出所：筆者による聞き取り)

一方、水中銃の所有率は10%、ヤスや銛の所有率も35%と低い。海サマ世帯における水中銃やヤス・銛の所有率が低いことは、海サマ世帯で潜水漁や突き漁をおこなう割合が低いことを示唆している可能性がある。

5 現代サマの漁撈活動

5.1 おもな漁法

現代サマによって利用される漁法は、小規模漁業による漁法と中・大規模漁業による漁法におおきく二分できる。さらに小規模漁業では、陸サマと海サマのあいだでも、利用される漁法に相違がある。本稿では、このうち伝統的なサマの漁撈の流れをくむ小規模漁業に焦点をあて、陸サマと海サマを軸に現代サマによっておこなわれる漁法について紹介する。

A：陸サマ世帯

表 10 は、調査中に観察、あるいは確認された陸サマの漁法を整理したものである。陸サマ世帯によって利用される漁法には、(1) 網漁、(2) 釣り漁、(3) 突き漁、(4) 魚毒漁、(5) 潜水漁、(6) 籠・釜漁、(7) シャコ罟漁、(8) ダイナマイト漁のほか、厳密には漁撈ではないが、(9) 潮間帯での採集と(10) 海藻養殖業、(11) 畜殖業といった活動があげられる。このうち(1)～(7)までの漁法は、サマの伝統漁撈でおこなわ

表 10 陸サマ世帯による漁法の種類

漁法／形態	名前	方法	操業人数	漁場
(1) 網漁	<i>maglinggi'</i>	追い込み刺網	2-3 人	礁池—礁原
	<i>amungsud</i>	エリ漁	1-2 人	礁池—礁原
	<i>magkagon</i>	カニ刺網漁	1-2 人	礁池—礁原
(2) 釣り漁	<i>amissi</i>	手釣り	1-2 人	礁池—礁縁
	<i>angullan</i>	疑似餌釣り	2-5 人	礁池—礁原
(3) 突き漁	<i>anu'</i>	棒突き	1-3 人	礁原
	<i>magbat</i>	ナマコ突き	1-3 人	礁原
(4) 魚毒漁	<i>anuwa'</i>	毒漁	1-2 人	礁内の浅瀬
(5) 潜水漁	<i>magpana'</i>	潜水+水中銃	1-2 人	礁原・礁縁
(6) 籠・釜漁	<i>magbubu</i>	籠+釜	1-2 人	礁原・礁縁
(7) シャコ罟漁	<i>anahat</i>	仕掛け罟	1-2 人	礁原
(8) ダイナマイト漁	<i>animbak</i>	爆発+潜水	1-5 人	礁原・礁縁
(9) 採集	<i>magi'bba</i>	徒歩・手づかみ	1-5 人	礁原
(10) 海藻養殖	<i>mag-agaragar</i>	アガルアガルの栽培	1-5 人	礁池—礁原
(11) 畜殖		活魚の畜殖		礁池—礁原

(出所：筆者による観察・聞き取り)

れてきた漁法でもある。

しかし、表 10 にも明らかなように (1) 網漁の種類は三つが確認されたのみで、かつての伝統漁撈に比べると多様性がみられなくなった。このうちの一つはかつて *anakop* とよばれた追い込み刺網漁である。追い込み刺網漁では、目合が 5 cm 前後の比較的大きいナイロン製網に、古いゴム草履などを浮きとして付けた上で、船上から網を投げ入れていく。網の設置が終わると、漁船の上から棒で水面を叩くか、水中に入って威嚇しながら獲物を仕掛けた網の方向へと追い込み、逃げ惑って刺網にかかる魚類を獲得するのが一般的である。

二つ目は築漁で、サマ語で *bunsud*、マレー語では *kelong* と呼ばれる築を設置する漁である。一般的な築の構造は、2本の網が海岸の一点にむけて収束するよう設置され、設置網の長さは 50~500 m とさまざまである。獲物を誘い込む 2本の設置網が交わる中心部には袋網が設置され、魚類はここに誘導され、閉じ込められる。築の垣網の支柱にはマングローブなどの木材が利用され、網には底曳網が代用されることが多い。

カニ刺網漁は、1990年代になって頻繁に用いられるようになった新しい網漁で、夕方頃に砂地の海底に網を設置し、翌朝その仕掛けた網をあげてカニ *kagon* を漁獲するものである。この漁法が普及した背景には、1990年代以降におけるセンボルナ郡でのカニ価格の高騰があった。

おなじく 1990年代に商品需要の高騰がみられたのがシャコである。(7) シャコ罟漁はサマの伝統的な漁法の一つで、よくしなる小枝の先に糸を縛り、これを穴の周囲に輪状に曲げた小枝に引っ掛けた跳ね罟を仕掛けてシャコをとる。しかしシャコは水揚げすると数時間で死んでしまうことや、他のシャコと一緒にすると共食いしてしまうことなどから商品としての流通が難しかった。ところが、1990年代にはいと普及しつつあったペットボトルを利用することで、シャコの活魚流通が可能となった。これは1本のペットボトルに海水とシャコ1匹を入れ、水揚げ後すぐに陸路や空路で流通するシステムであり、シャコはおもに中華料理の素材として消費される。このシャコ需要の高まりから、多くのサマ漁民がシャコ罟漁をおこなったという。しかしその結果、センボルナ郡におけるシャコ資源量は激減し、シャコ漁をおこなうサマ漁民は現在では散見される程度である。

(2) 釣り漁と (3) 突き漁は、現在の陸サマ世帯がもっとも頻繁におこなう漁法の一つである。ただし、陸サマ世帯でおこなわれる釣り漁は、手釣り漁とイカを対象とした疑似餌釣りが確認されたのみで、延縄漁やサメ漁は現在ではおこなわれていな

かった。おなじく突き漁でみられたのは、夜間におこなわれる刺突漁やナマコ漁のみで、ウミガメやエイなどの大物を狙った銚漁はおこなわれていない。H村ではすでにナマコが枯渇しており、ナマコ漁をおこなう漁民はみられなかったが、S村ではナマコ漁をおこなう世帯が数世帯だが確認された。漁獲されたナマコは村内で水抜き加工し、直接あるいは仲買人によってセンポルナ市にすむナマコ業者へと販売される。

(6) 籠・釜漁はマレー語で *bubu* とよばれる籠や釜を海底に設置し、さまざまな魚種を漁獲する漁法である。籠・釜漁はサマの漁撈ではそれほど頻繁におこなわれてきた漁法ではないが、最近では活魚を漁獲する目的から積極的に利用する世帯がある。

(8) ダイナマイト漁は、陸サマ漁民の間でも1970年代頃より頻繁に利用されてきた漁法の一つである。サマが使用する爆薬は、市販の硝酸アンモニウムに油剤を混ぜた硝安油剤爆薬で、これをビールやコーラの空き瓶に詰め、海に投げこむ。その際には、魚群が多いと判断した水深に応じて、導火線の長さを調節する。その結果、海底ないしは海中で爆発した起爆物の影響で、気絶・死亡した魚類が海上に浮上してくるところを、手網や素手で漁獲するという方法である。海上に浮上した魚群が沈んでしまう前に、短時間で収集しなければならないため、この漁は数人でおこなわれることが多かった。

しかし、ダイナマイト漁をおこなう陸サマ漁民の数は、2000年頃より減りつつある。その原因として、2000年にセンポルナ郡にあるシパダン島で起こったフィリピン系の犯罪組織であるアブサヤフによる誘拐事件以来、この海域でパトロールする海上警察や軍隊の数が急増したことがあげられる。またもう一つの要因として、漁業省の取締り強化により、ダイナマイト漁やシアン化合物による毒漁によって水揚げされた魚類の販売が禁止され、販売者自身が検挙される危険性がでてきたこともある。ただし、ダイナマイト漁は完全に消滅したわけでもなく、筆者の滞在中も陸サマ漁民によるダイナマイト漁を何度か目にするがあった。

(9) 潮間帯での採集は、おもに女性や子供によって日中おこなわれることが多い。おもな漁獲対象は貝類やウニ類 (*tayum, tehetehe*) である。採集活動は、村落の前面に広がる潮間帯で干潮時におこなわれるのが一般的であるが、特定の貝種やウニ等を採集する際には、対象種が息する遠方の浅瀬や潮間帯でおこなうこともある。貝類やウニ類は、基本的に自家消費されることがほとんどである。このほかに採集される海産物としては、イソギンチャク *bobohan* (種名不明) や海ブドウ *lato'* (*Caulerpa lentillifera*) などの海藻類がある。

(10) 海藻養殖は、1970年代にフィリピンより導入されたアガルアガルの養殖であ

る。センボルナ郡の陸サマ世帯でこの海藻養殖が盛んになったのは、1980年代以降である。アガルアガル養殖に必要な道具類は、アガルアガルの種苗を縛るプラスチック製の紐と、それらを結びつける250m～500mほどの長さをもつロープ、ロープをつなぐ支柱となる棒、それに浮きの代わりとなる大量のペットボトルの空き瓶のみである。種苗は、養殖の初期には購入する必要があるが、養殖が軌道にのれば、自家生産することも可能である。

海藻養殖の大まかな過程は、(1)種苗をプラスチックの紐で縛り、(2)これらの種苗を養殖する海域に設置されたロープに一本ずつ縛りつける。やがて1～2ヶ月が経過したら、(3)成長したアガルアガルを収穫し、(4)その中から新たな種苗を選択し、再び(1)からの過程をくりかえす。一方、残ったアガルアガルは(5)1～2週間の日干し後、十分に乾燥したアガルアガルを袋に詰めて販売する。したがって、時間の経過とともに養殖面積を増やすことも理論上は可能であるが、実際には天候などの海洋条件によってアガルアガルが全滅することも少なくない。調査時におけるアガルアガルの相場価格は、乾燥アガルアガル1kgで1.6RMから2.0RMであった。販売の際の最小単位は100kgからが一般的である。

(11) 畜殖は、活魚として販売可能な魚類の一時的な飼育と販売である。サマによる畜殖のおもな対象水族は、ハタ科 (Serranide)、フエダイ科 (Lutjanidae)、ミミガイ科の貝 (*Haliotis* sp.)、イセエビ科のエビ類 (*Panulirus* sp.) など商品価値の高い水族があげられる。調査地では、おもに海サマ世帯によって漁獲された魚類を陸サマ世帯が購入し、畜殖をおこなうのが一般的であった。畜殖されたこれらの水族は、一定のサイズに達すると、センボルナ市近郊に集中する中国系マレーシア人らによる養殖業者へと販売される。センボルナ市近郊における養殖業者への販売価格は、ベラ科のメガネモチノウオ (*Cheilinus undulates*) が1kgあたり70RM、ハタ科のサラサハタ (*Cromileptes altivelis*) は1kgあたり80RM、スジアラ (*Plectropomus leoarudus*) などのハタ科魚種が1kgあたり20～40RMであった。

B：海サマ世帯

表11は調査中に観察、あるいは確認された海サマの漁法を整理したものである。海サマ世帯によって利用される漁法には、(1)網漁、(2)釣り漁、(3)突き漁、(4)魚毒漁、(5)籠・釜漁、(6)潜水漁、(7)シャコ毘漁、(8)潮間帯での採集がある。

このうち海サマ世帯がもっとも頻繁に利用するのが(1)網漁であり、その種類も陸サマ世帯に比べ多かった。その多くは紹介したサマの伝統的な漁法に類似するが、

表 11 海サマ世帯による漁法の種類

漁法／形態	名前	方法	操業人数	漁場
(1) 網漁	<i>Amahang</i>	蔓追い込み網漁	2-3 人	礁内水道
	<i>Anakop</i>	追い込み刺網	2-3 人	礁池—礁原
	<i>Binankad</i>	引き網漁	3-10 人	礁池—礁原
	<i>amokot</i>	まき網漁	3-6 人	礁内の浅瀬
(2) 釣り漁	<i>amissi</i>	手釣り	1-2 人	礁池—礁縁
	<i>angalaway</i>	延縄	2-5 人	礁縁—外洋
	<i>angullan</i>	疑似餌イカ釣り	2-5 人	礁池—礁原
(3) 突き漁	<i>anu'</i>	棒突き	1-3 人	礁原
	<i>magbat</i>	ナマコ突き	1-3 人	礁原
	<i>ahiyak pahi</i>	エイ突き	1-3 人	礁原—外洋
(4) 魚毒漁	<i>anuwa'</i>	毒漁	1-2 人	礁内の浅瀬
(5) 籠・釜漁	<i>bubu</i>	籠+釜	1-2 人	礁原・礁縁
(6) 潜水漁	<i>magpana'</i>	潜水+水中銃	1-2 人	礁原・礁縁
(7) シャコ罟漁	<i>anahat</i>	仕掛け罟	1-2 人	礁原
(8) 採集	<i>magalai</i>	徒歩・手づかみ	1-5 人	礁原

(出所：筆者による観察・聞き取り)

その中でも頻繁にみられたのは蔓追い込み漁や追い込み刺網漁、まき網漁である。蔓追い込み漁は、潮が満ちてくる頃にサンゴ礁内の水道に仕掛けられ、その間に数人の漁師が水道の両サイドから蔓を使って魚を威嚇し、設置した網へと追い込む漁である。一方、まき網漁は、袋網がついた微小の目合のまき網を利用し、おもにマングローブ域やその周辺の礁原域でおこなわれる。この漁は潮が引く頃にマングローブや沿岸域から礁原へと戻ってくるイワシ科やクロサギ科などの小型魚類を狙った漁である。

(2) 釣り漁でもっとも頻繁におこなわれるのは手釣り漁であるが、海サマ世帯では延縄漁をおこなう世帯も少数ながら確認された。延縄漁は、1本の釣り糸に数10～100本の大型釣り針を結びつけ、おもに外洋域でサメや回遊魚を狙う釣り漁である。この延縄漁やイカの疑似餌釣り漁は、夜間におこなわれる漁でもある。またこれらの漁は外洋域で行われることもあり、集団で出漁するケースが多い。(3) 突き漁は海サマ世帯によってもおこなわれるが、それほど頻繁にはおこなわれていなかった。

(4) 魚毒漁には、*anuwa'*と呼ばれる伝統的な漁法と、化学薬品を使用する近代的な漁法の2つがある。このうち *anuwa'* は、マメ科デリス属の根より抽出される毒 *tuwa'* を使用することで、サンゴの岩陰に生息する魚類を一時的に麻痺させ、漁獲す

る。デリス科植物から抽出される毒は、海水と混ざるためにそれほど強くはなく、魚は気絶するのみで死ぬことはほとんどない。

これに対し、化学薬品を使用する魚毒漁に使用される薬品は農薬の一種（シアン化合物）で、伝統的な魚毒漁で使用されるデリス属植物よりも毒性が高い。このため漁獲対象以外の小魚やプランクトンなどをも殺傷し、海中生態系を破壊する危険性が高いことから、現在ではサバ州政府によって禁止されている漁法である。しかし、ダイナマイト漁とは異なり無音で気づかれにくく、また活魚の漁獲も可能なので、この毒漁を利用している海サマ世帯は少なくない。

(5) 籠・筌漁は海サマ世帯においては、それほど活発におこなわれている漁法ではなく、数世帯がこの漁法を利用しているのが確認された程度である。(6) 潜水漁には水中銃を使用するものと、使用しないものがある。このうち海サマ世帯が頻繁におこなっているのは、水中銃を用いない潜水漁で、おもにサンゴ礁などの岩場に生息するミミガイ科のトコブシやシャコガイを狙うものが多い。トコブシを狙った潜水漁は1990年代末ころから本格化したもので、S村に隣接する海サマ集落では頻繁におこなわれていた。海サマ世帯によって漁獲されたこれらのトコブシは、S村にすむ陸サマの仲買人に活魚の状態で売られ、センボルナ市にある業者へと運ばれている。

(7) シャコ罟漁も、現在では自家消費を目的として稀にしかおこなわれていない。おなじくダイナマイト漁をおこなう海サマ世帯は、筆者による調査中に確認することができなかった。すでに論じたように2000年より激増した海上警察によるパトロールの強化が、その要因として指摘できる。違法漁業が発覚したさいの量刑は、外国人に対してより厳しく設定されており、マレーシア国籍をもたない海サマ世帯によるダイナマイト漁は陸サマ世帯に比べてよりリスクが大きい。

(8) 採集活動は女性や子供を中心に、海サマ世帯でも頻繁におこなわれている。とくに海サマ世帯でよくみられたのは、女性によっておこなわれる野生アガルアガルの採集である。オマダル島の周辺にはアガルアガルが自生している海域があり、海サマ世帯はおもにこの海域でアガルアガルを採集している。採集されたアガルアガルは杭上家屋の軒先で乾燥され、フィリピン領となるシタンカイ島へ運ばれる。聞き取りによれば、センボルナ郡ではより質が高いとされる養殖アガルアガルのみが取引の対象となるが、シタンカイでは野生アガルアガルも商品として販売ができるためであるという。

一方、海サマ世帯はアガルアガルの海藻養殖はおこなっていなかった。海藻養殖にはある程度の海域を利用する必要があるが、不法滞在者や外国人としてあつかわれて

いる海サマ世帯にはその権利がないことや、これらの海サマ世帯がサバ州政府による支援事業の対象とはなっていないことなどがその要因として指摘できる。畜殖をおこなう海サマ世帯も確認できなかったが、畜殖をおこなう陸サマ世帯への活魚の提供者は、海サマ漁民が多くを占めていた。

5.2 漁法の選択と漁獲効率

調査村における漁撈活動のうち、筆者が直接に観察できた漁撈活動は17回、出漁前後の記録を取れた漁撈活動は84回を数えた¹⁹⁾。これらの漁撈活動はいずれも村周辺の沿岸サンゴ礁海域でおこなわれた小規模漁業によるもので、礁外でおこなわれる大規模漁業による底曳網漁やまき網漁は対象となっていない。このうち、陸サマによる漁撈活動が43回、海サマによる漁撈活動が58回である。ここではこれらの記録から陸サマおよび海サマ世帯によって利用された漁法を、その漁獲効率との関わりから検討する。

A：陸サマ世帯

表12は筆者によって観察された、陸サマ世帯による43回の漁撈活動の内訳を、平均操業者数、平均漁撈時間、平均漁獲高、漁獲効率別に整理したものである。表が示すように、陸サマ世帯でもっとも頻繁に観察された漁法は手釣り漁で、合計19回を記録した。これら観察された手釣り漁は、2004年11月6日～25日の間に、H村のR氏宅で水揚げする陸サマ漁師によっておこなわれたものである。この他に、6回の水中銃を用いた潜水漁(S村)、7回の採集活動(S村)、1回の刺網漁と突き漁(H村)、

表12 観察・記録された陸サマ漁撈の内訳

出漁者	漁法	回数	操業者数 (人・平均)	漁撈時間 (時間・平均)	漁獲高 (kg/時間)	漁獲効率 (kg/時間・人)
陸サマ	手釣り	19	1	7.1	1.2	1.2
	カニ刺網	7	1	1.5	1.8	1.8
	採集	7	2.3	3	0.4**	0.19
	潜水	6	1	2.9	1.2	1.2
	ナマコ突き	2	1	5.5	0.4*	0.4*
	刺突	1	2	2.5	0.8	0.4
	刺網	1	2	7.5	1.6	0.8
	合計	41	—	—	—	—

* 加工（煮沸・数日乾燥）後の重量（0.4kg＝平均15匹分に相当）

** 可食部のみで計量（殻は含まず）（出所：筆者による観察・聞き取り）

2回のナマコ突き漁（S村）が観察された。

まず操業者数でみた場合、陸サマ世帯による漁撈では多くても2人でおこなわれ、1人でおこなわれた漁撈も少なくない。平均では2.3人となった採集活動がもっとも多かった。これは調査村での女性や子供たちが、複数で採集をおこなうことが多かった結果である。男性による漁撈では、刺突漁や刺網漁での操業者数が2人であり、手釣り漁や潜水漁、ナマコ突き漁は単独でおこなわれることが多かった。したがって、全体的に陸サマ世帯による漁撈は少人数でおこなわれる傾向が強い。

つぎに漁撈時間²⁰⁾でみた場合、漁撈時間が長かったのは刺網漁と手釣り漁で、1回あたりの平均漁撈時間は約7時間である。これら観察・記録された手釣り漁と刺網漁はいずれもH村で漁撈をおもな生業とする成人男性によっておこなわれたものである。このほかに手釣り漁は、村の周辺で子供たちや女性らによってもおこなわれることがあるが、その場合の漁撈時間はより短く、長くても2時間程度であった。

手釣り漁や刺網漁をのぞくと、他の漁法に費やされる漁撈時間はそれほど長くない。比較的長かったのは夜間におこなわれたナマコ突き漁で、平均漁撈時間は5.5時間であった。突き漁も夜間におこなわれることが多く、同行できた1例の漁撈時間は2.5時間であったが、同行中の観察ではさらに長い時間にわたって漁撈をおこなう漁船も多かった。したがって、サンプル数が増えれば平均漁撈時間はより長くなる可能性もある。このほかに、採集活動と潜水漁の平均漁撈時間は約3時間であった。

さいごに陸サマ世帯によっておこなわれた各漁法を、漁獲効率との関りから検討したい。ここでの漁獲効率とは、各漁撈における漁獲高を、その漁撈に費やされた総時間と操業人数で割ったもので、1人当たりが1時間に獲得した漁獲量（kg/時間・人）を表したものである。

陸サマ世帯による漁撈で漁獲効率ももっとも高かったのは手釣り漁で、その漁獲効率は1.2kg/時間・人であった。これに対し、陸サマ世帯による刺網漁の漁獲効率は1回しか記録することができなかったが、0.8kg/時間・人とやや低かった。おなじく突き漁の漁獲効率も0.8kg/時間・人であった。しかし、突き漁も観察できたのは1回のみであり、このときの漁獲は聞き取りによれば大漁というわけではなかった。したがってサンプル数が増えれば、刺網漁や突き漁の漁撈効率はもう少し高くなる可能性がある。

採集活動ではおもに貝類やウニを漁獲するが、これらには人間が食べることのできない殻の部分がある。そこで、採集の漁獲効率を純粋に1人が1時間に獲得できた肉量のみで計算すると、0.4kg/時間・人となる。おなじくナマコ突き漁での漁獲効率

も、加工された乾燥ナマコの重量で計算すると、0.4kg/人・時間であった。ただし、加工ナマコの重量は生ナマコの10~15%であるので、生ナマコの重量で計算すれば漁獲効率は2.6~4kg/時間・人と高くなる。

B：海サマ世帯

表13は、観察された海サマ世帯による58回の漁撈活動の内訳を、平均操業者数、平均漁撈時間、平均漁獲高、漁獲効率別に整理したものである。表が示すように、海サマ世帯でもっとも頻繁に観察された漁法は刺網漁で、合計53回を記録した。これら観察された刺網漁は、2004年11月6日~25日間に、H村のR氏宅で水揚げする海サマ漁師によっておこなわれたものである。この他に、2回のまき網漁（S村）と、3回の手釣り漁（S村）が観察・記録された。

表13 観察・記録された海サマ漁撈の内訳

出漁者	漁法	回数	操業者数 (人・平均)	漁撈時間 (時間・平均)	漁獲高 (kg/時間)	漁獲効率 (kg/時間・人)
海サマ	刺網	53	1.9	9.7	3.5	1.84
	手釣り	3	1.5	8.5	2	1.6
	まき網	2	4	7	3.2	0.82
合計		58	—	—	—	—

(出所：筆者による観察・聞き取り)

海サマ世帯による漁撈では平均すると2人での出漁が多く、まき網漁の場合は平均4人で出漁していた。H村で観察された海サマ世帯の漁撈の刺網漁は、世帯（家屋）をともしする兄弟か従兄弟、あるいは父子関係にある男性らの協同によっておこなわれていた。全体的に海サマ世帯による漁撈も少人数でおこなわれるが、陸サマ世帯にくらべると、1回の漁撈に参加する操業者数は多くなる傾向がある。また、1回あたりの平均漁撈時間は、刺網漁で約9.7時間、手釣り漁が8.5時間、まき網漁が7時間であった。したがって刺網漁、手釣り漁の1回あたりの平均漁撈時間が7時間であった陸サマ世帯の漁撈時間に比べ、海サマ世帯の漁撈時間は1.5~2.7時間ほど長くなる。

漁獲高との関わりでは、刺網漁の1時間当りの漁獲高は3.5kgともっとも高い。ただし、海サマによる刺網漁は平均2名以上でおこなわれる。このため、1人あたりに換算した漁獲効率は、1.84kg/時間・人となる。まき網漁での1時間当りの漁獲高も3.2kgと高いが、1人あたりに換算した漁獲効率は0.82kg/時間・人と低くなり、陸サマ世帯による刺網漁の漁獲効率とほぼ類似している。

一方、手釣り漁の1時間当りの漁獲高は2kgだったが、1人当たり換算した漁獲効率では1.6 kg/時間・人と高く、陸サマ世帯による手釣り漁よりも高い漁獲効率を示した。記録された海サマ世帯による3回の手釣り漁では、いずれもある程度の漁獲が確認されたが、釣り漁は好漁時と不漁時の差が激しい漁法でもある。このため、サンプル数が増えれば、海サマ世帯による手釣り漁の漁獲効率もより低くなる可能性がある。いずれにせよ、漁獲効率という視点からは、海サマ世帯による刺網漁や手釣り漁が、陸サマ世帯によるそれよりも高い数値を示すことが指摘できよう。

5.3 漁獲の販売と収入

ここでは陸サマおよび海サマ世帯による漁獲の水揚げ回数と水揚げ量、そして水揚げによって得られた現金収入額について整理する。つぎに聞き取りによって得られた、漁家世帯の月単位での推定収入額（自己申告）から、各村における漁家世帯の月収入について検討したい。

表14は、2004年11月6日～25日の19日間にH村のR氏宅で水揚げをおこなったすべての漁を対象とし、その出漁者、出漁日、漁獲種、水揚げ高などを整理したものである。この19日間にR氏宅での水揚げが確認された漁撈は合計で71回であり、このうち海サマ世帯による刺網漁の水揚げが53回、陸サマ世帯による手釣り漁の水揚げが18回であった。

水揚げ量は水族別にR氏宅で計測され、それぞれの漁獲高に応じてすべてR氏へと販売された。漁獲の販売は現金取引でおこなわれるが、R氏からの前借がある場合はその分が相殺される。ただし、観測された漁撈活動は出漁者が漁獲をR氏宅で水揚げ・販売した場合に限られており、自給や他の仲買人への販売など、それ以外の目的でおこなわれた漁撈活動の詳細は不明である。また、観測期間中にR氏宅で水揚げを1回しかおこなわなかった漁師の漁獲は、すべて「他」に含めて整理した。

一方、表15は聞き取り調査に基づいて推算された、各村における漁家世帯の1ヶ月間における平均収入額と、各世帯の収入上の分布をまとめたものである。推算と表したのは、漁業などによる月収額は変動が激しく一定していないため、明確な平均収入が導き出せないことによる。これらの収入額は、各漁家世帯の世帯主による自己申告、および各世帯がおもに扱っている魚介類の1ヶ月における推定漁獲量をもとに推算した。

この推定収入額は魚の総売り上げ額であり、漁撈活動の実施にかかる費用を除外した純益ではない。したがって、ここで推算された収入額は、実際に各漁家世帯が獲得

表 14 H 村 R 氏宅での水揚げ量の記録 (2004 年 11 月 6 日～25 日)

日付	2004 年 11 月																									合計 (kg)	平均 (kg)
	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25							
海サマ世帯	A	51	—	—	39	—	—	—	37	—	—	—	—	9	—	—	—	27	20	—	183	30.5					
	B	8	—	—	17	—	43	29	31	—	—	—	—	—	31	18	47	59	61	51	395	35.9					
	C	—	46	—	—	—	—	—	—	—	35	38	—	16	21	—	—	—	—	—	—	156	31.2				
	D	—	—	—	—	—	—	56	41	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	48	—	145	48.3			
	E	—	—	—	—	—	—	48	13	—	25	—	—	—	—	18	—	—	—	—	—	—	104	26			
	F	58	47	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	105	52.5			
	G	47	—	—	38	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	85	42.5			
	H	—	—	—	—	—	—	—	27	—	—	—	—	—	—	30	—	—	—	—	—	—	57	28.5			
	I	—	—	—	—	—	—	36	—	—	—	—	—	—	26	—	—	—	—	—	—	—	62	31			
	J	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	35	8	—	—	—	—	—	43	21.5			
	他*	14	23	—	—	—	—	—	—	—	19	28	—	36	13	—	—	—	—	—	—	29	162	23.1			
小計	127	167	0	55	39	43	169	112	37	79	66	0	52	69	114	26	47	86	129	80	1497	33.7					
陸サマ世帯	a	6	—	—	—	15	—	—	—	—	—	—	—	—	10	—	—	—	16	—	—	47	11.7				
	b	—	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	—	—	13	6.5				
	c	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13	10	—	15	—	38	12.6				
	他*	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13	13	26	13				
小計	6	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	13	34	13	28	124	10.9					
潮汐**	小	小	長	若	中	中	大	大	大	大	中	中	中	中	小	小	小	長	若	中							
月齡期	23	24	25	26	27	28	29	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12							

* 他 = 1 回のみ得水揚げが記録された漁師の合計

** 潮汐：小 = 小潮，長 = 長潮，若 = 若潮，中 = 中潮，大 = 大潮

(出所：筆者による聞き取り・観察)

表 15 漁家世帯の自己申告による 1 ヶ月の推定収入額 (総利益)

村名	S 村 (11)		H 村 (17)		海サマ村 (19)	
	網漁 (2)	海藻養殖 (9)	網漁 (6)	手釣り漁 (11)	網漁 (13)	手釣り漁 (6)
世帯						
～299	0	0	0	4	1	1
300～599	0	5	4	5	6	4
600～899	2	2	2	2	2	1
900～1199	0	1	0	0	3	0
1200～	0	0	0	0	1	0
平均値/RM	700	588	573	390	607	475
標準偏差	100	196	208	175	320	110

* () は対象とした漁家世帯数

(出所：筆者による聞き取り)

した現金額とは異なる。しかし、こうした推算でも大まかな傾向はつかむことができよう。以下では陸サマ世帯と海サマ世帯にわけて、その詳細について整理したい。

A：陸サマ世帯

観測期間中、R氏宅で2回以上の水揚げをおこなった陸サマ世帯は3世帯のみであった。陸サマ世帯による漁撈活動はすべて手釣り漁による水揚げである。表14が示すように、調査期間中に陸サマ世帯によっておこなわれた水揚げ回数は少なく、もっとも多かったa世帯でも19日間に4回のみであった。一方、b世帯およびc世帯の水揚げ回数は3回である。また陸サマ世帯による平均水揚げ量は、1回当たり10.9kgとなる。

陸サマの漁家世帯は漁獲をR氏宅で水揚げするほかに、漁獲量が多い場合には直接センボルナ市内にある魚市場へ運び、そこで販売してしまう世帯もある。とくに網漁をおもな漁法としている世帯にはその傾向が強く、筆者による調査期間中にかれらがR氏宅で水揚げすることはなかった。またH村にはR氏のほかにももう二世帯の仲買世帯があり、陸サマ世帯の中にはこれら他の仲買世帯との関係が深い世帯も存在する。したがって、R氏宅に水揚げする陸サマ世帯の数が少ないのは、陸サマ世帯の出漁数が全体的に少ないだけでなく、以上のような理由がある。

つぎに陸サマ世帯が漁撈によって得ることのできる収入について検討する。H村を含め、調査村で水揚げされた魚類は、魚種別に1kg当り2RM, 3RM, 5RMの相場価格で仲買世帯によって買い取られる。調査中に確認された101回の漁撈活動で漁獲された魚種のなかで、もっとも水揚げ量が多かったのはアイゴ科の魚種であり、ついでフエフキダイ科の魚種における水揚げ量が多かった(表16)。この2科のみで実に全水揚げ量の約80%を占めている。両魚種の相場価格は、サイズの大きい魚種であれば4.5RM(1kg)、小さい魚種であれば2.5RM(1kg)で買いとられた。この他に網漁では、アジ科、ボラ科、ブダイ科の漁獲が目立ち、釣り漁ではベラ科、ハタ科、イトヨリダイ科の漁獲が目立った。これらの魚科の相場価格も2~5RMで、とくにアジやボラの相場価格がやや高くなる傾向がある。

R氏宅での水揚げ時でも、各魚科の水揚げ量に応じて買い取り価格が決定された。その結果、陸サマ各世帯の19日間における総売り上げ高は、a世帯で137RM, b世帯が37.5RM, c世帯は102RMであった。陸サマ世帯における1回当たりの売り上げ高は、平均29RMとなる。

しかし、陸サマの漁家世帯による水揚げと販売は、R氏宅のみでおこなわれている

表 16 おもな水族の水揚げ量 (漁撈回数：99 回分)

順位	和名	学名	サマ語名	水揚げ量/kg	相場価格
1	アイゴ科	Siganidae	<i>bawis</i>	882	3-5 RM
2	フエフキダイ科	Lethrinidae	<i>ketambak</i>	552	3-5 RM
3	アジ科	Carangidae	<i>daing poteh</i>	96	5 RM
4	ブダイ科	Scaridae	<i>ogos</i>	83.5	3 RM
5	ベラ科	Labridae	<i>bukan</i>	83	3 RM
6	イトヨリダイ科	Nemipetridae	<i>kulisi</i>	60	2 RM
7	ダツ科	Belonidae	<i>selo</i>	40	2 RM
8	ハタ科	Serranidae	<i>kohapok</i>	35	3-5 RM
9	ボラ科	Mugilidae	<i>belanak</i>	22	5 RM
10	フエダイ科	Lutjanidae	<i>daing keyat</i>	17	3-5 RM
11	ヒメジ科	Mulidae	<i>timbangan</i>	16.3	2 RM
12	ワタリガニ科	Portunidae	<i>kagon</i>	16	5-6 RM
13	スズメダイ科	Pomacentridae	<i>tibuk</i>	7	2 RM
14	ナマコ網(乾燥)	Echinoidea	<i>bat</i>	4.6	80-40 RM
15	モンガラカワハギ科	Balistidae	<i>tombad</i>	2	3 RM
15	エイ	Rajiforms ほか	<i>Pahi, kihanpaw</i>	2	3-5 RM
17	イサキ科	Haemuridae	<i>leppe'</i>	1	3 RM
17	ハリセンボン科	Diodontidae	<i>buntal</i>	1	2 RM
17	イセエビ下目	Palinuridea	<i>Keyot batu</i>	1	60-90 RM
17	コウイカ・ツツイカ目	Sepiida, Teuthida	<i>Kanusus, kalabutan</i>	1	3-5 RM

(出所：筆者による観察)

わけではない。そこで聞き取りによって得られた、漁家世帯の自己申告による1ヶ月間の推定収入をみてみたい。表15によれば、S村の漁家世帯における平均月収入は網漁などに従事する世帯が700RMであったのに対し、海藻養殖に従事する世帯では588RMとなった。H村の漁家世帯では、網漁に従事する世帯では573RMだったのに対し、手釣り漁をおもな漁法とする世帯では390RMと低くなった。これらのデータは自己申告による推定収入であり、必ずしも正確なものではないが、それでも大まかな傾向を確かめることはできるであろう。

たとえば、H村のR氏宅での水揚げ量の記録から算出された29RMを、手釣り漁世帯における1回あたりの平均売り上げ高と仮定した場合、自己申告された平均月収入額390RMに達するには、単純に見積もっても最低で1ヵ月間に13.4日の出漁が必要となる。一方、筆者による聞き取りでは、H村における陸サマ漁家世帯の1ヶ月間における平均的な出漁日数を尋ねた際に聞かれた答えの多くは、「大潮期に出漁し、

その間はほぼ毎日出漁する」というものであった。

1ヶ月間には基本的に2回の大潮期があるので、単純に日数に換算するなら約14日間ということになる。おなじく表16からは、大潮期と小潮期がほぼ1週間で入れ替わることや、陸サマ世帯の漁撈が小潮期の終わり(11月22日)以降より頻度が増すことがわかる。ただし表14で、11月9日からはじまる大潮期に陸サマ世帯の漁撈がみられなかったのは、ちょうどこの期間がイスラームの断食明けの祭りとなるハリラヤ祭を控えていたからである(ハリラヤ祭は14日より開始)。

したがって、通常時であればこの期間により頻繁な陸サマ世帯の漁撈がみられることになる。そこで、聞き取りによって表現されたように1ヶ月のうちに14日間は出漁し、毎回平均で29RMの売り上げがあったと仮定すると、1ヶ月間の収入は406RMと算出される。これは、手釣り漁世帯の自己申告による平均月収額390RMにかなりちかい。ただし実際の漁撈は、このほかに天候や季節による制約をうけるほか、冠婚葬祭など人間社会のさまざまな事象によって制約され、必ずしも1ヶ月間に14日間ちかく出漁できるとは限らない。調査中にハリラヤ祭の影響で、陸サマ世帯の漁撈が1回もおこなわれなかった期間があったのはこのことをよく示している。

これに対し、H村で網漁をいとなむ漁家世帯の自己申告による推定月収額は、573RMと手釣り漁世帯にくらべて約180RM高い。おなじくS村で、網漁やダイナマイト漁をいとなむ2世帯が自己申告した月収額も700RMと高かった。S村では直接観察にもとづく売り上げ高のデータがないが、聞き取りによって得られたこれらのデータは、利用する漁法の種類が世帯における収入額に格差をうむ可能性があることを示唆している。またS村で海藻養殖をいとなむ世帯の自己申告による推定月収額は588RMであり、これはH村の手釣り漁世帯における推定月収額よりも約200RM高い。このことは、S村における漁家世帯の多くが手釣り漁などの漁具コストの低い漁撈から、短期間で海藻養殖へと移行した経済的要因として指摘できるかもしれない。

B: 海サマ世帯

観測期間中、R氏宅で2回以上の水揚げをおこなった海サマ世帯は10世帯を数えた。したがってR氏宅で水揚げをおこなった頻度は、海サマ世帯のほうが多いことになる。これらのデータに基づく、海サマ世帯による1回当たりの平均水揚げ量は33.7kgとなった。

ただし、海サマ世帯の漁撈活動によって漁獲された魚類のすべてがR氏宅に水揚げされ、販売されるとは限らない。H村の周辺に居住する海サマ世帯のなかには、R

氏に鮮魚を販売する一方で、みずから塩干魚を加工する世帯もあった。これらの世帯は塩干魚をフィリピン領となるシタンカイへ運び、現地の問屋などに販売する。オマダル島周辺に居住する海サマ世帯でも、塩干魚の加工をおこなう世帯が確認されたが、その販売先はセンボルナ市内の業者であった。

表 17 は 2004 年 11 月 6 日～25 日の 19 日間に、海サマ世帯の A～C 世帯が R 氏宅に水揚げして得た売り上げ高を整理したものである。このうち水揚げ回数が増え、もっとも多かった A 世帯は 19 日間に 11 回の水揚げを記録し、その総売り上げ高は 864 RM であった。B 世帯および C 世帯はいずれも 5 回の水揚げを記録し、総売り上げ高は 451～402 RM であった。海サマ世帯における水揚げ 1 回当たりの売り上げ高は、平均 83 RM となる。

表 17 海サマ世帯による R 氏宅での売上高 (2004 年 11 月 6 日～25 日)

世帯番号	漁撈者	水揚げ回数	総売上高	1 回の売上高 (平均)
A	海サマ	11 回	864 RM	78.5 RM
B	海サマ	5 回	451 RM	90.2 RM
C	海サマ	5 回	402 RM	80.5 RM

(出所：筆者による観察)

聞き取りによれば、海サマ世帯は風や波が強くなければ、潮汐や天候に関係なく出漁するとの回答が多く得られた。聞き取りによって得られた回答のみにしたがえば、海サマ世帯による 1 ヶ月間の出漁回数は陸サマ世帯にくらべより多くなる。ただし、海サマ世帯による漁撈も冠婚葬祭など人間社会におけるさまざまな事象によっても制約をうけている。また風や波が強くなる北東季節風の時期 (11～3 月) には、出漁の回数がその他の季節に比べて減るといふ。

R 氏宅での調査期も北東季節風が吹き始める 11 月中であり、その頻度は少なかったが風がやや強い日があった。また社会的制約としては、11 月 14 日からハリラヤ祭がはじまっている。ただし海サマ世帯のなかには、A 世帯のようにハリラヤ祭が開始された最初の週には出漁しなかった世帯と、B 世帯や C 世帯のようにハリラヤ祭の最初の週にも漁撈をおこなっている世帯がみられた。

その一方で A 世帯は、19 日間におこなった漁撈の漁獲をすべて R 氏宅で水揚げしたことが確認された。したがって、19 日間における A 世帯の出漁回数は 11 回ということとなり、その出漁頻度は 58% である。ただし、A 世帯はハリラヤ祭の最初の週に出漁を控えているので、通常であればその出漁頻度はさらに高くなる可能性がある。

いずれにせよ、出漁頻度を 58% と仮定すると 1 ヶ月間における出漁回数は 18 回と算出される。海サマ世帯による 1 回の平均売り上げ高は 83 RM であったので、出漁回数を 18 回と仮定すると、1 ヶ月間の総利益は 1,494 RM となる。実際には燃料費や氷代の負担があるので、純利益はさらに低くなるが、それでも 1,000 RM 前後の収入と見積もることができよう。

A 世帯の事例は、海サマ世帯のなかでも漁撈頻度の高いケースであると考えられるが、海サマの漁家世帯のなかには 1 ヶ月間に平均 1,000 RM 以上の収入を得ている世帯が存在することを示す事例ともとれる。このように H 村の海サマ世帯による推定収入のほうが、陸サマ世帯のそれに比べて高くなる要因として、1 回の漁撈における漁撈時間の長さや操業人数の多さがある。

実際、海サマの漁家世帯による刺網漁は 2 人でおこなわれている漁撈でもある。したがって、1 人当たりの漁獲効率としては手釣り漁とそれほど大差がなくても、実際の漁獲量はその倍になる。ただし、H 村の海サマ漁家世帯による網漁での操業者は、おなじ世帯に属する兄弟や従兄弟関係にあたる男性で構成されていたことから、その刺網漁も世帯単位での漁撈として認識した。

これに対し、S 村に隣接する海サマ世帯でおこなった聞き取りで、自己申告に基づき確認された推定月収額は、網漁をおもに利用する世帯で 607 RM であった（表 15）。さらにこのうちの 4 世帯が、1 ヶ月間に 900 RM 以上の収入があると自己申告している。一方、海サマ世帯でも手釣り漁をおもな漁法としている世帯の推定月収額は、475 RM と低くなった。したがって、海サマ世帯においても、漁法として網漁をおもに利用する世帯での月収入がより高くなる傾向が指摘できる。ただし表 15 の標準偏差からもわかるように、網漁をいとなむ海サマ世帯の推定月収額には世帯間のばらつきが大きく、高い月収額を申告した世帯がある一方で、手釣り漁世帯と同じくらい低い月収額を申告している世帯も少なくない。

5.4 漁獲の流通と消費

サマによる漁獲物の流通は、おもに 3 つのパターンに分類できる。これらは、(1) 自家消費による利用、(2) 村内での販売、(3) 村外への販売の 3 つである。

まず (1) 自家消費の場合、漁獲量が高ければ世帯以外に村落内の家族間で分配されることもあるが、世帯内で消費するのがもっとも一般的である。また、漁獲を浜辺で他の村民に無料分与するような事例は確認されなかった。他の村民一般を対象とする際には、(2) 販売されるのが一般的である。この場合、魚種に関わらず 1 kg 当り

2RMが相場であった。ただし、陸サマ世帯が漁獲を村内で売り歩くことはなく、陸サマ村内でみられた販売は、いずれも近隣の海サマ世帯によるものであった。こうした直売は女性や子供によって担われることが多い。

(3) 村落外への販売は、陸サマの仲買世帯によっておこなわれることがもっとも多いが、陸サマの漁家世帯が漁獲物を乗り合いバスや乗り合い船に載せて、自らセンボルナの市場へ運び販売する事例も確認された。調査地における仲買世帯は、その傘下にある海サマや陸サマの漁家世帯から、市場価格よりも安い値段で鮮魚を買取る。

こうして購入された鮮魚は氷をいれたプラスチック製のアイスボックスに保存され、おもに40~60馬力の船外機を装備したスピードボートでセンボルナ市街地にある魚市場へと運ばれ、市場を拠点とする魚商人に売却される。センボルナの魚商人は市場での販売権(ライセンス)をもっており、そのまま魚市場で販売する場合と、氷詰めにした鮮魚をトラックに載せて、さらにタワウヤやコタキナバルなどサバ州の都市部へ輸送する場合がある。ただし、センボルナを拠点とする魚商人の多くは中国系やタオスグ系世帯によって占められており、サマ世帯はそれほど多くない。

以上が鮮魚の一般的な流通過程であるが、活魚の場合は状況がやや異なる。調査村で活魚の仲買をおこなっていた世帯は、S村でのみ確認された。活魚の提供者(傘下漁民)はいずれも海サマ世帯であり、おもな魚種としてスジアラやメガネモチノウオ、トコブシが確認された。傘下漁民によって漁獲され、定額で購入されたこれらの水族は、仲買世帯の杭上家屋に隣接する生簀で畜養され、一定のサイズに達するとセンボルナを拠点とする中国系マレーシア人らの養殖業者に販売される。養殖業者によって購入された活魚は、さらにセンボルナ周辺の養殖場で畜養された上で、サバ州やマレー半島の都市部や香港などへ輸出される²¹⁾。

一方、外部へと輸出されなかった海産物は、地元で消費されていることになる。陸サマおよび海サマ世帯における魚類の摂取量については、すでに拙稿(小野2006)でも論じたが、その消費量は両世帯でともに高かった。S村およびS村に隣接する海サマ世帯、H村での世帯調査によれば、成人男性1人が1日に摂取する魚肉量はS村で185g(223kcal)、海サマ集落で198g(238kcal)、H村で192g(231kcal)であった(表18)。

一方、1世帯が魚類を獲得するために1ヶ月間に消費する魚の購入費は、S村の陸サマ世帯が53.7RMだったのに対し、海サマ世帯は0RM、H村の陸サマ世帯では12RMであった。海藻養殖をいとなむ世帯が多いS村では、もっぱら現金によって魚類を獲得していることになる。筆者による聞き取りと観察では、これらS村の陸サ

表 18 調査村における食事調査の結果

食品	S 村 (14)*		H 村 (11)		海サマ集落 (14)	
	kcal	RM	kcal	RM	kcal	RM
コメ	802	72.2	585	85.5	428	47.3
小麦	216	14.7	210	30	270	22.8
キャッサバ	104	9.5	351	36	488	58.1
バナナ	45	7.4	22	9	32	6.5
麺	21	8.5	82	14	28	12.5
魚類	223	53.7	231	12	238	0
肉類	85	38.1	29	28	29	14.5
砂糖	294	21.3	216	33	258	22.6
加糖飲料	15	12.5	6	8	14	13.2
備考	1 人 / 1 日	家族 / 月	1 人 / 1 日	家族 / 月	1 人 / 1 日	家族 / 月

* () はサンプル世帯数

(出所：筆者による食事調査)

マ世帯は隣接する海サマ世帯から魚類を購入することが多かった。

このほかに漁撈との関わりで興味深いのは、陸サマおよび海サマ世帯におけるキャッサバの摂取量の格差である。キャッサバは 18～19 世紀以降、コメと同様にサマの重要な主食の一つとして利用されてきた食物である。またデンプン質でもあるキャッサバは「コメに比べて腹持ちがよく、とくに体力の消耗が激しい漁撈活動の際にはキャッサバを好む」という語りが、筆者による聞き取りでも多く聞かれた(小野 2006; Ono 2006)。

表 18 が示すように、海サマ世帯のキャッサバ摂取量は高く、成人男性 1 人が 1 日に摂取するキャッサバ量は 139 g (488 kcal) で、コメ摂取量の 125 g (428 kcal) をやや超えている。ついで漁家世帯の多い H 村の陸サマ世帯が高く、そのキャッサバ摂取量は 1 日あたり 100 g (351 kcal) である。これに対し、海藻養殖をいとなむ漁家世帯が多い S 村でのキャッサバ摂取量は、1 日あたり 29 g (104 kcal) ともっとも低かった。調査時におけるコメ 1 kg の相場価格は 2 RM、キャッサバは 2～3 RM であったため、この相違は経済的な理由ではなく、むしろ漁撈頻度との関わりを示していると考えられる。

おなじようにキャッサバと漁撈は、「この二つこそがサマが現在も維持するサマの伝統である」とする語りが、聞き取りのなかでも頻繁に確認された。とくに陸サマによる語りからは、漁撈をおもな生業とし、キャッサバ消費量が高い海サマ世帯はより伝統的な生活を継続しているというイメージを陸サマ世帯がもっている可能性を示唆

している。筆者による聞き取りでも、「海サマは現在もサマの伝統的な生活をいとなむ人」と表現する陸サマ村民が多く確認された。

5.5 漁撈を介した社会関係

調査村での漁撈を介した社会関係としてもっとも注目されるのは、仲買人とその傘下漁民の間に生まれる社会関係であろう。調査村で確認された仲買世帯はいずれも陸サマによって占められており、これらの仲買世帯は必要となる資本を独力で用意し、独立経営をおこなっていた。たとえば筆者が滞在させてもらったR氏は、タワウで8年間ちかく賃金労働に従事し、それによって蓄えた資金を元手に村にもどり仲買業を開始している。

それほど大きな資本がなくても開業でき、やり方によっては高い現金収入をみこめる仲買業は、多くの村民が高い興味を示す生業でもある。ただし仲買業は失敗するリスクも高い。聞き取りによれば、H村にもかつては仲買業をいとなむ世帯が7世帯以上いたが、競合の末にのこったのはR氏をふくめて2世帯のみであったことが確認された。S村では3世帯の仲買世帯が確認され、この3世帯が競合している状態だった。

一方、その傘下漁民に相当するのは陸サマ、海サマの漁家世帯である。とくにマレーシア国籍をもっておらず、不法滞在者とされる海サマ世帯の占める割合が高い。これに対し、陸サマの仲買世帯は、これら海サマ世帯が村の周辺で生活できるよう保護する役割を提供している。不法滞在者としてあつかわれる海サマ世帯の保護者ともなるこれらの仲買世帯は、一般的にサマ語で *jalmin* と呼ばれ、その庇護のもとにある人々は *jalminan* と呼ばれる。

たとえば海サマが村の周辺に居住するには、村の指導者層となる *Kutua Kampung* (村長、以下KK) や、*Jawatankuasa Kemajuan dan Keselamatan Kampung* (村落安全・発展機構長、以下JKK) の承諾が必要となるが、その交渉を仲買人が担当することが多い。S村で仲買業をいとなむ2世帯のうち、1世帯は世帯主自らがJKK職につき、もう1世帯は兄弟がJKK職を務めており、その職権を利用して海サマ世帯による傘下漁民を集めてきた経緯があった²²⁾。仲買世帯にとっては、*jalminan* と呼ばれる傘下漁民をできるだけ多く集めることが、結果的に収入の増加につながる。したがって仲買世帯は、*jalminan* となる海サマの漁家世帯をいかに自分の傘下とできるかで、競合をくりかえしている。

一方、陸サマの漁家世帯はこうした居住許可を申請する必要がないため、仲買世帯

から庇護をうけるも必要ない。しかし、陸サマ漁家世帯のなかにも、仲買世帯から金や食料を前借りする世帯は確認された。おなじく海サマ漁家世帯の多くも仲買世帯から前借している。S村およびH村の仲買世帯はいずれも食料などを販売する出店を村内で経営しており、とくに海サマ漁家世帯は仲買世帯の経営する店で食料や燃料などを購入、あるいは前借する。前借した場合、その代金は漁獲の水揚げ時の売り上げ高から相殺されることになる。

R氏宅で頻繁に水揚げをおこなう漁家世帯の多くも、R氏から現金あるいは食料などを前借していた。R氏からの聞き取りでは、海サマ世帯のなかには最高で1,000RMちかい金額を前借している世帯が存在する。このような前貸しにもとづく契約関係や、海サマ世帯に対する社会的な保護を提供することで、仲買世帯は傘下漁民による漁獲を低価格で購入し、これらを市場にてより高い値段で販売することで利潤を稼いでいる。

したがって、R氏をはじめとする陸サマ仲買世帯は、傘下漁民を有する taukeh（中国語の頭家に由来するマレー語で資本提供者の意）とも認識できる。そしてこれら陸サマの仲買世帯とかれらに漁獲を販売する漁家世帯の間には、資本の提供者と労働という「パトロン－クライアント」関係が形成されているようにもみえる。ただし、調査村の仲買世帯がおもに提供していたのは現金、食料、燃料、氷のみであり、魚網などの漁具は提供・販売していなかった。また、傘下漁民となる漁家世帯は、必ずしも契約関係にある陸サマの仲買世帯に漁獲を提供しているわけではなく、陸サマ漁家世帯のようにセンボルナ市で水揚げすることもあれば、海サマ漁家世帯のように塩干魚に加工して販売することもある。したがって、漁獲をどこに、あるいは誰に販売するかを選択権をもつのは漁民側にあり、仲買人側にはない。

おなじく資金を提供している仲買世帯であるR氏が、筆者の滞在中に傘下漁民に借金の返済を強要することはみられなかった。これは強要した場合、傘下漁民である海サマ世帯が他の仲買世帯に移行するか、他村へ移動してしまう危惧があることによる。H村での調査時にも、R氏に借金をしていた海サマ世帯が、R氏への返済を済ませずに他の仲買世帯の傘下漁民となり、R氏と口論する事件があった。結局、調査期間中にこの海サマ世帯がR氏のもとで漁獲を水揚げすることも、借金を返済することもなかったが、R氏がさらに返済を請求することはなかった。その背景には、借金の返済を過度に強要することで、他の傘下漁民のR氏に対する評判を低下させたくないという配慮が、R氏への聞き取りから確認された。

これらの諸状況を考慮するなら、陸サマの仲買世帯と漁家世帯の間に形成されてい

る社会関係は、かなり緩やかで曖昧な「パトロン—クライアント」関係であり、完全なる雇用関係とみなすことはできない。しかし一方で、ここには資本の提供者と被提供者や、保護者と被保護者という上下関係が、とくに陸サマの仲買世帯と海サマの漁家世帯との間に成立していることも確かである。

6 現代サマの漁撈にみられる「伝統」と「近代化」

6.1 サマ漁撈と「伝統」

サマの伝統的な漁撈の最大の特徴は、そのほとんどがサンゴ礁海域内でおこなわれることにあった。筆者が観察した現代サマによるすべての漁撈活動は、村の周辺に形成されるサンゴ礁海域でおこなわれており、基本的に伝統漁撈の枠組みを踏襲していると考えられる。

たとえば、漁場がサンゴ礁海域に集中するため、おもに漁獲される水族もサンゴ礁をおもな生息域とする多様な種におよぶ一方、サバ科やアジ科魚類などの外洋種の水揚げ量はさきわめて少なかった。またおもに利用されている漁船もテンベルやボッグといった小型の木造船やくり舟が圧倒的に多く、クンピットなどの中型や大型漁船を所有する漁家世帯は限られていた。

一方、エンジンの普及は近代化による影響の一つであるが、漁家世帯で所有されているエンジンの多くは、パンボートや39馬力以下の小型船外機で占められていた。このため、エンジンの普及が漁撈の大規模化を促進しているわけではなく、1回の漁撈における操業人数も平均して1~2名と、小規模漁業としての性格が依然として強い。これらは、現代サマの漁撈にみられる伝統性の諸相として認められよう。

こうした現代サマの漁撈活動にみられる諸特徴は、沖縄諸島（市川 1977; 寺嶋 1977; Kuchikura 1977）やアフリカのマダガスカル島（飯田 2001a, 2001b）、オセアニアや東南アジア島嶼部のサンゴ礁海域（e.g. Akimichi 1978; 秋道 1995; Masse 1990; 西村 1975; Spoehr 1980; 須田 2006; 田和 1997）でみられる漁撈活動との共通性が非常に高い。おなじく類似した傾向は、センボルナ半島に形成された約3,000年前にさかのぼる新石器時代遺跡においても確認されている。この遺跡からは28科の多種におよぶ海産魚類の骨が大量に出土したが、そのうちの実に26科は沿岸のサンゴ礁海域をおもな生息場とする魚類で、サバ科などの回遊魚が占める割合は全体の1%にも及ばなかった（Ono 2003, 2004; 小野 2001, 2004）。

これらの事例はサンゴ礁海域での漁撈活動が、その形態や対象魚種という面におい

てかなり普遍性の高いものであることを示唆している。近代化の波を受けたはずの現代サマの漁撈形態や対象魚種に、伝統漁撈とくらべてそれほど変化がみられないことは、サマの漁撈が現在も浅くて広いサンゴ礁海域という漁場環境によって強く特徴づけられていることを指摘できる。

6.2 サマ漁撈と「近代化」の諸相

一方、近代化の影響をもっとも強く受けた諸相の一つとして、陸サマ世帯における漁撈活動の減少傾向をあげられる。調査村はいずれも過去において漁撈で有名だった陸サマ村を対象としたが、世帯調査の結果、漁家世帯の占める割合はS村で57%、H村でも54%と全世帯の半数でしかなかった。さらにこれらの陸サマ村では20~40代の青年・壮年層の人口が全体的に少なく、漁撈人口の高齢化がみられた。これらの状況は都市部やエステート農園での雇用機会の増加によって、もっとも働き盛りである青年・壮年世代が村外へと移住したことを背景としている。

陸サマ村における若手世代の村外への流出と、漁撈人口の低下をもたらした要因の一つとして、村外での賃金・給与労働が現金収入の面でより安定的であり、無一文でもおこなえるのに対し、漁撈による現金収入はより不安定であるうえ、漁船や漁具に投資しなければならないといった漁撈の経済的なマイナス面を指摘できる。筆者による調査でも、陸サマ漁家世帯でもっとも所有率の高かった漁具は、漁具コストの低い釣り具であり、その所有率は各村で90%以上であった。これに対し、サマの伝統漁撈でもっとも頻繁に利用されてきた漁網の所有率は、S村で27%、H村でも38%と低かった。

こうした漁具の所有状況にみられる傾向は、実際に観察された漁撈活動においても確認された。陸サマ村で筆者が観察した43回の漁撈活動のうち、網を利用した漁撈は9回のみであった。またH村のR氏宅で19日間に観察された陸サマ世帯の漁撈は、すべて手釣り漁でおこなわれており、全体として陸サマの漁家世帯では釣り漁の比重が高い。その要因として、(1) 漁具が安く、(2) 単独でも漁撈が可能であること、このため(3) 漁船が小型や無動力でも問題なく、さらに(4) 漁獲効率が高いことを指摘できる。観察された19回の手釣り漁にもとづく漁撈データからえられた漁獲効率は1.2kg/時間・人であり、刺網漁の1.6kg/時間・人について漁獲効率が高かった。

おなじく漁具コストの低い釣り漁は、漁家世帯以外の世帯によっても頻繁に村の周辺でおこなわれていることが確認された。これらの釣り漁は、純粋に自家消費のみを目的とし、不定期におこなわれる生業としての性格が強い。手釣り漁について陸サマ

村で頻繁に利用されていた漁法は、ヤスを利用した突き漁と女性や子供らによる貝やウニの採集活動である。ヤスの所有率は、村単位でもS村で68%、H村で54%と高い。このうち、商品価値の高いナマコを対象とした突き漁をのぞけば、いずれも自家消費を目的として不定期におこなわれる漁撈といえる。

これらの状況を総括するなら、陸サマ村では漁撈活動が主要な生業から、必要なときに不定期に短時間でおこなわれる副業へと移行しつつあると考えられる。こうした漁撈の副業化は漁家世帯においても認められる。S村では1999年より海藻養殖業への移行する漁家世帯が増えており、漁獲を目的とした漁撈そのものをおもな生業とする世帯は2世帯のみであった。

一方、H村では海藻養殖に適した海洋環境が周囲にないこともあり、漁家世帯は漁獲を目的とした漁撈を継続している。しかし、漁撈のさいにおもに利用されている漁法は、一般世帯も頻繁に利用している手釣り漁であり、サマの伝統漁撈でおもな漁法であった網漁をおこなう世帯は少ない。また1人での出漁が多いため、1回の漁撈で20kg以上の漁獲が記録されることはなく、その売り上げ高は限られている。聞き取りによる世帯調査でも、これら手釣り漁に従事する漁家世帯での推定月收入が、他世帯と比べ低い結果となった。おなじく聞き取りでは、手釣り漁をおこなう漁師の多くが、かつては賃金労働など別の生業に従事していた経験をもち、機会があればより収入の安定した生業への転向を希望していることが確認された。

これらの状況から想起される陸サマ村の漁家世帯像は、消極的な理由から漁撈活動に従事している「不完全な漁家世帯」である。すなわち、これらの陸サマ漁家世帯は、より収入の高い経済活動に従事する機会があれば、そちらへ容易に移行する潜在性が高い。実際、H村では全世帯の31.4%にあたる11世帯が、漁撈のほかに現金収入を目的とした他の経済活動をいとんでいた。これらの世帯は漁撈から他の生業へと転向する移行期にあるとも考えられる。またH村で全世帯の8%を占める賃金・給与労働世帯(3世帯)や、5.7%を占める仲買世帯(2世帯)は、村内において漁撈からより現金収入の安定した他の生業へと移行した世帯という見方もできる。同時にこうした状況は、陸サマが漁撈を生業としてあまり高く評価していない文化的側面を示唆している。

たとえば飯田が明らかにしたように、マダガスカル島の専門的な漁民として知られるヴェズが、漁撈活動を自らの漁民としてのアイデンティティを確認する行為として捉えているのに対し(飯田2001b:123)、筆者による聞き取りでは、陸サマが、漁撈活動を自らのアイデンティティを確認する行為としてとらえる傾向は極めて薄い印象

をうけた。こうした陸サマの漁撈活動に対する認識の低さは、陸サマがスルー王国時代より漁撈活動のみではなく、密貿易や海賊行為といった商業活動、そしてココヤシやキャッサバの栽培活動など多様な生業に従事してきた生活史を背景にしている可能性がある。

こうした文化的要因のほかにも、陸サマ世帯における漁撈活動の副業化を促進させた環境的要因として、近年における海産資源量の減少があげられる。すでに指摘したように、センボルナにおける水揚げ量は1995年をピークに減少傾向にある。こうした海産資源の減少は、一定の労働投資量で得られていた漁獲量の減少につながる。したがって、以前と同じ漁獲量を獲得するには、より多くの労働量と漁撈時間を投資しなければならない。これに対し1990年代の半ば頃までは、陸サマ村の漁家世帯のなかにも、短時間で大量の漁獲をみこめるダイナマイト漁へ依存する世帯が多かったことが、筆者による聞き取りで確認された。

1990年にスルー諸島のバシラン島で調査をおこなった鳥飼は、ダイナマイト漁が違法行為で、生態系を破壊する恐れがありながらも、地元の貧困層に対する雇用機会を提供する不可欠な漁法となっていたことを指摘しているが（鳥飼1993:72-73）、センボルナにおいても類似した状況が存在した可能性が高い。これは、センボルナにおけるサマのダイナマイト漁について言及した長津による論稿とも一致する（長津1999）。

しかし、1990年代後半におけるセンボルナの治安悪化と、それともなう警察・軍による海上警備、不法移民・違法漁業への取り締まりの強化は、ダイナマイト漁を積極的に利用してきた陸サマの漁家世帯にとっても大きなダメージとなった。さらに2002年以降に発せられたパンボートに対する利用制限は、陸サマ世帯の漁撈ばなれに拍車をかけたといえる。

こうした陸サマ世帯に対し、現在でも積極的に漁撈をおこなっていたのが海サマ世帯である。その要因の一つに、海サマ世帯の漁撈に対する「思い入れ」の高さが指摘できる。聞き取りでも、「漁撈活動こそがサマの生活の一部である」とする海サマ漁民による語りが多く確認された。また海サマ世帯では、サマの伝統的な主食として語られるキャッサバの摂取量が高く、食生活においてもサマの伝統を強く残している。しかし、その背後にはこれら離島域で漁撈活動をおこなう海サマの多くが、不法移民としてあつかわれている社会的状況がある。これら不法移民に過ぎない海サマには、陸サマのように土地を所有する権利はなく、都市部での賃金・給与労働などに従事できる機会も少ない。

その結果、陸サマによる漁撈活動が副業化する一方で、「よそ者」としても認識されることの多い海サマの専門化を容易にしているとも解釈できる。このように新たに移住し、陸地に利用可能な土地を所有していない世帯が、海産資源の利用に大きく依存する事例は、インドネシアのセラム島においても口蔵らによって確認されている（口蔵ほか 1997）。しかし、セラム島の場合と異なる点は、表 15 にも明らかのように、移住集団であるはずの海サマの漁家世帯における推定月収入の平均額は、定住集団であるはずの陸サマの漁家世帯よりも、全体的にやや高くなる傾向がある。その要因として、(1) 海サマ世帯の漁撈時間の長さ、(2) 網漁の積極的な利用と操業人数の多さ、それに (3) 国籍を所有していない海サマ世帯による積極的な海産物の越境販売があげられる。

このうち (1) については、筆者の観察によれば海サマ世帯の刺網漁 1 回における漁撈時間は平均で 9.7 時間であった。これは、陸サマ世帯による手釣り漁 1 回の平均漁撈時間となる 7.2 時間よりも 2 時間以上長い。一方、(2) 海サマ世帯によっておこなわれる刺網漁の漁獲効率は 1.6 kg/時間・人であり、観察されたすべての漁法のなかでもっとも高い。また海サマ世帯による網漁は、平均して 2 人でおこなわれるので、1 時間あたりの平均漁獲量は 3.2 kg となる。単独で手釣り漁をおこなう陸サマの漁家世帯で、1 回の漁獲量が 10 kg を超えることがほとんどないのに対し、海サマの漁家世帯による刺網漁の 1 回あたりの漁獲量が平均 30 kg を超える理由もここにある。

海サマ世帯の漁家経済にみられるもう一つの要素は、(3) 海産物の越境販売という選択肢である。聞き取り調査では、海サマ世帯の多くが、フィリピン領域およびマレーシア領域での海産物の種類別の価格変動を絶えず把握し、その売り値に応じてどの海産物をどちらで売るかを絶えず選択していることが確認された。その商品としては、イワシまき網漁で漁獲されたイワシやキビナゴや、採集された天然のアガルアガル、それに塩干魚があげられる。これら海サマ世帯による海産物の越境販売については聞き取りでしか確認できなかった。今後の研究では、海サマ世帯によるこうした越境販売が実際の漁家経済にどの程度の影響をもっているのかについて、より定性的なデータにもとづく研究が必要であろう。

一方で、活魚や鮮魚として販売した場合に高い商品価値をもつ海産物は、jalmin として懇意にしている陸サマの仲買世帯に低価格で販売される。S 村では、活魚としての商品価値が高いハタ、メガネモチノウオ、トコブシが、多くの海サマ世帯を傘下漁民としている仲買世帯へと低価格で販売されていた。すでに検討してきたように、これは資本提供者および保護者としての陸サマ仲買世帯と、その下で漁撈をいとなむ海

サマの傘下漁民という「パトロン—クライアント関係」の形成ともとらえられる。

東南アジアの漁村社会で一般的に見られる「パトロン—クライアント関係」は、岩切が指摘したように「海産物の独占買占めを目的とした、漁具資材や資金、生活消費財の前貸しによる投機と高利貸しの機構」（岩切 1979: 22）という特徴をもっている。本稿でも陸サマの仲買世帯が、海産物の独占買占めを目的とし、資金や生活消費の前貸しによる投機をおこなっていたことを確認した。さらにこれら陸サマの仲買世帯は、マレーシア国籍をもたない海サマ世帯の保護者としての一面ももちあわせている。

しかしその一方で、傘下漁民である海サマや陸サマの漁家世帯は、より自由に漁獲の販売先を選択しており、かならずしもすべての漁獲を仲買世帯に販売しているわけではなかった。また R 氏に借金がありながら、他の仲買世帯のもとへ漁獲を水揚げする海サマ世帯の事例のように、勝手に契約関係をやぶり、村内外における他の仲買世帯の傘下漁民となることもある。

おなじく仲買世帯による前貸しについても、調査で確認されたのは現金や食料品の前貸しのみであり、漁具や漁船といった高額資本の前貸しはみられなかった。また前貸しされる金額は最高でも 1,000 RM 前後であり、これは海サマ世帯にとっても支払いが難しい金額でもない。したがって、陸サマの仲買世帯と海サマの漁家世帯の間に形成される契約関係は、中国系の資本家と漁民の間により多額な資本を介して形成されるような「パトロン—クライアント関係」と比べより緩やかで、経済的な契約関係という側面は弱い。むしろ両者の間には経済的な契約関係だけでなく、サマという言葉や文化的な共通性に基づいた人間関係が存在している可能性がある。

こうした両者をむすぶ人間関係の要素は、一般の陸サマ世帯と海サマ世帯との間にも認められる。傘下漁民から低価格で魚類を購入できる仲買世帯をのぞけば、他の陸サマ世帯にとって、村の近隣に海サマ世帯が移住してくることに大きなメリットがあるようにはみえない。むしろ専門的な漁民でもある海サマ世帯による近隣での漁撈活動は、陸サマの漁家世帯と競合し、脅威とすらなる危険性がある。しかし、筆者による調査ではこれら海サマと陸サマの漁家世帯間に、漁撈をめぐるコンフリクトはみられなかった。各世帯での聞き取りでは、海サマ世帯による漁撈に対してあまり良い印象をもっていない陸サマ世帯がわずかに確認されたものの、多くの陸サマ世帯が海サマ世帯による移住や漁撈を許容しており、強い感心や抵抗が表現されることはなかった。

その背景の一つとして、サマというエスニックグループとしての共通性や親近性が指摘できる。陸サマと海サマの分化はスルー王国時代にまでさかのぼることができ

るが、その過程と分化のパターンはさまざまであり、陸サマ世帯のなかには海サマ世帯と近親関係にある世帯もみられた。調査村では、婚姻をとおして陸サマ世帯と海サマ世帯が新たに近親関係を築く事例も確認された。ここにみられる両者の関係は、階級差や経済的な契約関係よりも、むしろ「人間関係」に重点があるようにみえる。

さらに「クライアント」であるはずの海サマ世帯が、「パトロン」となる陸サマの仲買世帯を取捨選択する事例には、前田が東南アジアの組織原理の一つとして指摘するような「より魅力ある人ないしは物質、報酬がある方に人が集まるのは当然であるとする圏の発想」(前田 1989: 154) の存在を指摘することもできよう²³⁾。

またもう一つの見方として、陸サマ世帯に日々の食物となる魚を提供する海サマ世帯(小野 2006) という見方もできる。たとえば、陸サマ村では漁家世帯数が減少しているにもかかわらず、筆者による食事調査では、陸サマ世帯における魚肉摂取量が高く、海サマ世帯とほぼ平衡していることが確認された。これは陸サマ世帯が積極的に現金で魚類を購入しているためだが、ここには陸サマ世帯の魚類に対する強い嗜好性があらわれている。

一方、海サマ世帯はすでに記したように、jalmin である仲買世帯のみでなく、その他の陸サマ世帯をも対象として漁獲を販売することがある。おなじくセンポルナ市の魚市場で販売される魚類には、海サマ世帯によって漁獲されたサンゴ礁付きの沿岸魚種がかなりふくまれている。ここにも間接的ではあるが、漁撈と漁獲を介した海サマ世帯と陸サマ世帯の関係を認めることができるであろう。

7 むすびにかえて

本稿では、歴史的に「漁民」や「海洋民」として語られることの多かったサマの漁撈にみられる「近代化」と「伝統」の諸相についてを、「陸サマ」と「海サマ」という居住経歴の異なる二つの集団を軸に、(1) 漁民の占める割合や漁船・漁具の所有状況、(2) 漁法・漁撈活動の実態と相違性、(3) 漁撈活動を媒介とした社会関係という三つの視点から検討してきた。

18世紀にさかのぼるスルー王国時代より、調査地におけるサマ社会は、定住性が強く、陸上での栽培活動や海上交易など、さまざまな生業に従事してきた上位の陸サマ系集団と、家船居住による移動を繰り返しながら、もっぱら漁撈に従事してきた下位の海サマ系集団という二つの集団によって構成されてきた。こうしたサマ社会にみられる階層的な構造は、現代のセンポルナ郡においても形態をかえて認めることが

できた。すなわち、マレーシア国民としての陸サマ集団と、マレーシアの国籍をもたない不法滞在者としての海サマ集団の共存である。

現在のセンボルナ郡におけるサマ社会の新たな二分化は、1960年代以降における国家の成立と、それにもなつてセンボルナ郡に到来した近代化の波による影響をうけた結果でもある。本稿では、サマにとってもっとも重要な生業であった漁撈も、この近代化の波をうけて変容しつつある姿を明らかにした。一言で言えば、それは陸サマ世帯における漁撈人口の減少と漁撈の副業化であり、一方で移民としての海サマ世帯の増加と漁撈の専門化と表現することができる。実際の漁撈活動にそくして言えば、比較的マイナーな漁法であった手釣り漁の、陸サマ漁家世帯における普及と、海サマ世帯による伝統的な網漁の継続ともいえる。

一方で現代サマの漁撈には、伝統的なサマ漁撈と共通する変わらない側面も認められた。エンジンやナイロン製網の普及にもかかわらず、その漁場が沿岸のサンゴ礁海域に限定されていたことは、その最たる特色であろう。同時にこの漁撈空間の一致が、現代サマの漁撈における操業人数の少なさ、小型漁船の利用、そして漁獲される水族の共通性といった、伝統漁撈においても確認された諸側面を残す背景となっている。

ただし漁法においては、1960年代以降におけるダイナマイト漁のように、新たな漁法の導入や普及があった。とくに1970年代から近年にいたるまで、サマの漁家世帯によって盛んにおこなわれたダイナマイト漁は、漁場環境の悪化、漁撈の危険性や漁獲効率の増長という点で、サマの漁撈に大きな影響をあたえた。しかしそのダイナマイト漁も、近年におけるセンボルナ郡の治安悪化や、海上パトロールの激増による規制の強化を背景に減少しつつある。

その一方で、S村などでみられたように、政府主導による海藻養殖業の導入など、新たな漁撈形態が普及しつつある。ただし、養殖に適した海底環境を必要とする海藻養殖はすべてのサマ世帯が容易に従事できる漁撈形態ではなく、その普及と定着は未知数である。また香港などを中心とする海外市場での価格沸騰を背景に、特定の水族を対象とする漁法が一時的に多用されるケースも少なくない。1990年代以降ではシャコを対象とした罟漁や、ガザミを対象としたカニ刺網漁などが急速に普及したが、急激な乱獲による対象資源の減少により、調査時にはすでに稀にしかおこなわれない漁法となっていた。おそらく今後のサマ漁撈においても、こうした新たな漁法の一時的な流行と衰退は繰り返されるであろう。また規制が緩まれば、ふたたびダイナマイト漁が隆盛する可能性も十分にある。

こうした新たな漁法が隆盛と衰退を繰り返す一方で、1960年代以前からサマの漁撈として脈絡と受け継がれてきた刺網漁や突き漁、手釣り漁の存在があった。1960年代以後に導入された新しい漁法の寿命が短いのに対し、これら伝統的な漁法は一時的に隆盛するようなことはないが、サマによって継続的に利用されてきた点では、より安定した漁法でもありとも考えられる。しかし、おなじく伝統的なサマ漁撈の一つであった大規模な集団網漁は、本調査では確認できなかった。サマの伝統漁撈が小規模漁撈を基本としていることは指摘したとおりであるが、陸サマの漁家世帯で単独でおこなう手釣り漁が頻繁におこなわれる風潮にもみられるように、現代サマの漁撈はさらに副業化、小規模化へとむかう傾向すら感じられる。

ただし、その一方で中・大型の動力船による中・大規模漁業をいとなむ漁業者数とその漁獲量は、1970年代よりセンボルナ郡でも増加しつづけてきた。調査村では確認されなかったが、センボルナ郡に居住するサマのなかには、この中・大規模漁業へと移行した漁民も少なくない。サマによる伝統的な大規模漁撈が消滅した背景にも、センボルナ市を中心として発展してきた近代的な中・大規模漁業の存在が考えられる。本稿はこうした中・大規模漁業を対象とはしてこなかったが、今後の研究においては、中・大規模漁業に従事するサマ漁民の漁撈活動、生業戦略、そして世帯経済についても検討していく必要がある。

またマレーシア国民となった陸サマ世帯と、移動をつづける政治難民としての海サマ世帯の間にみられた、漁撈をめぐる「パトロン－クライアント」関係とも捉えられる緩やかな階層化の形成は、一見19世紀以前におけるスルー王国時代の「伝統的」な社会秩序の再創出ともみえる。こうした新たな階層化の出現は、本稿の前半部でも論じたように Sather によって、1970年代に定住化しつつあった海サマ村でも確認された事象であった (Sather 1997: 89)。

しかし、1960年代からの「近代化」以降に生まれた陸サマと海サマの新たな階層化に基づく社会関係は、タオスグ人のスルタンや貴族層を頂点としたスルー王国時代の階層的な社会関係とは本質的に異なっている。むしろ1960年代以降に出現した新たな社会関係は、マレーシアという国家の存在と国家によって提供されるさまざまなサービスや利権を享受できる陸サマと、国籍がないためにそうしたサービスを受ける権利や就業機会が制限されている海サマによって、サマという共通の言語やエスニック、文化的基盤を背景に、個人や世帯レベルで形成された人間関係といえる。

さらに言及すれば、この新たな社会関係の存在が、国籍のない海サマ世帯がマレーシア国内での生活や経済活動をおこなう第一ステップとなり、さらに陸サマとの婚姻

や漁撈以外の就業機会という第二ステップを経て、最終的にはマレーシア国籍の取得や、マレーシア国内での定住化へ向かうという大きな流れがあるようにも映る。ここに、「近代化」による海サマの陸サマ化（あるいは定住化）という新たな社会変容をみることもできよう。Sather がすでに 1960 年から 1970 年代の初頭に確認した海サマ村での事象（Sather 1984, 1997）は、その典型的な事例とも考えられる。

ただし、海サマによる陸サマ化という事象を具体的かつ動的に検討するには、今後さらなる調査と考察が必要であり、本稿で取り上げたデータから論じることができない。今後の研究では、本稿によって確認できた陸サマと海サマによる漁撈活動の相違性や、漁撈を介して形成されつつある階層的な社会関係を出発点として、海サマによる陸サマ化という現象や、中・大規模漁業をふくめたサマの漁撈活動を、彼らが置かれている刻々と変化する政治経済的状况を視野に入れながら、動的にとらえていく必要がある。

謝 辞

現地調査にあたり、平成 15 年度文部省科学研究費補助金・特別研究員奨励費の一部を利用した。サバ州での調査手続きに際しては、サバ博物館館長ジョセフ・グンタビッド氏、考古学部門のピーター・ターン氏、および中央大学の宮本勝氏に便宜をはかっていただき、本稿を作成するにあたっては、総合地球環境学研究所の秋道智彌氏、北海学園大学の須田一弘氏、東洋大学の長津一史氏にご教示いただいた。また本稿の草稿については、和洋女子大学の青山和佳氏、名古屋市立大学の赤嶺淳氏、および国立民族学博物館の岸上伸啓氏、池谷和信氏、飯田卓氏から有益なコメントやアドバイスを頂戴し、査読者の方々からも建設的な批判やコメントをいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) それ以前に発表された人類学的な漁撈研究には、Hornell による総合的な漁撈研究（Hornell 1950）、南方海域を対象とした Anell による漁法研究（Anell 1955）、マレー半島周辺の漁民や漁撈を対象とした Firth による論稿（Firth 1946）などがある。これらの研究は本人による臨地調査よりも、多様な民族誌を対象としたデータの収集と分析に基づく点に特徴がある。
- 2) おもな研究群には、オセアニアから東南アジア島嶼部をみつかった秋道（1995）による研究、フィリピンのスルー諸島における海サマ人の漁撈活動を記述した門田（1986）によるモノグラフ、長津（1995, 1997）、Sather（1984, 1997）、スルー諸島の漁村群を対象とした Spoehr（1980）、パラワン島南部を対象とした辻（2005）、ピサヤ諸島を対象とした Ushijima and Zayas らによる研究（1994）のほか、インドネシアにおける漁撈活動を対象とした Akimichi and Supriadi（1996）、西村（1975）らによる研究があげられる。
- 3) おもな研究群には、東南アジアにおける小規模漁業の経営形態を論じた平沢（1977）や岩

- 切 (1979), フィリピンのビサヤ諸島における船主と漁業労働者の雇用関係を論じた Szanton (1981) や川田 (1992), それにインドネシアにおける頭家と漁業者の雇用関係を論じた北窓 (1997) らによる研究がある。
- 4) おもな研究群には、フィリピンのパラワン島におけるサマ人のナマコ漁やタカサゴ漁とその流通を論じた赤嶺 (2000a, 2000b, 2002), 東南アジアにおけるナマコをめぐる漁業と流通を歴史的視点から論じた鶴見 (1990), ハタ養殖とその流通について論じた田和 (1998), フィリピンのビサヤ諸島における魚の加工や流通を扱った Szanton (1972) らによる論考などがある。
- 5) おもな研究には、マレー半島における漁村の経営戦略を論じた飯田 (2004), フィリピンのミンダナオ島の漁村における女性の役割を論じた石井 (1997), ビサヤ諸島における移動漁民の漁業組織を論じた関 (1997), インドネシアにおける漁村経済を論じた北窓 (2000), それにフィリピンにおける漁村経済を論じた鳥飼 (1990) らによる研究などがある。
- 6) おもな研究には、東南アジアを中心とする様々な海域における資源をめぐる紛争について考察した秋道らによる研究群 (秋道・岸上編 2002), 東南アジアの沿岸漁業に着目した山尾 (1997) による論考などがある。
- 7) 「特殊海産物」という用語は鶴見良行によって提唱された用語であるが (鶴見 1987), これまでに多くの論文においてこの言葉が使用されていることから (秋道 1995; 赤嶺 2000a; 田和 1998; 長津 1999 等), すでに一般的に定着した語彙とみなすことが可能である。したがって, 本稿においてもナマコ・高瀬貝・白蝶貝・トコブシ・鱈鱈・アガルアガル (キリンサイ属の海藻) といった, おもに輸出を目的として生産・加工される海産物を「特殊海産物」と称している。
- 8) Warren は陸サマ人と海サマ人とを分類する特徴として, 家船による生活の有無とイスラームの浸透度を指摘している (Warren 1971)。また 19 世紀中頃までに, スルー王国の貴族層に対して社会・経済面で従属的な地位におかれるようになったサマが海サマへ, 比較的自由的な地位を維持し続けたサマが陸サマへと分化したとも考えられている (Stone 1962; Warren 1971)。スルー王国化での階層化という視点から両集団を比較した場合, 海サマが陸サマに対して従属的であった点も見逃せない。
- 9) センボルナの名前は当時の総領事であった Treacher によって命名された (Warren 1971: 61)。
- 10) 山本は, サバ州におけるサマ系住民が, 1960 年代より政治・社会的な優位性を目指す目的から, 「バジャウ」という枠組みにムスリム性を強調する方向で, アイデンティティを高めていった過程を紹介している (山本 2002)。
- 11) 1950 年代以降にセンボルナ半島の市街地周辺に定住化を開始した海サマの変容過程に関しては Sather による研究が詳しい。一方, 1950 年代から 1990 年代末に至るセンボルナ海域における海サマのムスリム化に関しては長津による詳細な論稿がある (長津 2002, 2004)。
- 12) これらには, 1960 年代のスルー諸島において家舟生活をいとんできた海サマの社会構造やその変容に関する Nimmo (e.g. 1968, 1972, 1986) による研究, おなじく 1960 年代にボルネオ島北東部域において家舟居住から定住化しつつあった海サマ社会の変容過程をみつかった Sather (e.g. 1984, 1997) による研究がある。また近年では, 1990 年代のスルー諸島シタンカイ島に居住する海サマ人の漁撈活動や空間認識に関する詳細な民族誌を発表した長津 (1995, 1997) による論稿や, 現代サマの芸能や, 越境的な交易の諸側面などをあつかった床呂 (1992, 1996, 2001) による論稿があげられる。
- 13) ただし, フィリピンのパラワン島やミンダナオ島に居住するサマを対象とした研究の中には, 定住性が高く, 漁撈のほかにも多様な生業に従事するサマ集団を対象とするものがある。たとえば, パラワン島南部に居住する陸サマ系のジャマ・マブンによる生業を対象とした Casino (1976) による論稿, おなじくパラワンの陸サマ系集団によるナマコ漁やダイナマイト漁をみつかった赤嶺 (2000a, 2000b, 2002) による論稿, ミンダナオ島南部において陸にあがったサマ系集団の社会・経済的状況や貧困化をみつかった青山 (2001, 2002) による論稿などがある。
- 14) これらのイノシシはセンボルナ半島から海を泳いで移動・繁殖したものである。イスラームを信仰する現代のサマはブタやイノシシを食べず, 見ることも忌み嫌う傾向が強い。またブンブン島民によれば, 1980 年代以前にはイノシシは島内に生息していなかったという。
- 15) また複数の基本家族が, 漁撈活動の際に結び付いた単位は *pagmunda'* (*munda'* = 「舳先」) と呼ばれるが, それ以外の時にはこうした結び付きを表す方名はない。その繋がりにはリーダーの妻, 姉妹, 母などの女性を中心にして形成される傾向がある。ただしこうした結び付きは,

- 彼らがかつて船上生活を営んでいたときには決して固定的ではなく、流動的で一時的なものでしかなかった (Sather 1984)。その後、彼らが定住化して、杭上家屋に住むようになると、*pagmunda'* を形成した単位が共に住むか、近隣にまとまって住むようになった。
- 16) サマ社会では妻方居住の傾向が強く、子供家族は妻方の両親と同居するが多い。
 - 17) 潜水用の水中眼鏡 (両眼式) が、沖縄の糸満漁民によって使用されたのが1886年であり、糸満漁民らがボルネオオスラウェンを中心とする東南アジア海域で潜水漁をふくむ漁撈活動を開始したのが1910年代である。センボルナ郡でも、1927年に日本人によるボルネオ水産会社の拠点がシアミル島に設置され、沖縄漁民をふくむ100名ちかい日本人漁民がカツオ漁を展開した (望月 2001)。一方、ゴムが製品として普及しだしたのも1900年代以降である (奥山ほか 2000)。これらの事実から水中銃や水中眼鏡による潜水漁の普及は1920年代以降と推測した。
 - 18) フィリピンやインドネシアでは、パンボートは小型の船内機を装備した中型から大型サイズのアウトリガーカヌーを指すのが一般的であるが、アウトリガーカヌーがあまり利用されないセンボルナでは、小型船内機そのものをパンボートと呼んでいる。
 - 19) 記録された漁撈活動の詳細なデータについては本稿末の付録3・4を参照のこと。
 - 20) カニ刺網漁のみは、本稿で対象とする調査村以外の陸サマ村で確認されたものであるが、参考までにデータに加えた。
 - 21) サバ州の漁業報告書によれば、2000年度における活魚類の輸出先は香港が502トンでもっともおおく、ついでマレー半島が69トン、シンガポールが32トン、台湾が19トンと続く (*Laporan Tahunan Perikanan Sabah 2000*)。
 - 22) S村の指導者層による1990年代前半における社会状況、および政治的活動については富沢 (1997) による論考が詳しい。
 - 23) こうした性格は、北窓によって紹介されたインドネシア多島海域のリアウ州ベンガリス県における漁村社会とも共通している (北窓 1997)。

文 献

赤嶺 淳

- 2000a 「熱帯ナマコ資源利用の多様化—フロンティア空間における特殊海産物の一事例」『国立民族学博物館研究報告』25 (1): 59-112。
- 2000b 「ダイナマイト漁に関する一視点—タカサゴ塩干魚の生産と流通をめぐる」『地域漁業研究』40 (2): 81-100。
- 2002 「ダイナマイト漁民社会の行方—南シナ海サンゴ礁からの報告」秋道智彌、岸上伸啓編『紛争の海—水産資源管理の人類学』pp. 84-106, 東京: 人文書院。

Akimichi, T.

- 1978 The Ecological Aspect of Lau (Solomon Islands) Ethnoichthyology. *Journal of Polynesian Society* 87 (4): 301-326.

秋道智彌

- 1995 『海洋民族学—海のナチュラリストたち』東京: 東京大学出版会。

秋道智彌・岸上伸啓編

- 2002 『紛争の海—水産資源管理の人類学』東京: 人文書院。

Akimichi, T. and D. Surpriadi

- 1996 Marine Resources Use in the Bajo of North Sulawesi and Maluku, Indonesia. In Akimichi, T. (ed.) *Coastal Foragers in Transition*, pp. 105-120. Senri: National Museum of Ethnology.

Anell, B.

- 1955 *Contribution to the History of Fishing in the Southern Seas*. Studid Ethnographica Upsaliensia 9.

Anwar S. and C. Leong

- 1981 Commemorative history of Sabah, 1881-1981. Kota Kinabalu: Sabah State Govt., Centenary Publications Committee.

- 青山和佳
 2001 「ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程——経済的福祉とエスニック・アイデンティティの観点から」『東南アジア研究』38 (4): 552-587。
 2002 「ダバオ市におけるバジャウの不平等化——主観的評価による社会的地位の序列に関する分析」『アジア経済』43 (5): 2-29。
- Bellwood, P.
 1997 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Revised Edition. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Casino, E.
 1976 *The Jarna Mapun: A Changing Samal Society in the Southern Philippines*. Manila Ateneo de Manila University Press.
- Firth, R.
 1946 *Malay Fishermen: Their Peasant Economy*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- 平沢 豊
 1977 『東南アジアの漁業開発——ASEAN を中心として』東京：アジア経済研究所。
- Hobsbawm, E. and T. O. Roger (eds.)
 1983 *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hornell, J.
 1950 *Fishing in Many Waters*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 市川光雄
 1977 「宮古群島大神島における漁撈活動——民族生態学的研究」加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編『探検・地理・民族誌』pp. 495-533, 東京：中央公論社。
- 飯田 卓
 2001a 「マダガスカル南西海岸部における漁家経済と農家経済——生業と食生活の分析から」『アフリカ研究』57: 37-54。
 2001b 「マダガスカル南西部ヴェズにおける漁労活動と漁家経済」『国立民族学博物館研究報告』26 (1): 79-129。
 2004 「マレーシア東海岸における小規模漁民の経営と魚種選択」『地域漁業研究』44 (3): 1-22。
- 石井正子
 1997 「ムスリム漁村における女性の仕事の変容——フィリピン南コタバト地方沿岸」『上智アジア学』15: 41-63。
- 岩切成郎
 1979 『東南アジアの漁業経済構造』東京：三一書房。
- Jabatan Perangkaan Malaysia
 1999 *Buku Tahunan Perangkaan 1999*. Kotakinabalu: Jabatan Perangkaan Malaysia.
- Jones, L. W.
 1960 *North Borneo, Census of Population Taken on 10th August, 1960*. Kuching: Government Printing Office.
- 川田牧人
 1992 「島のうちそと——フィリピン・ピサヤ小島漁業展開誌」『民族学研究』57 (3): 345-357。
- Kurais, M.
 1975 *Boat Building of the Sama*. *Mindanao Journal* 1 (4): 67-125.
- 北窓時男
 1997 「インドネシアにおける漁民の集合原理に関する一考察——リアウ州ベンカリス県の事例から」『上智アジア学』15: 65-82。
 2000 『地域漁業の社会と生態：海域東南アジアの漁民像を求めて』東京：コモンズ。
- Kuchikura, Y.
 1977 *An Ecological Approach to the Fishing Activity System of a Coral Island Community in Okinawa*. *The Journal of Human Ergology* 3: 105-130。
- 口蔵幸雄・野中健一・須田一弘・須田和代
 1997 「移住と生業戦略：インドネシア、セラム島の農村における生業活動と食物利用」『国立民族学博物館研究報告』22 (2): 425-459。

- 小野 ボルネオ島サマ人による漁撈の「近代化」と「伝統」
- Laarhoven, R.
1990. Lords of the Great River: The Magindanao Port and Polity during the 17th Century. In J. Katherithamy-Wells, and J. Villiers (eds.) *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*, pp. 161–185. Singapore, Singapore University Press.
- 前田成文
1989 『東南アジアの組織原理』東京：劉草書房。
- Malaysia, Department of Statistics
1972 *Laporan Am Banci Penduduk 1970*. Kuala Lumpur: Department of Statistics, Malaysia.
1981 *Laporan Am Banci Penduduk 1980*. Kuala Lumpur: Department of Statistics, Malaysia.
2001 *Laporan Am Banci Penduduk 2000*. Kuala Lumpur: Department of Statistics, Malaysia.
- Masse, W. B.
1990 The Archaeology and Ecology of Fishing in the Belau Islands, Micronesia. Ph.D. Thesis, Southern Illinois University.
- 望月雅彦
2001 『ボルネオに渡った沖繩の漁夫と女工』東京：ボルネオ史料研究室。
- 門田 修
1986 『フィリピンの漂海民—月とナマコと珊瑚礁』東京：河出書房出版。
- 長津一史
1995 「フィリピン・サマの漁撈活動の実態と環境観—民俗環境論的視点から」京都大学人間環境学研究所 東南アジア地域研究講座修士論文。
1997 「海の民サマ人の生活と空間認識—珊瑚礁空間 t'bb'a の位置づけを中心に」『東南アジア研究』35 (2): 261–299。
1999 「海サマとダイナマイト漁」『日本熱帯学会ニューズレター』37: 1–7。
2001 「海と国境—移動を生きるサマ人の世界」村井吉敬編『海のアジア』pp. 173–202, 東京：岩波書店。
2002 「周辺イスラームにおける知の枠組み：マレーシア・サバ州，海サマ人の事例（1950–70年代）」『上智アジア学』20: 173–191。
2004 「『正しい』宗教をめぐるポリティックス：マレーシア・サバ州，海サマ人社会における公的イスラームの経験」『文化人類学』69 (1): 45–69。
- Nimmo, H. A.
1968 Reflections on Bajau History. *Philippine Studies* 16 (1): 32–59.
1972 *The Sea People of Sulu*. San Francisco: Chandler Publishing Company.
1986 Recent Population Movements in the Sulu Archipelago: Implications to Sama Cultural History. *Archipel* 32: 25–38.
- 西村朝日太郎
1975 「インドネシアの漁撈の海洋人類学的考察(1)—特にウォーレス線の社会科学的な意義と関連して」『アジア経済』16 (7): 37–57。
- North Borneo
1891 A Report on the Census of Population Held. London.
1911 A Report on the Census of Population Held. London.
1921 A Report on the Census of Population Held. London.
1931 A Report on the Census of Population Held. London.
1953 A Report on the Census of Population Held on 4th June, 1951. London.
- 奥山通夫・西敏夫・掬谷信三・山口幸一 編
2000 『ゴムの事典』東京：朝倉書店。
- Ono, R.
2003 Prehistoric Austronesian Fishing Strategies: A Tentative Comparison between Island Southeast Asia and Lapita Cultural Complex. Sand, C. (ed.) *Pacific Archaeology: Assessments and Prospects*, pp. 191–201. Noumea: Musees et du Patrimoine de Nouvelle-Caledonie.
2004 Prehistoric Fishing at Bukit Tengkorak, East Coast of Borneo Island. *New Zealand Journal of Archaeology* 24: 77–106.
2006 Ethnoarchaeology of Pottery Stove Production and Use among the Sama, East Coast of Borneo. *People and Culture in Oceania* 22: 31–51.

小野林太郎

- 2001 「ボルネオ島東岸域における新石器時代漁労活動の特色と環境利用圏：魚骨資料の分析とセンボルナ海域での民族調査からの検討」『動物考古学』17: 1-24。
 2004 「ボルネオ島東岸域における新石器時代遺跡の諸特徴とその系譜：遺物組成・生計戦略・立地環境からの比較と検討」『東南アジア考古学』24: 19-53。
 2006 「変わる“生計活動”と変わらぬ“資源利用”：東南アジアの漂海民の場合」印東道子編『西太平洋の生活と文化—環境利用の資源人類学』pp. 105-126, 東京：明石書店。

Pallsen, K.

- 1985 *Culture Contact and Language Convergence*. Linguistic Society of the Philippines, Monograph Series, No. 24, Manila: Linguistic Society of the Philippines.

Sather, C.

- 1984 *Sea and Shore People: Ethnicity and Ethnic Interaction in Southern Sabah*. *Contributions to Southeast Asian Ethnography* 3: 3-27.
 1997 *The Bajau Laut: Adaptation, History and the Fate in a Maritime Fishing Society of South-eastern Sabah*. Oxford: Oxford University Press.

Spoehr, A.

- 1980 *Protein from the Sea: Technological Change in Philippine Capture Fisheries*. Ethnology Monographs No. 3. Pittsburgh: University of Pittsburgh.

関 恒樹

- 1997 「フィリピン・ビサヤ地方の移動漁民に関する一考察」『民族学研究』62 (3): 294-314。

Stone, R. L.

- 1962 *Intergroup Relations among the Taosug, Samal and Badjaw of Sulu*. *Philippine Sociological Review* 10 (3-4): 107-133.

須田一弘

- 2006 「サンゴ礁の人と魚：オセアニアの海産資源とその利用」印東道子編『西太平洋の生活と文化—環境利用の資源人類学』pp. 37-60, 東京：明石書店。

Szanton, M.

- 1972 *A Right to Survive: Subsistence Marketing in a Lowland Philippine Town*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press.
 1981 *Estancia in Transition: Economic Growth in a Rural Philippine Community*. Manila: Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University.

田和正孝

- 1997 『漁場利用の生態—文化地理学的考察』福岡：九州大学出版会。
 1998 『ハタが動く—インドネシアと香港をめぐる広域流通』秋道智彌・田和正孝『海人たちの自然誌』pp. 33-55, 西宮：関西学院大学出版会。

寺田勇文

- 1996 「スルー海域のサマ族—海洋民の『国民化』過程をめぐって」綾部恒雄編『国家の中の民族—東南アジアのエスニシティ』pp. 217-252, 東京：明石書店。

寺嶋秀明

- 1977 「久高島の漁撈活動—沖縄諸島の一沿岸漁村における生態人類学的研究」伊谷純一郎, 原子令三編『人類の自然誌』pp. 167-239, 東京：雄山閣出版。

富沢寿勇

- 1997 「東南アジア海域世界の国家と海洋民」塩田光喜編『海洋島嶼国家の原像と変貌』pp. 237-262, 東京：アジア経済研究所。

辻 貴志

- 2005 「パラワン島南部におけるモルボグの漁撈活動の展開—焼畑低迷後の市場化とその今日的意義」『エコソフィア』16: 73-86。

鶴見良行

- 1987 『海道の社会史』東京：朝日新聞社。
 1990 『ナマコの眼』東京：筑摩書房。

床呂郁哉

- 1992 「海のエスノヒストリー」『民族学研究』57 (1): 1-20。

小野 ボルネオ島サマ人による漁撈の「近代化」と「伝統」

1996 「アガマ（宗教）をめぐる『日常の政治学』」『社会人類学年報』22: 81-104。

2001 『越境』東京：岩波書店。

鳥飼行博

1990 「フィリピン漁村の経済構造」『東南アジア研究』27 (4): 406-426。

1993 「フィリピン漁業の雇用吸収力とアングラ経済」『アジア経済』36 (1): 60-79。

Ushijima, I. and C. N. Zayas ed.

1994 *Fishers of the Visayas*. Quezon City: University of the Philippine Press.

Warren, F.

1971 *The North Borneo Chartered Company's Administration of the Bajau, 1878-1909*. Center for International Studies, Southeast Asia Series, No. 22. Athens: Ohio University Press.

1981 *The Sulu Zone 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: Singapore University Press.

山尾政博

1997 「東南アジアの沿岸漁業管理をめぐる潮流」『地域漁業研究』37 (3): 361-376。

山本博之

2002 「英領北ボルネオ（サバ）におけるバジャウ人アイデンティティの形成」『東南アジア—歴史と文化』31: 57-78。

Laporan Tahunan Perikanan Sabah 1975-1989. Kotakinabalu: Jabatan Perikanan Sabah, 1976-1990.

Laporan Tahunan Perikanan Sabah 1992-2000. Kotakinabalu: Jabatan Perikanan Sabah, 1993-2001.

付録1

S村(20)における世帯調査結果

番号	家族数	総人数	世帯主 年齢	生業	内容	月収	船数	ボツゴ	テン ペル	構造船	船外機	網	釣り糸	ヤス	水中銃	眼鏡	車	テレビ	洗濯機	冷蔵庫		
1	1	7	41	仲買	仲買+村長職	2,000	1	0	1	0	30/50hp	1	10	4	1	1	0	1	0	0		
2	1	6	50	農業	果樹栽培+村長職	700	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0		
3	2	10	78	複合	工場労働+オマコ漁	1,000	1	0	1	0	0	0	5	2	1	1	0	2	0	0		
4	1	11	60	漁撈	アガルアガル栽培	800	2	1	1	0	15hp	0	2	2	1	2	0	1	0	0		
5	2	5	60	漁撈	アガルアガル栽培	1,000	1	0	1	0	0	0	6	1	0	1	0	1	0	0		
6	1	15	50	漁撈	築漁+船建造	800	0	0	0	1	115hp	1	3	2	1	1	0	1	1	0	0	
7	1	5	77	漁撈	アガルアガル栽培	400	1	0	1	0	15hp	1	0	0	1	1	0	1	1	0	0	
8	2	6	80	無職	アガルアガル栽培	500	1	0	1	0	15hp	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	
9	1	2	60	無職	釣漁	0	1	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	0	0	
10	3	9	60	複合	輪送・店・農園	1,000	1	0	1	0	5/98hp	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	
11	2	10	38	漁撈	アガルアガル栽培	600	2	0	2	0	78hp	0	3	1	1	1	0	0	0	0	0	
12	2	9	40	仲買	仲買+店	1,200	1	0	1	0	75hp	0	0	5	1	0	1	1	0	0	0	
13	2	4	59	漁撈	アガルアガル栽培	500	1	0	1	0	18hp	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	
14	3	16	40	複合	絵与労働(海業省)	600	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	
15	1	10	70	漁撈	アガルアガル栽培	400	0	0	0	0	0	0	4	2	0	1	0	1	1	0	0	
16	2	9	48	仲買	仲買+店+村長職	2,000	2	0	1	1	75/115hp	0	2	2	1	3	0	1	1	1	0	0
17	1	3	53	漁撈	ダイナマイト漁	600	1	0	1	0	9.8hp	0	10	2	0	1	0	1	0	0	0	0
18	1	2	70	漁撈	釣り漁	100	1	0	1	0	5hp	0	3	2	0	1	0	0	0	0	0	0
19	1	2	70	漁撈	アガルアガル栽培	400	1	0	1	0	5.5hp	0	5	2	0	1	0	0	0	0	0	0
20	1	3	60	無職	釣り漁	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0

H村(37)における世帯調査結果

番号	家族数	総人数	世帯主 年齢	生業	内容	月収	船数	ボツゴ	テン ペル	構造船	船外機	網	釣り糸	ヤス	水中銃	眼鏡	車	テレビ	洗濯機	冷蔵庫		
1	3	16	51	漁撈	網漁	400	1	0	1	0	9.8hp	1	10	2	0	1	0	1	1	0	0	
2	4	18	43	漁撈	釣り漁	570	2	0	2	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	0	0	
3	2	7	60	漁撈	釣り漁	411	2	1	1	0	6hp	0	2	2	0	1	0	1	0	0	0	
4	1	3	39	漁撈	釣り漁	200	1	0	1	0	6hp	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	
5	2	5	80+	漁撈	釣り漁	390	1	2	0	0	6hp	0	3	1	0	1	0	1	2	0	0	
6	3	9		漁撈	釣り漁	320	2	0	0	0	0	1	2	0	1	1	0	0	0	0	0	
7	4	18	70+	漁撈	網漁+船建造	470	2	0	1	1	40hp	1	3	0	1	1	1	0	1	1	1	1
8	2	5	40+	漁撈	釣り漁	300	1	0	0	1	40hp	0	1	0	0	0	1	1	1	1	0	0
9	2	7	60+	漁撈	釣り漁	410	1	0	0	1	40hp	0	2	1	0	0	1	1	1	1	0	0
10	3	18	70	漁撈	釣り漁	660	2	2	0	0	0	0	2	2	0	2	0	1	0	0	0	0
11	1	4	48	漁撈	網漁	550	1	0	1	0	25hp	0	1	2	2	1	0	1	0	0	0	0
12	2	15	50	漁撈	釣り漁	500	1	0	1	0	6/40hp	0	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0
13	5	21	60	漁撈	網漁	820	3	1	1	1	4/40hp	1	10	0	0	2	0	0	0	0	0	0
14	2	6	61	漁撈	網漁	880	2	0	2	0	1	1	10	2	1	2	0	1	1	1	1	1
15	3	13	70+	漁撈	釣り漁	100	1	0	1	0	6hp	0	2	0	0	1	0	1	0	0	0	0

番号	家族数	総人数	世帯主 年齢	生業	内容	月収	船数	ボツゴ	ペン バル	ク ピット	船外機	網	釣り糸	ヤス	水中銃	眼鏡	車	テレビ	洗濯機	冷蔵庫
16	8	28	60+	漁撈	釣り漁	600	2	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
17	1	3	50+	漁撈	釣り漁	250	1	0	1	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	0
18	4	17	79	複合	輸送+漁撈	1,371	5	5	0	0	0	0	1	3	8	0	5	2	0	0
19	2	8	40+	複合	輸送+漁撈	1,100	2	0	1	1	1	0	0	2	1	0	0	0	0	0
20	2	5	50+	複合	輸送+漁撈	400	2	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
21	2	12	40+	複合	輸送+漁撈	740	1	0	0	1	0	0	1	10	1	0	1	0	0	0
22	3	14	80+	複合	賃金+漁撈	3,000	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1	1	1
23	3	16	50+	複合	賃金+漁撈	1,277	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	1	1
24	4	20	70+	複合	賃金+漁撈	1,500	2	1	1	0	0	0	0	10	1	1	1	1	1	1
25	3	11	35	複合	賃金+漁撈	800	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	1	1	1
26	3	20	80+	複合	賃金+輸送+漁撈	680	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	1	0	1	1
27	6	21	50+	複合	輸送+漁撈	400	2	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
28	2	8	60+	複合	賃金+漁撈	1,050	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
29	3	16	41	仲買	賃金+漁撈	3,500	2	0	2	0	0	0	2	0	0	1	0	1	0	0
30	3	10	40+	仲買	仲買+店	600	1	0	0	1	0	0	1	3	2	0	1	1	0	1
31	4	11	68	無職	なし	150	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
32	1	2	50+	無職	なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
33	1	8	40+	賃金	警備員	550	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	1
34	3	10	64	賃金	公務員	580	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	1	0
35	1	9	40+	賃金	政党活動	400	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1

オマダル島・海サマ集落 (20) における世帯調査結果

番号	家族数	総人数	世帯主 年齢	生業	内容	月収	船数	ボツゴ	ペン バル	ク ピット	船外機	網	釣り糸	ヤス	水中銃	眼鏡	車	テレビ	洗濯機	冷蔵庫
1	1	4	46	漁撈	網漁	500	2	1	1	0	0	15hp	1	0	1	0	0	0	0	0
2	2	5	32	漁撈	網漁+ナマコ漁	600	1	1	0	0	0	0	1	5	1	0	1	0	0	0
3	2	16	42	漁撈	網漁+ナマコ漁	1,000	2	1	1	0	0	7hp	1	25	1	0	3	0	0	0
4	3	13	60+	漁撈	網漁	500	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	1	4	49	漁撈	網漁	150	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	2	4	45	漁撈	網漁	1,300	2	1	0	1	0	10hp	1	0	0	0	2	0	0	0
7	3	9	48	漁撈	網漁	500	2	1	0	1	0	22hp	1	0	0	1	0	0	0	0
8	2	9	60+	漁撈	網漁	300	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
9	2	8	30+	漁撈	釣り漁+延縄漁	450	2	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
10	2	8	30	漁撈	網漁・釣り漁	300	2	1	0	1	0	22hp	1	2	0	0	0	0	0	0
11	2	6	40+	漁撈	網漁+シヤコ貝採集	300	2	1	0	1	0	33hp	1	0	1	1	0	0	0	0
12	1	6	40+	漁撈	釣り漁+海藻採集	500	1	0	1	0	0	0	0	10	1	2	0	0	0	0
13	4	12	50+	漁撈	釣り漁+海藻採集	600	1	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
14	1	9	40	漁撈	釣り漁	500	1	1	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0
15	1	4	45+	漁撈	網漁+釣り漁	900	1	0	1	0	0	0	1	2	0	0	1	0	0	0
16	1	6	40+	漁撈	網漁+釣り漁	650	2	2	1	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0
17	1	4	30+	漁撈	釣り漁+海藻採集	550	2	1	1	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0
18	2	7	40+	漁撈	網漁+海藻採集	900	2	1	1	0	0	7hp	1	5	1	0	1	0	0	0
19	2	7	30+	漁撈	釣り漁+ナマコ漁	250	1	0	1	0	0	6hp	0	2	1	0	1	0	0	0
20	2	7	40+	仲買	仲買業+ナマコ漁	1,000	2	1	0	1	0	33hp	0	2	0	1	0	0	0	0

付録2 R氏家で記録された漁撈活動(2004年6/24~6/29, 11/6~25)

番号	日時	村名	漁種	漁法名	漁師	人数	出漁時刻	月齢期	潮汐期	潮の状態
1	6.24.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	9:00	6	中潮	満ち潮
2	6.24.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	9:00	6	中潮	満ち潮
3	6.25.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	7	小潮	?
4	6.25.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	10:00	7	小潮	満ち潮
5	6.25.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	10:00	7	小潮	満ち潮
6	6.26.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	8	小潮	?
7	6.26.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	9:00	8	小潮	満ち潮
8	6.28.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:00	10	長潮	引き潮
9	6.28.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	3	5:00	10	長潮	引き潮
10	6.29.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:00	11	若潮	引き潮
11	6.29.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:35	10	若潮	引き潮
12	11.06.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	6:00	23	小潮	干潮
13	11.06.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	23	小潮	満ち潮
14	11.06.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	23	小潮	満ち潮
15	11.06.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	23	小潮	満ち潮
16	11.06.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	23	小潮	満ち潮
17	11.07.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	24	小潮	満ち潮
18	11.07.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	0:00	24	小潮	満ち潮
19	11.07.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	0:00	24	小潮	満ち潮
20	11.07.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	0:00	24	小潮	満ち潮
21	11.09.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:00	26	若潮	引き潮
22	11.09.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:00	26	若潮	引き潮
23	11.10.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	6:00	27	中潮	引き潮
24	11.10.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	6:00	27	中潮	引き潮
25	11.10.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	27	中潮	満潮
26	11.11.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:00	28	中潮	満潮
27	11.12.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	6:00	29	大潮	引き潮
28	11.12.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	1	6:00	29	大潮	引き潮
29	11.12.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	6:00	29	大潮	引き潮
30	11.12.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	6:00	29	大潮	引き潮
31	11.12.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	6:00	29	大潮	引き潮
32	11.13.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	1	5:00	0.5	大潮	引き潮
33	11.13.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:00	0.5	大潮	引き潮
34	11.13.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:00	0.5	大潮	引き潮
35	11.13.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:00	0.5	大潮	引き潮
36	11.14.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	6:30	1	大潮	引き潮
37	11.15.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	4:30	2	大潮	引き潮
38	11.15.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	1	4:30	2	大潮	引き潮

帰村時刻	潮の状態	合計 (h)	漁獲量 /kg	漁獲された水族
19:00	満ち潮	8	14	フエフキダイ
19:00	満ち潮	8	16	フエフキダイ・ベラ
11:30	満潮	12+	4	ボラ
19:30	満ち潮	8	11	フエフキダイ
19:30	満ち潮	8	6	フエフキダイ
9:00	満ち潮	12+	56	アイゴ 54kg・ボラ 2kg
21:00	満ち潮	12	22	ゴマアイゴ・クサビベラ・ヤシャベラ等
14:00	満ち潮	8+	54	アイゴ・ハタ等
14:30	満ち潮	8+	10	アイゴ (大) 7匹・ハタ・フエフキダイ・クサビベラ
14:00	満ち潮	8	23	アイゴ・フエフキダイ
14:30	満ち潮	8	12	フエフキダイ 70匹・スズメダイ 16匹他
10:30	満ち潮	4	6	フエフキダイ
11:00	満ち潮	12+	14	フエフキダイ・ハタ
11:00	満ち潮	12+	58	フエフキダイ 54kg・アイゴ (大) 4kg
11:30	満ち潮	12+	47	ゴマアイゴ
11:30	満ち潮	12+	8	ゴマアイゴ
11:00	満ち潮	12+	51	アイゴ 40kg・ブダイ・ベラ・アジ等
6:00	満潮	30+	46	アジ科 36kg・マアジ 10kg
6:00	満潮	30+	47	アジ科 42kg・ブリ 5kg
13:30	満ち潮	12+	23	アイゴ 20kg・その他 3kg
13:30	干潮	7	17	ブチアイゴ
18:00	満潮	12+	38	フエフキダイ・イトヨリダイ・スズメダイ
13:00	満ち潮	6	5	フエフキダイ
13:00	満ち潮	6	15	フエフキダイ
16:00	満潮	20	39	フエフキダイ 36kg・アイゴ 3kg
13:00	干潮	6	43	アイゴ 11kg・ゴマアイゴ 12kg・フエフキダイ他 20kg
18:00	満潮	10	12	フエフキダイ・ブダイ
16:00	満ち潮	8	48	フエフキダイ・アイゴ
14:00	満ち潮	8	29	ゴマアイゴ
15:00	満ち潮	8	56	フエフキダイ 40kg・ブダイ 16kg
15:00	満ち潮	8	36	フエフキダイ・ブダイ
15:00	満ち潮	8	13	ゴマアイゴ
16:00	満ち潮	9	41	フエフキダイ
16:00	満ち潮	9	27	ゴマアイゴ
16:00	満ち潮	9	31	ゴマアイゴ
14:00	満ち潮	6	37	ゴマアイゴ
16:00	満ち潮	8	35	ゴマアイゴ
16:00	満ち潮	8	25	フエフキダイ

番号	日時	村名	漁種	漁法名	漁師	人数	出漁時刻	月齢期	潮汐期	潮の状態
39	11.15.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	4:30	2	大潮	引き潮
40	11.16.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	4:30	3	中潮	引き潮
41	11.16.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	4:30	3	中潮	引き潮
42	11.18.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	4:00	5	中潮	引き潮
43	11.18.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	4:00	5	中潮	引き潮
44	11.19.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	6	中潮	引き潮
45	11.19.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	6	中潮	引き潮
46	11.19.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	9:00	6	中潮	満ち潮
47	11.19.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	9:00	6	中潮	満ち潮
48	11.19.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	9:00	6	中潮	満ち潮
49	11.20.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	8:00	7	小潮	満ち潮
50	11.20.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	8:00	7	小潮	満ち潮
51	11.20.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	1	8:00	7	小潮	満ち潮
52	11.20.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	8:00	7	小潮	満ち潮
53	11.21.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	7:00	8	小潮	干潮
54	11.21.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	7:00	8	小潮	干潮
55	11.21.04	H	潜水漁	<i>magpana'</i>	陸サマ	1	6:00	8	小潮	干潮
56	11.22.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	7:00	9	小潮	干潮
57	11.22.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	7:00	9	小潮	干潮
58	11.23.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	前夜	10	長潮	?
59	11.23.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	5:00	10	長潮	引き潮
60	11.23.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	5:00	10	長潮	引き潮
61	11.23.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:00	10	長潮	引き潮
62	11.23.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	2	5:00	10	長潮	引き潮
63	11.24.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	5:30	11	若潮	引き潮
64	11.24.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:30	11	若潮	引き潮
65	11.24.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:30	11	若潮	引き潮
66	11.24.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	5:30	11	若潮	引き潮
67	11.24.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	5:30	11	若潮	引き潮
68	11.25.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	18:00	12	中潮	引き潮
69	11.25.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	海サマ	2	6:00	12	中潮	引き潮
70	11.25.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	6:00	12	中潮	引き潮
71	11.25.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	6:00	12	中潮	引き潮
72	11.25.04	H	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	6:00	12	中潮	引き潮

小野 ボルネオ島サマ人による漁撈の「近代化」と「伝統」

帰村時刻	潮の状態	合計 (h)	漁獲量 /kg	漁獲された水族
16:30	満ち潮	8	19	ゴマアイゴ
16:00	引き潮	8	38	フエフキダイ・ブダイ・ヒメジ
14:00	満ち潮	6	28	ゴマアイゴ
16:00	引き潮	6	36	ゴマアイゴ
16:00	引き潮	6	16	ゴマアイゴ・フエフキダイ・ボラ
7:30	満ち潮	8	9	フエフキダイ・ブダイ
8:45	満ち潮	8	26	ゴマアイゴ・フエフキダイ・ブダイ
19:00	満ち潮	8	10	フエフキダイ・ベラ
20:00	満ち潮	9	13	ゴマアイゴ
20:00	満ち潮	9	21	フエフキダイ・ブダイ・ベラ
14:00	引き潮	4	31	ゴマアイゴ
14:00	引き潮	4	35	ゴマアイゴ
14:00	引き潮	4	18	ゴマアイゴ
14:00	引き潮	4	30	ゴマアイゴ
17:00	引き潮	8	18	ゴマアイゴ
19:00	干潮	10	8	ゴマアイゴ
14:00	満ち潮	6	7	タコ
12:30	満ち潮	4	47	ゴマアイゴ
15:30	満ち潮	9	13	ヨスジフエダイ・ハタ・クラビベラ
5:00	引き潮	12	27	フエフキダイ 15 kg・アジ 12 kg
12:30	満ち潮	6	8	フエフキダイ
12:30	満ち潮	6	16	フエフキダイ
13:00	満ち潮	6	59	ゴマアイゴ
13:00	満ち潮	6	10	フエフキダイ
14:00	満ち潮	7	7	フエフキダイ
13:30	満ち潮	6	61	ゴマアイゴ
13:30	満ち潮	6	48	ボラ 16 kg・ヒメジ 12 kg・ブダイ 9 kg・フエフキダイ 6 kg 他
13:00	満ち潮	6	4	フエフキダイ
3:00	翌日	20	20	フエフキダイ 4 kg・フエダイ 1 kg・アイゴ 1 kg・アジ 1 kg
5:00	引き潮	11	51	ゴマアイゴ
15:30	満ち潮	9	29	ゴマアイゴ
15:30	満ち潮	9	15	フエフキダイ
15:30	満ち潮	9	10	フエフキダイ
15:30	満ち潮	9	3	フエフキダイ

付録3 聞き取りによる漁撈活動の記録 (2003-2004年)

番号	日時	村名	漁種	漁法 方名	漁師	人数	出漁 時刻	月齢 期	潮の 状態	天候	開始 時刻	終了 時刻
1	06.19.03	S	採集	<i>magt'bba</i>	陸サマ	3	9:00	19	引き潮	晴れ	9:00	不明
2	06.20.03	S	採集	<i>magt'bba</i>	陸サマ	1	9:30	20	引き潮	晴れ	9:30	不明
3	06.21.03	S	採集	<i>magt'bba</i>	陸サマ	1	10:30	21	引き潮	晴れ	10:30	不明
4	11.27.04	S	採集	<i>magt'bba</i>	陸サマ	3	10:30	27	引き潮	晴れ	11:00	14:00
5	12.12.03	S	ナマコ突漁	<i>anu'</i>	陸サマ	1	22:00	19	引き潮	晴れ	22:45	不明
6	1.05.04	S	ナマコ突漁	<i>anu'</i>	陸サマ	1	20:00	11	引き潮	晴れ	20:20	不明
7	1.24.04	S	手釣り漁	<i>amissi</i>	海サマ	1	7:00	3	引き潮	晴れ	7:30	不明
8	1.24.04	S	手釣り漁	<i>amissi</i>	海サマ	2	7:00	3	引き潮	晴れ	7:30	不明
9	2.03.04	M	カニ刺網	<i>magkagon</i>	陸サマ	1	5:00	12	引き潮	晴れ	5:30	7:30
10	2.03.04	M	カニ刺網	<i>magkagon</i>	陸サマ	1	5:00	12	引き潮	晴れ	5:10	7:10
11	2.03.04	M	カニ刺網	<i>magkagon</i>	陸サマ	1	6:15	12	引き潮	晴れ	6:30	7:35
12	2.05.04	M	カニ刺網	<i>magkagon</i>	陸サマ	1	6:15	14	引き潮	晴れ	6:25	6:50

付録4 直接観察による漁撈活動の記録 (2003-2004)

番号	日時	村名	漁種	漁法 方名	漁師	人数	出漁 時刻	月齢 期	潮の 状態	天候	漁場 A	漁場 B	漁場 C
1	11.12.03	S	採集	<i>magt'bba</i>	陸サマ	4	8:00	18	引き潮	雨	8:30	8:45	
2	12.20.03	S	刺突漁	<i>anu'</i>	陸サマ	2	20:00	28	引き潮	晴れ	20:15		
3	12.21.03	S	採集	<i>mag-palang</i>	陸サマ	1	20:00	29	引き潮	晴れ	20:10		
4	11.27.04	S	採集	<i>magt'bba</i>	陸サマ	2	10:30	27	引き潮	晴れ	11:00		
5	1.05.04	S	手釣り漁	<i>amissi</i>	陸サマ	1	20:00	11	引き潮	晴れ	20:15	23:15	
6	1.15.04	S	潜水漁	<i>magpana'</i>	陸サマ	1	15:00	22	干潮	晴れ	15:05		
7	1.16.04	S	潜水漁	<i>magpana'</i>	陸サマ	1	11:00	23	引き潮	晴れ	11:30		
8	1.19.04	S	手釣り漁	<i>amissi</i>	海サマ	5	7:20	26	引き潮	晴れ	8:00	9:40	12:10
9	1.21.04	S	潜水漁	<i>magpana'</i>	陸サマ	1	13:00	29	満ち潮	晴れ	13:20		
10	1.22.04	S	イワシまき網	<i>magalemak</i>	海サマ	4	8:10	1	引き潮	晴れ	9:15	11:00	13:10
11	1.23.04	S	潜水漁	<i>magpana'</i>	陸サマ	1	11:00	2	干潮	晴れ	11:10		
12	1.24.04	S	潜水漁	<i>magpana'</i>	陸サマ	1	11:30	3	干潮	晴れ	11:35		
13	2.03.04	M	カニ刺網	<i>magkagon</i>	陸サマ	1	6:30	12	引き潮	晴れ	6:37		
14	2.05.04	M	カニ刺網	<i>magkagon</i>	陸サマ	1	6:30	14	引き潮	晴れ	6:45		
15	2.06.04	M	カニ刺網	<i>magkagon</i>	陸サマ	1	6:15	15	引き潮	晴れ	6:25		
16	2.08.04	S	イワシまき網	<i>magalemak</i>	海サマ	3	9:20	17	引き潮	晴れ	9:55	10:40	12:20
17	6.29.04	H	刺網漁	<i>maglinggi'</i>	陸サマ	2	5:35	10	引き潮	晴れ	7:15	13:00	

帰村時刻	潮の状態	合計(h)	漁獲数 ／匹	漁獲量 ／kg	漁獲された水族
10:00	干潮	1	90	5.8	ウニ 50 匹・貝 40 匹 (スイショウガイ科)・シャコ 1 匹
11:30	干潮	2	90	1.9	貝 90 匹 (スイショウガイ科)
13:30	満ち潮	3	54	3.5	ウニ 42 匹・ナマコ 11 匹
14:30	満ち潮	4	310	2.4	ウニ 300 匹・ナマコ 10 匹
3:30	満ち潮	5	90	2.5 (乾)	ナマコ 90 匹
3:00	満ち潮	7	73	2.1 (乾)	ナマコ 73 匹
16:00	満ち潮	9	150	15	イトヨリダイ 100 匹・フエダイ 30 匹・ハタ 20 匹
15:00	満ち潮	8	50	5	イトヨリダイ 30 匹・ハタ 5 匹
8:00	引き潮	3	27	4.5	カニ 27 匹
7:20	引き潮	2.5	11	2	カニ 11 匹
7:50	引き潮	2	4	0.8	カニ 4 匹
7:00	引き潮	0.5	32	5	カニ 25 匹・ロブスター 7 匹

帰漁時刻	帰村時刻	潮の状態	合計(h)	漁獲数 ／匹	漁獲量 ／kg	漁獲詳細
11:45	12:30	満ち潮	4	100	4	ウニ 100 匹
22:15	22:30	引き潮	2.5	49	2	アイゴ・ダツ・コチ
22:00	22:10	引き潮	2	21	1	アイゴ・ダツ
14:00	14:30	満ち潮	4	310	2.9	ウニ 300 匹・ハリセンボン 10 匹
0:00:00	24:20:00	満ち潮	4.5	2	0.5	イカ 2 匹
17:50	18:00	満ち潮	3	13	3	クサビベラ 6 匹・スズメダイ 5 匹・コショウダイ 1 匹・アイゴ 1 匹
14:30	15:00	満ち潮	4	12	3	ブダイ 5 匹・ベラ 1 匹・コショウダイ 1 匹・コロダイ 1 匹・シマイサキ 3 匹
12:45	13:45	干潮	5.7	130	15	イトヨリダイ
15:00	15:20	満ち潮	2	1	0.3	シマイサキ 1 匹
14:20	15:00	満ち潮	7	多数	23	イワシ
13:50	14:10	満ち潮	3	30	6	クサビベラ 30 匹
16:15	16:30	満ち潮	5	25	6	クサビベラ 22 匹・ハタ 2 匹・ヒメジ 1 匹
7:10	7:20	引き潮	1	6	1.2	カニ 5 匹・アイゴ 1 匹
7:40	7:45	引き潮	1	25	3	カニ 25 匹・アイゴ 1 匹・エイ 4 匹・ヒラメ 2 匹・貝 6 個
6:50	7:00	引き潮	0.5	18	2.5	カニ 16 匹・エイ 2 匹・マンジュウダイ 2 匹・マングローブカニ 1 匹
14:20	14:50	干潮	5	0	0	収穫なし
13:15	14:00	干潮	7.5	118	12	フエフキダイ 70 匹・スズメダイ 16 匹・クサビベラ 4 匹・ヒメジ 8 匹・ブダイ 3 匹など